

第360図 調査区配置図



第361図 第4遺構面 全体図

第2節 基本層序

旧地表面

松江城下町の下層には広い範囲で旧表土層と考えられる黒色粘土の堆積が認められており、自然堆積層と城下町造成土を見分ける際の鍵層となっている。⁽¹⁾ この層は同一レベルに堆積しているわけではなく、第363・364図に示すとおり、調査事例の多い城山北公園線改良工事予定地内の城下町遺跡でその標高を比較すると、松江城に近い西側の殿町191-13外遺跡で標高0.79m前後、東に向かうに従って徐々に低くなり、東端の南田町134-11遺跡では-0.25mを測る。今回の調査地においても標高0.88～0.93mの高さで黒色粘土(第362図19層)の堆積を確認しているが、これは付近の調査例と比較すると比較的高い位置で検出されたことになる。黒色粘土の下には灰色シルト層(上層)、青灰色シルト層(下層)が堆積しており、これも周辺の城下町遺跡と同様の層序であった。

第4面の形成土

自然堆積層の上層に盛られた造成土については同じ敷地内であっても一様ではなく、非常に複雑な堆積状況を示していた。これは場所により土地利用状況が異なり、狭い範囲での造成や細かな掘り直しを繰り返したためと考えられる。細かな堆積状況については省略することとし、ここでは基本となる土層の説明に留める。まず、自然堆積層直上の第18層が第4遺構面の基盤となる造成土(以下、形成土)であり、この上面に礎石や柱穴など第4遺構面の遺構が形成されている。北屋敷の最終遺構面の形成土が山を削って運び込まれた黄色を呈する松江層の軟砂岩であるのに対し、南屋敷では黒色粘土、灰色シルト、青灰色シルトを主体とする純然たる沖積地の土層である。造成土の供給元としては第4節で述べる素掘りの大溝や内堀などを掘削した際に生じた残土が第一に考えられる。このことは、屋敷削後の造成についてはそれぞれの屋敷ごとに実施した結果を示唆するものかもしれない。

第4面の廃棄

次に、第4遺構面を覆うように検出された第362図5～13層はゴミ層であった。当然、第4面で生活していたときに溜まった土も含まれているが、多量の木片や完形に近い遺物が出土しており、これらは建物を解体した時の壁材や屋根材等の廃棄物と考えられる。建物跡SB03・04の上面で特に厚く堆積しており、この層から出土した遺物は建物の存続期間を考える上で有用な資料である。建物と建物との間隔が狭く、層位的にどの遺物がどの建物から廃棄されたものなのか区別できなかったため、この層から出土した遺物はP434 第6節・第6項で一括して取り扱っている。

第3面の形成土

ゴミ層の上には、南屋敷を覆うように黄色を呈する松江層の軟砂岩(第4層)が厚く盛られていた。付近の丘陵を掘削して運び込まれた山上と思われるが、その供給元は定かではない。この土が第3遺構面の形成土であり、この上面に第3遺構面の遺構が形成されている。基本的にこの黄色土層からは遺物は出土しておらず、造成の時期はその上下から出土した遺物で判断せざるを得ない。一般的に考えて第4面の建物解体後、間をおかずして造成がなされたと考えるのが自然である。

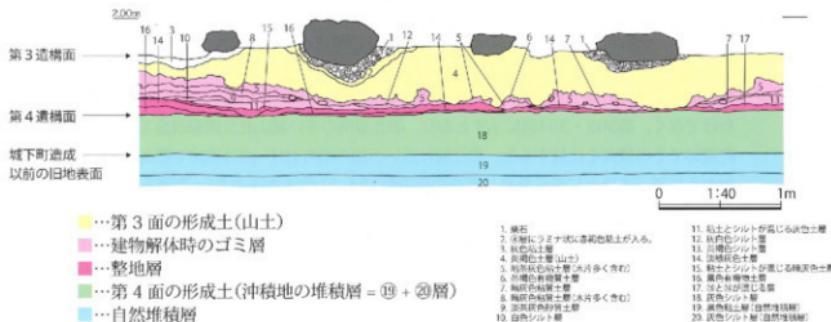


SB03 上面の第3遺構面の形成土



黒色粘土直上の第4遺構面の形成土

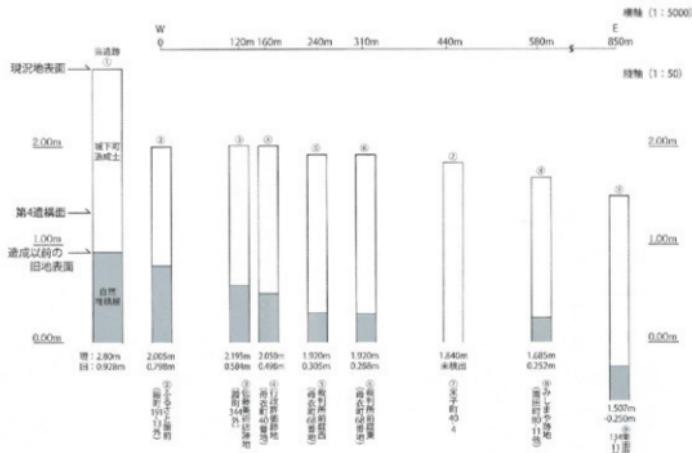
第6章 南屋敷第4遺構面



第362図 SB01北側廻付近の土層堆積状況実測図



第363図 松江圏都市計画図での比較地点 (S=1/10,000)



第364図 現況地盤と黒色粘土の検出高の比較 (横軸=1/5,000・縦軸1/50)

第3節 区画の分類方法

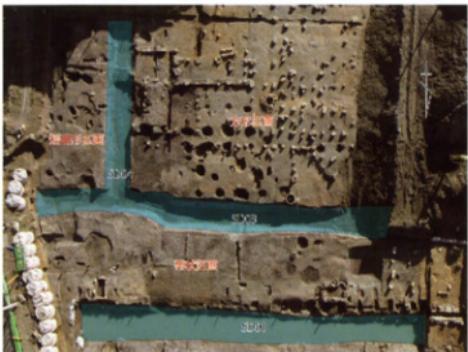
第4面の造成 ここで報告を行う南屋敷の第4造構面は、低湿地に盛土を施して造成された最初の造構面であり、その開始時期は堀尾氏が月山富田城（現：安来市広瀬町）から末次郷（現：松江市殿町）へ城地を移した17世紀初頭に造成されたものと考えている。ただし、松江城下町造成の期間を記した記録は残っておらず、正確な造年代は分かっていない。^② 幕府の承認のもと城と共に計画的に建設された城下町であり、松江城の築城が慶長12（1607）年に着工、同16（1611）年頃に完成していることを考えると、城下町の造成もこれと同時か、あまり間をおかずに行われたものであろう。この造構面が存続した期間については様々な解釈ができるものの、遅くとも京極氏に代わって松平氏の治世となる寛永15（1638）年には廃絶され、第3造構面に生活の舞台は移っていたと思われる。

第4面の概要 第4造構面が廃絶されて第3造構面が形成される際には、礎石等の抜き取りはあまり行われず、第362図第4層の黄色土が厚く敷き詰められているため、この黄色土が保護層となり造構の残りは非常に良く過密であった。また、建物解体時に柱や梁などの大形の建築部材は撤去されているが、破材等はそのままの状態で盛土が施されていることから遺物も多量であり、更に低湿地のため土器・陶磁器ばかりではなく、木竹製品・動植物の残渣などその種類も豊富である。

区画の分類・命名 さて、この造構面は造成当初においては素掘りの大溝SD01・03・04により屋敷地が3つに分割された格好になっており、その区画の平面形から便宜的に『帯状区画』『方形区画』『短冊形区画』とした。当然、調査区内における形状からのネーミングであり、屋敷地全域を調査した場合にこの名称がそのまま当てはまるものではない。まず、第5節で扱う『帯状区画』はSD01とSD03に挟まれた細長い空間である。一見すると両側に側溝を伴う道路にも見えることから、現地での調査指導時にはこの帯状区画が屋敷境なのではないかという指摘も受けている。次に、SD03とSD04により仕切られた正方形に近いゾーンを『方形区画（第6節）』としている。ここには屋敷地の主体となる造構が集中しており、区画の大部分は建物で占められている。最後はSD04に仕切られた区画を『短冊形区画（第7節）』とした。調査できたのは区画の北西角部分だけであり、ほとんどが調査範囲外になるため詳細は不明である。方形区画の東側に位置しており、ここは上橋で繋がっている。

区画の変遷 このように、造成当初は3つに分かれていた南屋敷であるが、間もなくSD03が埋められて『帯状区画』と『方形区画』の区分はなくなってしまう。更に、この後にSD04も埋められ、溝による間仕切りのない屋敷地となる。土地利用上の利便性からこうなったものか、溝に代わる遮蔽物がつくれたのか詳細は不明である。当初に設定された土地区画による利用状況がその後の土地利用に与えた影響を考えていく上で、それぞれの区画ごとに造構の詳細を報告することとしたい。

なお、これらのゾーンを分割する素掘りの大溝については別項を設け、第4節で取り扱っている。



区画の名称

第4節 素掘りの大溝

第1項 屋敷境(第365～376図)

調査を引き継いだ時点では調査区を南北に分断する格好で石積溝(P347 第354図 SD01)が存在していた。この石組の水路は造成が繰り返されるたびに改修が加えられ、現在も敷地の境界として機能していた。江戸時代の松江城下絵図では、屋敷と屋敷の境界には明確な界線が引かれ、区画割された屋敷地には藩士の名が記されている。このため、調査区を南北に分断するこの石組の水路が屋敷境の遺構になるものとして調査に取り掛かった。

調査はまずサブトレーナーを設定し、第4遺構面に伴う屋敷境の遺構を確認することから始めた。この結果、石積溝SD01の下から素掘りの溝SD02(新)と素掘りの大溝SD01(古)を検出し、第4遺構面に伴う屋敷境は素掘りの溝であることが判明した。次にこの石積溝を解体し、素掘りの溝を目指して掘り下げを行った。石積溝の解体については第4遺構面の調査の中で実施したが、概要や出土遺物についてはP348 第5章 SD01出土遺物に掲載している。ここでは石積溝の下から検出された屋敷境とそれに関連する遺構について古い遺構から順に記載する。

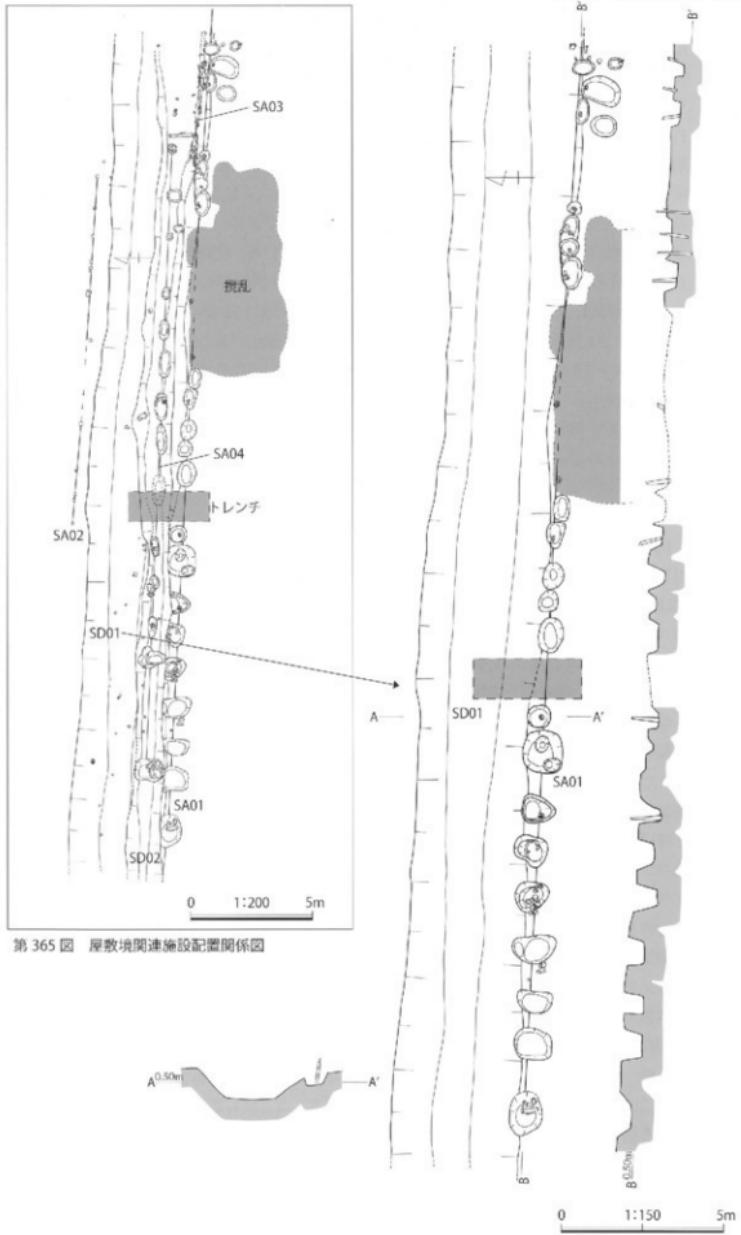
- 初期の屋敷境** SD01 D1区からD4区にかけて検出された城下町造成当初の遺構として位置付けられる素掘りの大溝である。松江城下町遺跡(母衣町68番地⁽³⁾)や松江城下町遺跡(母衣町40番地外⁽⁴⁾)からも同様の大溝が検出されており、今後の調査により資料の蓄積を得たなくてはならないが、低湿地における松江の城下造成にあたっては、まず地割と排水、輸送と防御を兼ねてこのような素掘りの大溝が掘られた可能性を示唆するものである。東西方向に一直線に延びるものであり、主軸は座標軸北から4度ほど東を向き、規模は幅3.15～4.00m、長さ33.7m、深さ1.17mを測る。溝底部での標高は西側が0.178m、東が-0.135mであり、水は西側に近接している内堀ではなく、東の外堀(米子川)方向に向かって流れていると考えられる。



SD01

溝の埋土は流水ラミナ層が観察できることから、自然堆積により埋まっていた時期もあるようだが、大部分は北屋敷から人為的に排出された土砂やゴミで埋められていた。ゴミ層からは肥前系陶器を中心とした国産陶器、中国青花・五彩、土師器皿、金属製品、瓦、植物製品が出土している。特に植物製品は大量に出土しており、漆器挽や下駄などの木製品のほか竹製や草茎製の編物なども出土している。加工痕のある木片は多いものの、流木など非加工品の出土量は少ない。これらの遺物は層位的に弁別することが困難であり、SD01出土遺物として一括して取り上げを行っている。

溝に伴う施設としては、溝の南側肩部から柱穴列SA01を検出している。一部は現代の住宅基礎で消滅している部分もあるが、溝と平行にほぼ一直線に配置されている。柱穴の平面形はいびつな円形を呈し、その規模は差し渡し65～127cm、深さ22.6～70.9cmのものである。この中には径10～15cmほどの柱を有するものが少なからず認められ、崩か檻状の遮蔽施設と考えられる。一方、対面の北側肩部から柱穴列は検出されなかったが、直径6cmほどの杭列SA02を検出している。厳密な規則性は希薄だが、溝の肩部から0.6mほどの位置に溝と平行に打ち込まれており、南側屋敷と比較すると簡単ながら何らかの遮蔽物が存在していたと考えられる。これらの遮蔽施設がいつ頃まで機能していたか分からず、南側肩部から検出された柱の一部はSD02を検出した時点で既に確認できており、素掘りの溝の最終段階まで機能していた可能性が高い。この他、溝の西側部分



第365図 屋敷境関連施設配置関係図

第366図 初期の屋敷境 SD01 実測図

には埋没段階で木杭が不規則に打ち込まれていたが、その便企は定かではない。

遺物の概要と時期 SD01 出土遺物（第 368～375 図） 屋敷境出土遺物のほぼ総てが SD01 から出土したものであり、国産陶磁器、中国磁器、土師器皿、金属製品、瓦、植物製品といった種類のものがある。これら遺物の大部分が北屋敷から人為的に排出された土砂やゴミ層内からの出土であり、溝の存続時期もさることながら、北屋敷で使用された生活用品を知ることのできる資料である。ただし、北屋敷側の大溝肩部に設定された大溝と平行に延びるトレンチにより造成十ヶ地山まで掘り抜かれており、北屋敷の第何面から排出されたものなのか確認できていない。一方の南屋敷における素掘りの大溝の存続は最終面である第 4 遺構面で終息している。肥前陶磁器は生産地年代で 1594～1610 年代の九陶 1-2 期^⑤の陶器が中心であり、鈴縁や折縁形の口縁をもつ二期（1610～1650 年代）の製品も 3 点ほど出土しているが、初期伊万里の出土はない。これら 17 世紀初頭の一群のほか、17 世紀後半～18 世紀前半に位置付けられる陶胎染付碗も出土している。陶磁器以外にも 17 世紀末～18 世紀代と考えられる漆器椀^⑥（2256・2257）や延宝 2（1674）年に発明されたという棧瓦も出土しており、遺物の時期には 2 つのピークがある。しかし、他の遺構との関係から 17 世紀後半まで SD01 が存続していた可能性はなく、大溝埋没後に掘られたゴミ穴を現地で認識できなかったため、一括して取り上げてしまったものと思われる。木製品については峻別が困難なため、時期の違う 2 つの遺構出土のものを掲載している可能性があることをお断わりしておく。以下、遺物の詳細は一覧表に譲ることとし、ここでは概略を記す。

国産陶器 出土した陶磁器には国産陶器と中国磁器があり、国産磁器である初期伊万里の出土はない。ただし、陶胎染付碗 2191 が 1 点出土しているが、前述のとおり上層からの混入品である。国産陶器は 96 片が出土しており、このうち 22 点（2191～2212）を掲載した。肥前陶器の割合が高く、瀬戸・美濃陶器や備前、越前の無釉陶器、產地不明品が混じる。器種構成は、肥前陶器は碗皿類を中心で水呑や片口といった製品も見られる。瀬戸・美濃陶器も碗皿類であり、備前と越前は擂鉢、產地不明品には碗皿類、擂鉢といったものがある。

貿易陶磁 中国磁器は青花碗、白磁皿、五彩皿であり、8 片のうち 2 点（2213・2214）を掲載している。精製のものであり、漆雜ぎの痕跡をもつ破片もある。

土師器皿 ここで上師器皿としたものは、カワラケや近世土師器皿などと呼ばれる比較的小形の土師質の土器皿である。707 点が出土しており、このうち 25 点（2215～2239）を掲載した。当地で在地系と呼ばれる底部外面に糸切り痕をもつクロ形成のものと京都系と呼ばれる非クロ形成のものがあり、大きさには大小がある。灯芯油痕をもつものは灯明皿として利用されたものである。特筆すべきものとして墨書きされたものが 2 点（2234・2235）出土しており、地鎮などの祭祀に関連したものと考えられる。

植物製品 植物製品の大部分が木製品であり、台帳に登録した製品は 247 点であるが、板切れや木端などを含めると出土量はこの数倍に上る。この他、漆が塗られた竹製の編物 2305 や筵と考えられる草茎製の編物も出土している。破片の状態で出土しているものが多く、不明品の割合が最も高い。種類が特定できるものとしては、漆器椀、櫛、人形、舟形、模造刀、羽子板、下駄、柄杓、曲物、桶・樽、膳、箸、筈、荷札木簡など多岐にわたる。不明品以外で出土量の多いものに桶樽類の部材と漆器椀があり、漆器椀は高台内に「×」「—」「△」など所有者を区別するために付けられたと思われる印をもつものの割合が高い。2254 は底に穴を開けて漏斗として転用したものである。木簡 2259 は頂部に「×」印が付けられているものあり、文字は判然としないが、「平左衛門」と読むことができる。

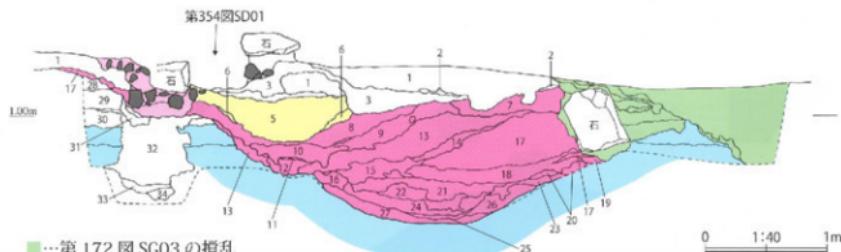
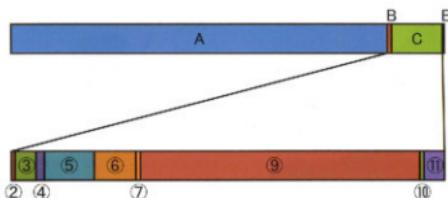
金属製品 金属製品は用途不明のものが 3 点出土している。2306 は孔が開いており、錆留めを利用して利用する

飾り金具のようなものと考えられる。2307は断面U字状を呈する針金状の不明品である。2308は孔が開けられており、先端に向かってJ字状に緩やかに曲がる。掛け金具のようなものか。

瓦 瓦は186点・36.3kgが出土しており、このうち4点(2309～2312)を掲載した。出土した瓦の内訳は、丸瓦72点・16.03kg、平瓦113点・20.17kg、不明品1点・0.1kgである。丸瓦はコビキBが主体であるが、コビキAと思われる小片も1点ほど混じる。また、平瓦の中には棟瓦の破片が2点ほど混じっている。

表20 屋敷境SD01出土陶器破片数一覧表

名称	種片数	割合%	BCDの内訳	種片数	割合%
A 丸瓦	707	86.7	① 中国青磁	0	0.0
B 中国産陶器	8	1.0	② 中国白磁	1	1.0
C 中国陶器	96	11.8	③ 中国青花	5	4.8
D 中国陶器か小物	0	0.0	④ 中国五彩等	2	1.9
E 踏入品	4	0.5	⑤ 濱戸 ⁴ 美濃	12	11.5
合計	815	100.0	⑥ 備前	10	9.6
			⑦ 錦前	1	1.0
			⑧ 欅宮御用御器	0	0.0
			⑨ 肥前系陶器	67	64.4
			⑩ 不明陶器	1	1.0
			⑪ 不明器	5	4.8
			⑫ 不明磁器	0	0.0
			合計	104	100.0



- …第172図 SG03の搅乱
- …第354図 SD01の裏込め?
- SD02埋土
- SD01埋土
- 自然堆積層



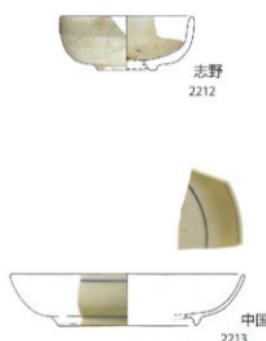
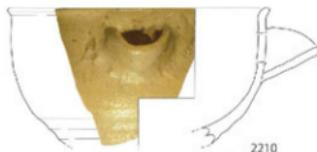
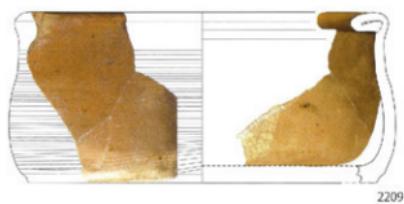
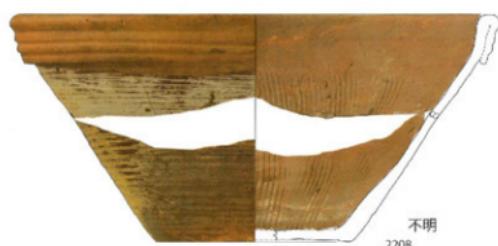
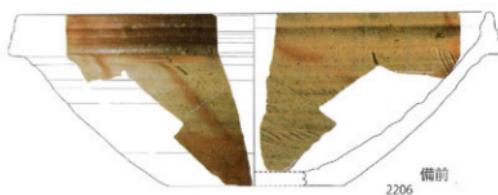
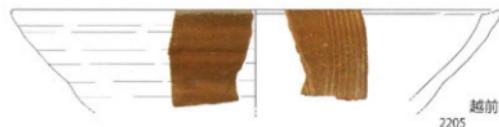
- 1. 棚松井跡土層
- 2. 深糞の白シート層
- 3. 深糞の黒糞土層
- 4. 深オリーブ色糞土層
- 5. 黄褐色土層
- 6. 黑褐色有機質土層
- 7. 黄オリーブ色糞土層
- 8. 緑オリーブ色糞土層
- 9. ⑨の土と深糞の白シート
- 10. ⑩の土と深糞の黒糞
- 11. 灰白色シート層
- 12. 緑オリーブ色糞土層
- 13. ⑯より引かれていた層
- 14. 緑オリーブ色糞土に夾が混じる層
- 15. ⑮の土と深糞の黒糞
- 16. ⑯の土と深糞の白シート層
- 17. 深糞の白シート層
- 18. 緑オリーブ色糞土層
- 19. ⑯の土と深糞の黒糞
- 20. ⑩の土
- 21. ⑪と⑫の棚松井
- 22. ⑭の土と深糞土
- 23. ⑮の土層
- 24. 黄色粘土
- 25. 黄色細粒土層
- 26. ⑯の土の混合土層
- 27. ⑯の土層
- 28. 黄褐色と茶褐色糞の混合土層
- 29. 黄褐色に茶褐色土層の混合
- 30. 黄色シート層
- 31. 黄色土層
- 32. ⑯の土が多くなる層
- 33. ⑯の土の混合土層
- 34. 黄褐色土層
- 35. 黑色粘土層(自然堆積層)
- 36. 黄色シート層(自然堆積層)

第367図 SD01土層断面図



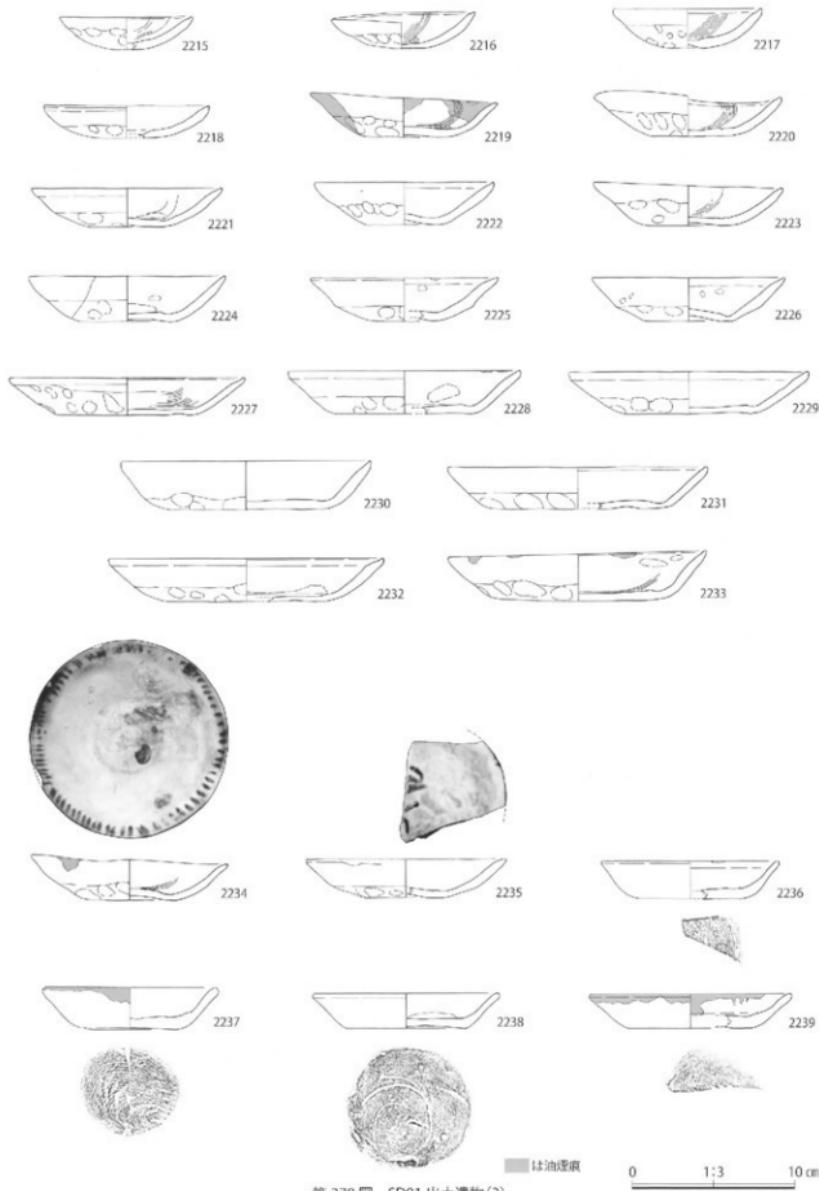
第368図 SD01出土遺物(1)

第4節 素振りの大溝（南第4面）

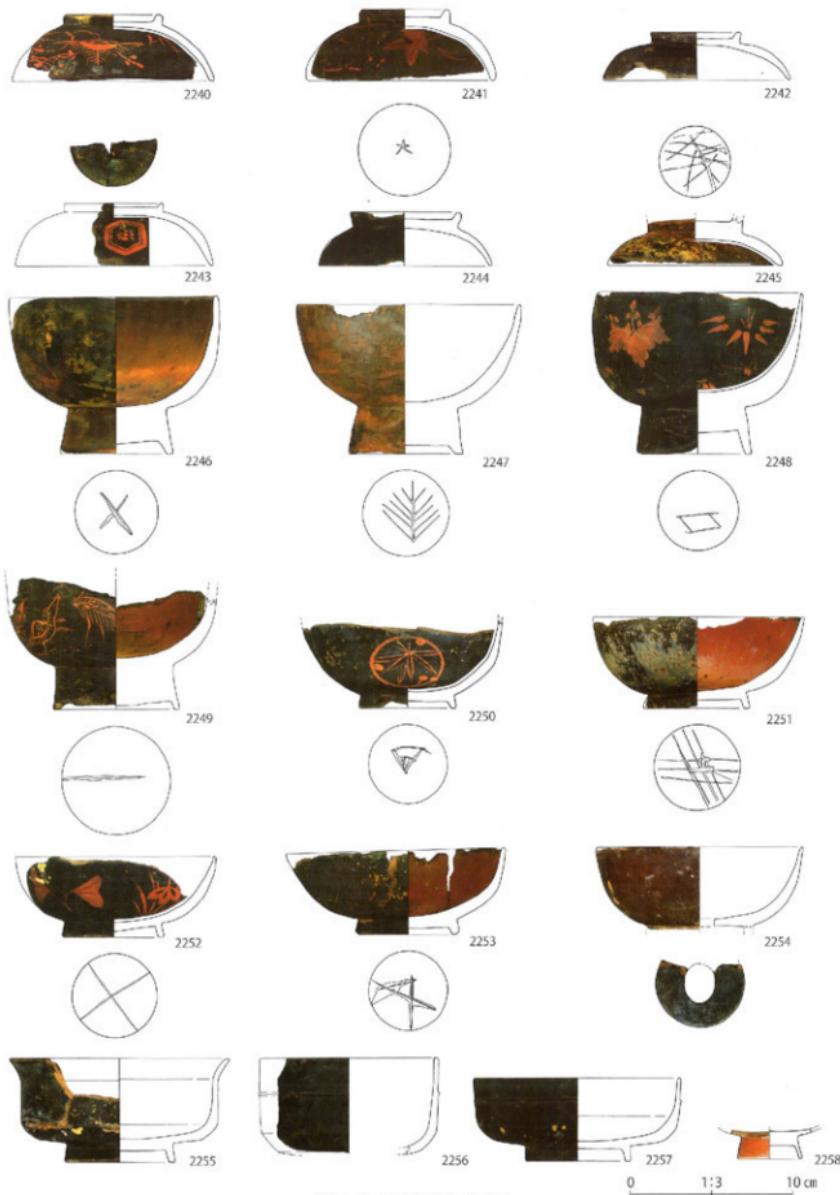


第369図 SD01出土遺物(2)

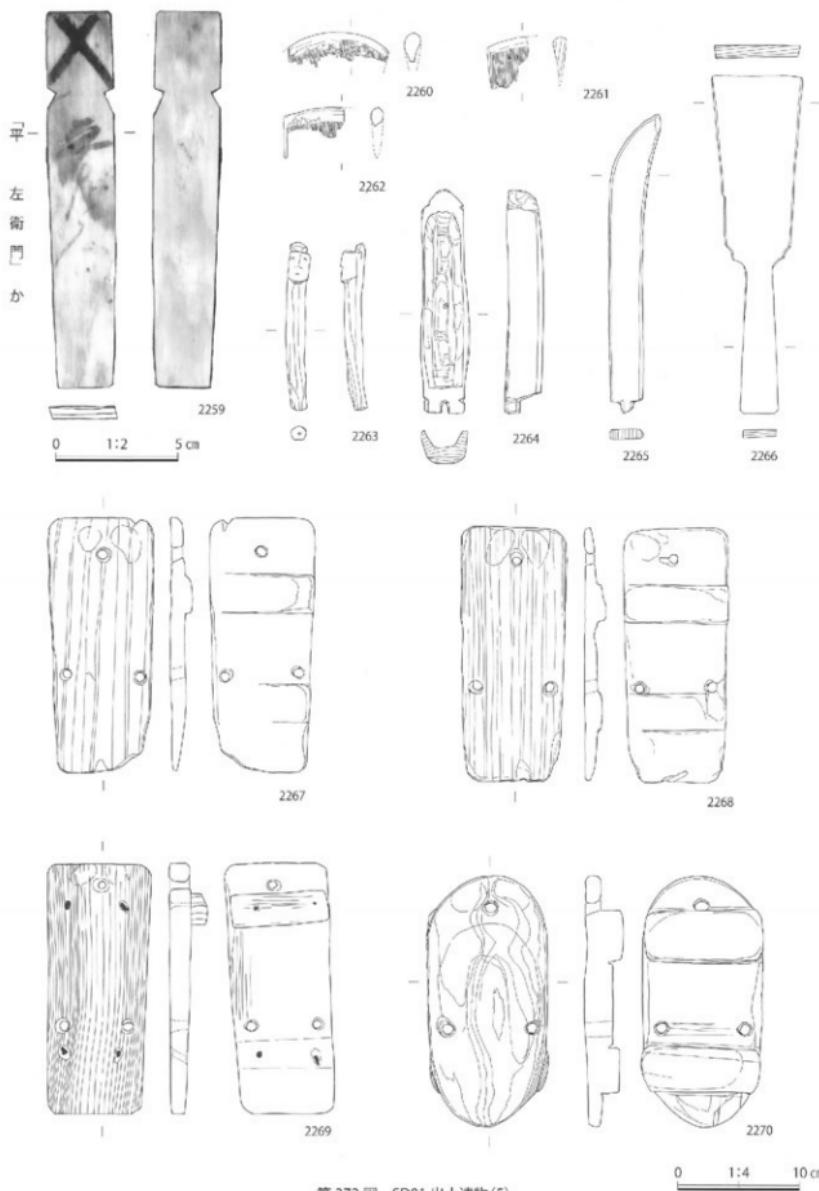
0 1:3 10 cm



第370図 SD01出土遺物(3)

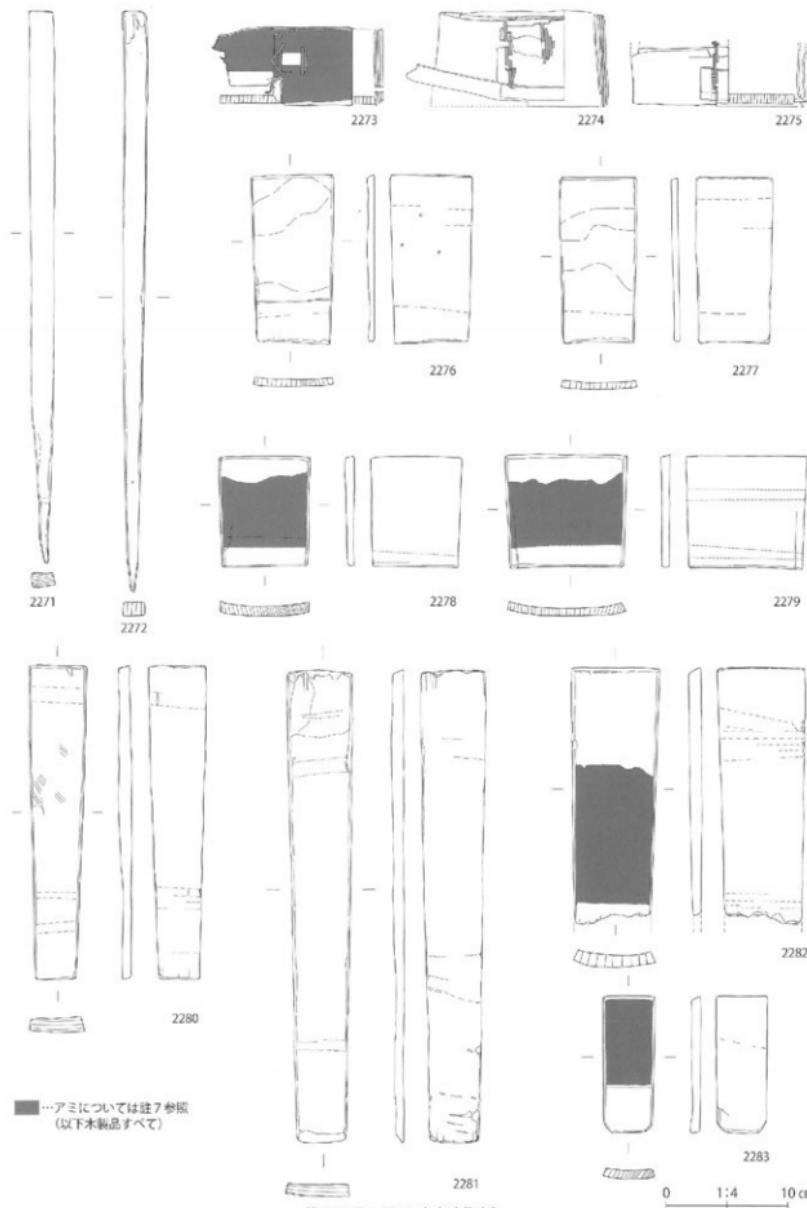


第371図 SD01出土遺物(4)

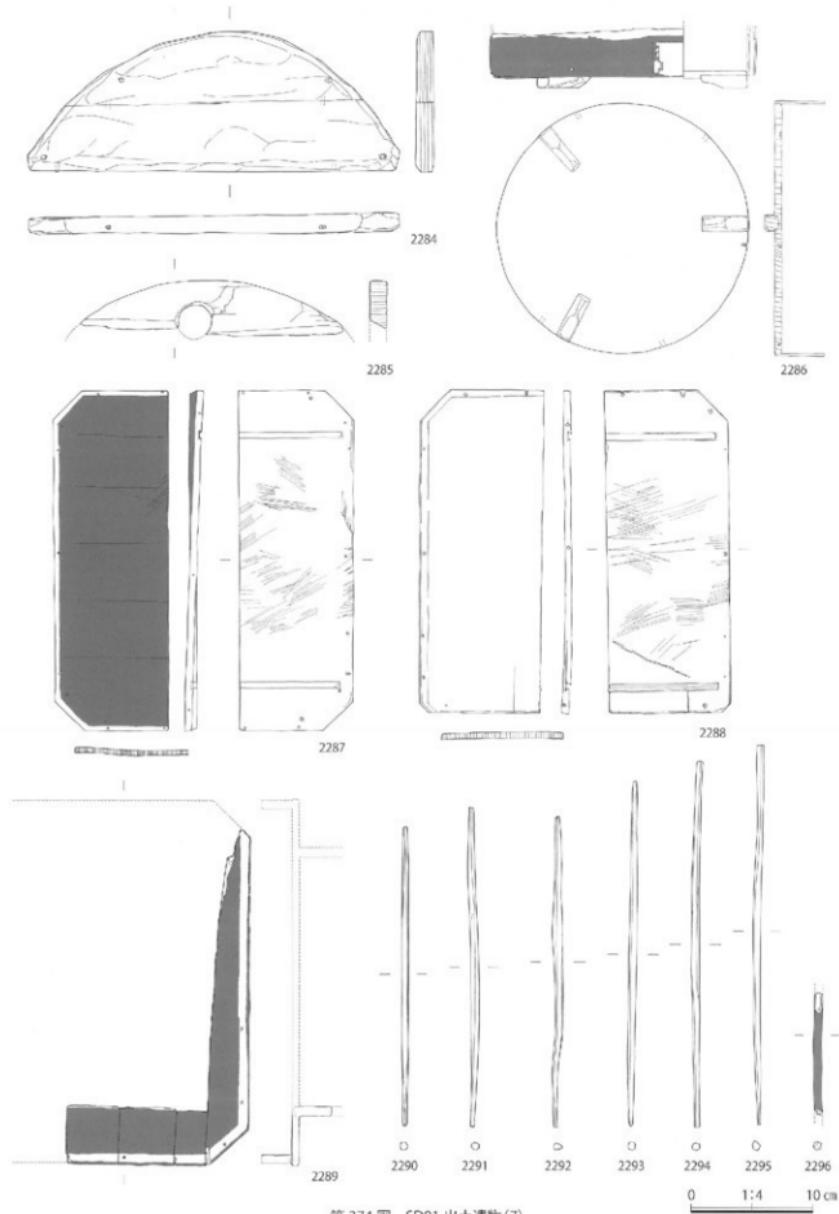


第372図 SD01出土遺物(5)

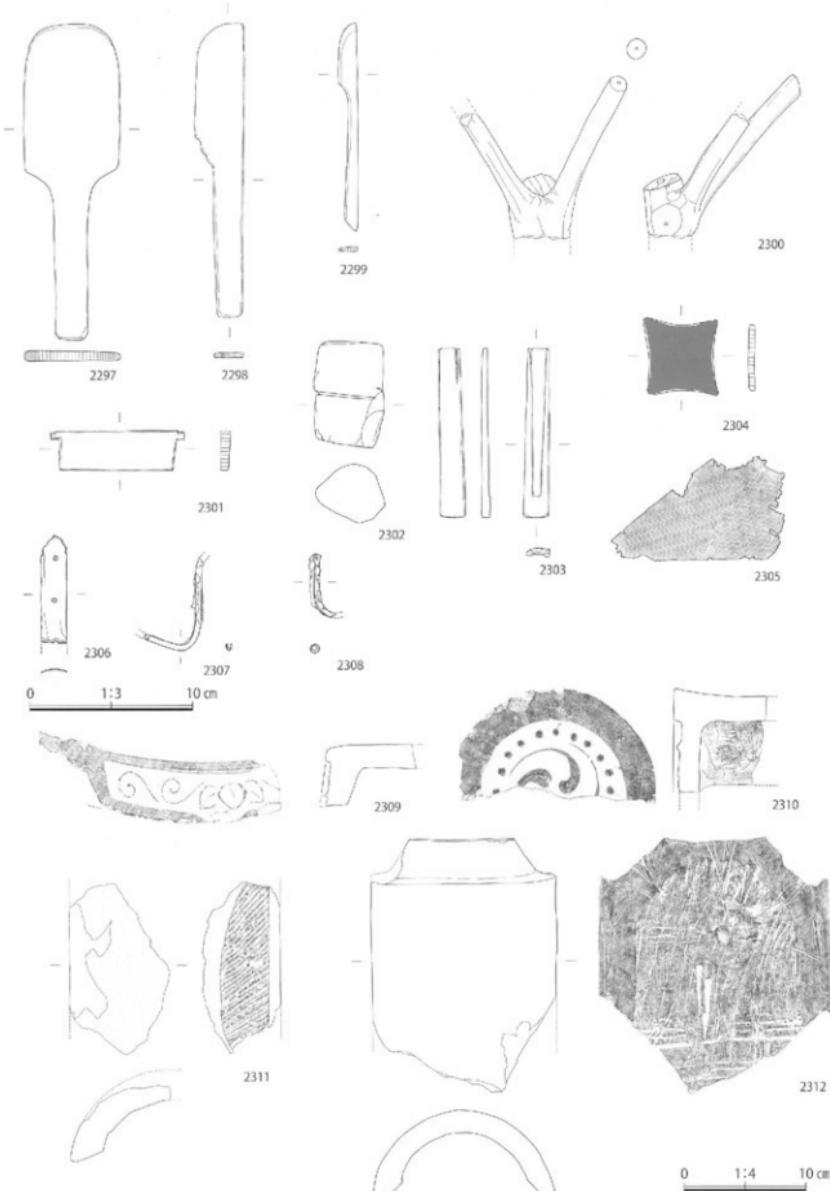
第4節 素振りの大溝（南第4面）



第373図 SD01 出土遺物(6)



第374図 SD01出土遺物(7)



第375図 SD01出土遺物(8)

最終段階の大溝 2.SD02 素掘りの溝の最終段階である。大溝は自然堆積や人為的な廃棄により溝が浅く狭くなる時期、あるいは浸漬や拡幅により広く深くなる時期など、時代ごとに溝の幅に違いがあったと考えられるが、平面的に確認できたのはこの最終段階のSD02だけであった。位置的には初期の大溝の南側に寄せてつくられており、この段階で北屋敷は南へ約2～3mほど敷地が広がったことになる。規模は幅0.8～1.80m、長さ33.7m、深さ0.34mであり、更に調査区外の東と西に向けて続いている。溝底部での標高は、西側が0.788m、東が0.662mであり、最終段階においても水は東に向かって流れているようである。

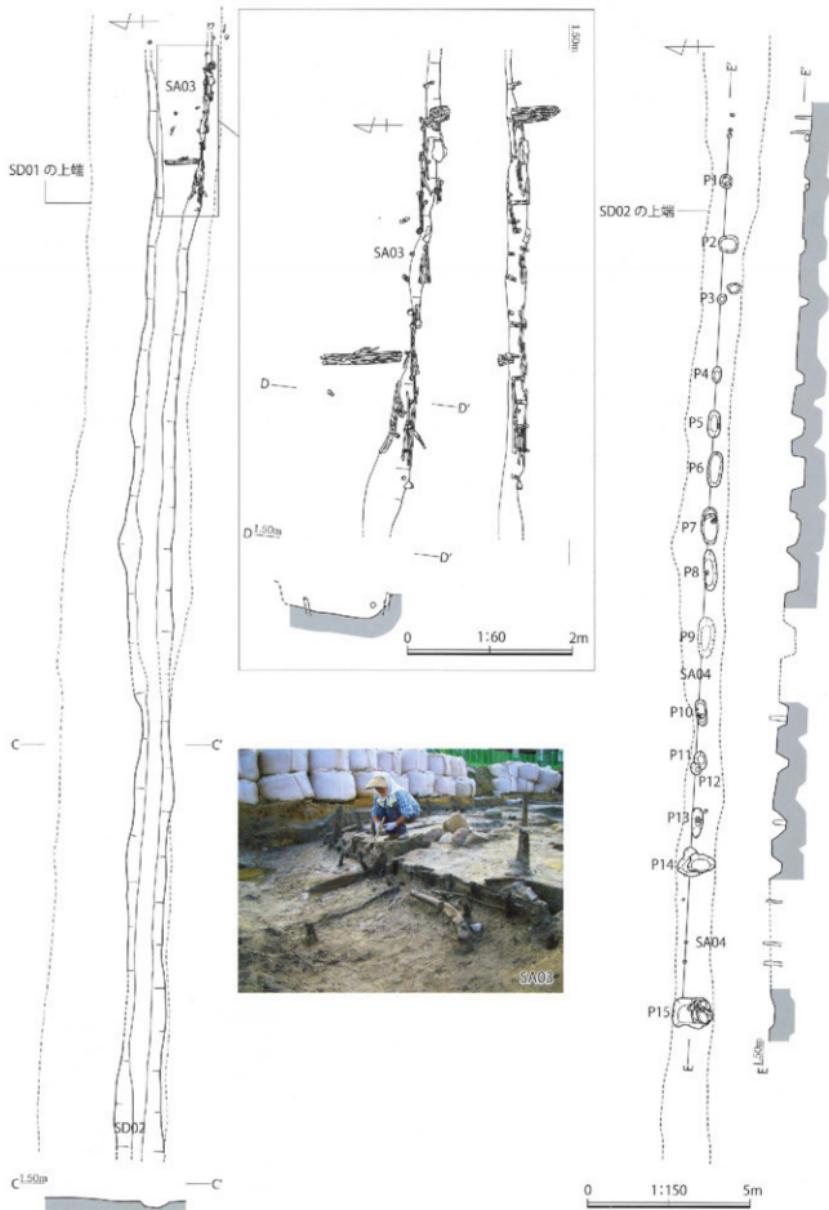
この溝に付属する施設に東端の南岸斜面から検出された杭列SA03がある。溝の上端に沿う形で東西方向に23本の木杭が打ち込まれていた。いずれも樹皮が付いた状態で先端を尖らせた丸太材で、直径は4～6cmのものである。背面にあたる南側には横木が嘴ませてあり、背面の土砂が溝に流れ出すのを防ぐ留め施設と考えられる。この横木についても樹皮が付いた枝のようなものが主体であった。検出されたのはD1区の限られた範囲であり、東に向けて更に続く様相ではあるが、全体から見ればごく限られた範囲の施設と思われる。更に溝の内側にも杭が打ち込まれており、補修を行った痕跡と考えられる。第3面の石積溝(第354図SD01)を見てもこの部分だけは石垣が孕み出しており、この辺りは軟弱な地盤だったようだ。

溝の埋土には特徴があり、埋没放棄されたような状況ではなく黄白色の粘土で意識的に埋められていた。黄白色粘土から遺物は出土しておらず、短期間の内に一度に埋められた様相を呈する。この後、次に述べる柱穴列SA04が掘られるが、溝が埋められてSA04がつくられるまでに時期幅があったのかは分かっていない。

溝の消滅 3.SA04 石積溝を解体してSD02の検出作業を試みたところ、溝のほぼ中央で一直線に並ぶ柱穴列を検出した。新旧関係は溝SD02(古)一柱穴列SA04(新)である。途中サブトレンチの崩落により平面図化できなかった部分もあるが、15個のピットが25.5mの区間に並んでいる。ピットの平面形は楕円形を呈し、規模は上縁長軸0.30～1.27m、短軸0.28～0.65m、深さ26.3～41.0cmを測る。柱穴列の性格については石積溝の真下から検出されており、胴木のように石垣を支えるための下部構造ではないかという意見もあった。しかし、柱穴の中には直径15cmほどの柱を有するものが認められているものの、木質が遺存しやすい土壤環境であるにも関わらず柱自体が残っていない柱穴も多いことから、石積構築前に抜き取られたと考える方が自然である。徳島城下町⁽³⁾でも素掘りの屋敷境の溝を埋めた後につくられた同様の遺構が検出されており、ここでは掘立柱塀の屋敷境として紹介されている。徳島城下町の場合は屋敷境の全域に掘立柱塀が築かれているのに対し、当該地での柱穴列は屋敷の全域に延びるものではなく、D2区からD3区にかけての限られた範囲でしか検出されていない。屋敷境の場所場所で異なる遮蔽方法が取られた可能性を示すものかもしれない。ただし、塀とした場合、屋敷境の重要な機能の1つである排水機能がこの時期だけなくなってしまうという問題が残る。この排水機能の消滅という事象を屋敷境の消滅として積極的に評価するのであれば、寛永11(1634)年に堀尾氏に代わって京極氏が入部してきたことによる屋敷剤の変更と捉えることもできる。

出土遺物としてはP5から土師器皿の破片、P7・8からは瓦の破片、P6からは漆器椀の破片が出土しているが、小片のため図化できるものではなかった。





第376図 大溝の最終段階SD02(左)と溝の消滅段階SA04(右)実測図

第2項 間仕切溝（第377～380図）

屋敷境とは別に、城下町の造成当初に位置付けられる素掘りの溝2本SD03・04を検出している。これらの溝は屋敷地内に掘られたものであり、屋敷境とはその目的が異なっているため、これと区別するため便宜的に間仕切溝とした。屋敷境との違いは規模が若干小さい点、遮蔽施設をもたない点、存続期間が短い点を挙げることができるが、狭い調査区でこれらの溝を検出した場合、屋敷境との区別は難しく、今後松江城下町を調査するにあたっては注意を要する遺構である。

SD03

1.SD03（第377図） 屋敷境の大溝と平行に延びる素掘りの溝である。規模は屋敷境の大溝と比較すると若干小さく、幅2.60～3.20m、長さ24.30m、深さ最大1.158mを測る。溝の東側は鉤の手状に折れ曲がっており、溝の底面には高低差をもつ、2つの溝が繋がったような形状であるが、埋土に違いが見られなかったため1本の溝として取り扱った。この溝の東側では後述するSD04と切り合い関係が認められ、その新旧関係はSD03(古)－SD04(新)という状況であった。



SD03

しかし、これは掘削された時期の新旧ではなく、同時に掘削された2つの溝のうちSD03が先に埋められ、SD04はそのまま使われ続けたという利用状況を示すものと認識している。

埋土は基本的に旧地表の黒色土層と、その直下に堆積している灰色シルト層を利用して人为的に埋められており、間には薄く植物層（第377図3層）が挟み込まれていた。植物を敷く使途は定かではないが、城下町遺跡の土坑や溝を埋めると同時に良く見られる手法であり、沈下防止か暗渠排水的役割を担う機能を想定している。底部には薄く流水ラミナ状の自然堆積が認められたもの掘り直された痕跡はなく、短期間のうちに埋められたと考えられる。その後は『帯状区画』と『方形区画』の区分はなくなり、屋敷地は2つの区画となってしまう。

SD03出土
遺物

SD03出土遺物（第378図） 出土遺物としては溝の底から国産陶器4点、中国磁器3点、土師器皿1点、銭貨1個、漆器椀や山物など木製品が5点出土しただけである。屋敷境の大溝と比べると比較にならないほど量が少なく、このことも溝の存続期間の短さを表している。2313は備前播鉢であり、内面には6本1組の放射ケシ目条線が刻まれている。乗岡編年近世Ⅰ期C⁽³⁾に含まれるものである。この播鉢については屋敷境から出土した第369図2207と接合できた。このことは屋敷境の大溝とこの溝が同じ時期に機能していたことを物語っている。2314は内面に同心円叩き痕をもつ肥前陶器の瓶。2315は龍泉窯系碗B-IV類⁽¹⁰⁾に含まれる細い線描きの連弁文が施された青磁碗である。土師器皿は口径10.1cmほどの小形のもので非口クロ形成のもの。木製品は漆器碗2317、桶樽類2318、折敷2319を掲載した。2320は1078年初鋸の『元豊通寶』である。

SD04

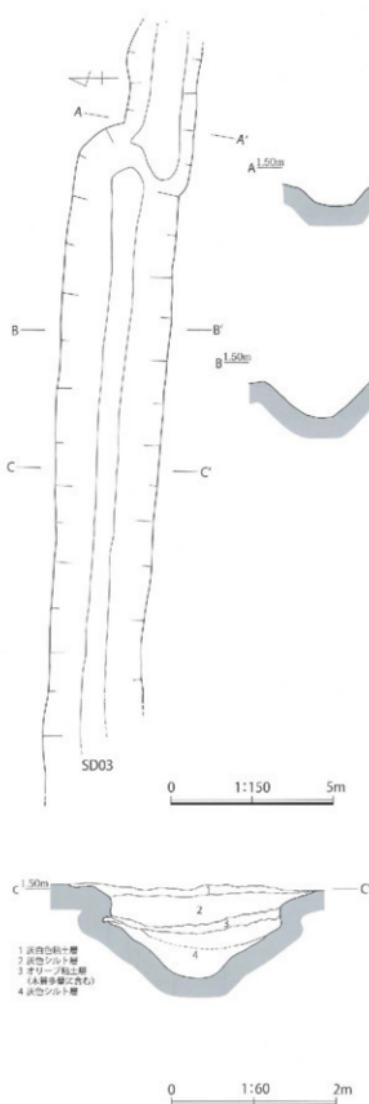
2.SD04（第379図） A1、B1、C1区から検出された平面が逆「L」字状を呈する素掘りの溝であり、更に調査区外へ向かって延びている。長さは直角に折れ曲がっているため正確な計測はできなかったが、検出部分での延長は23.5m、幅2.5～3.0m、深さ最大0.64mを測る。



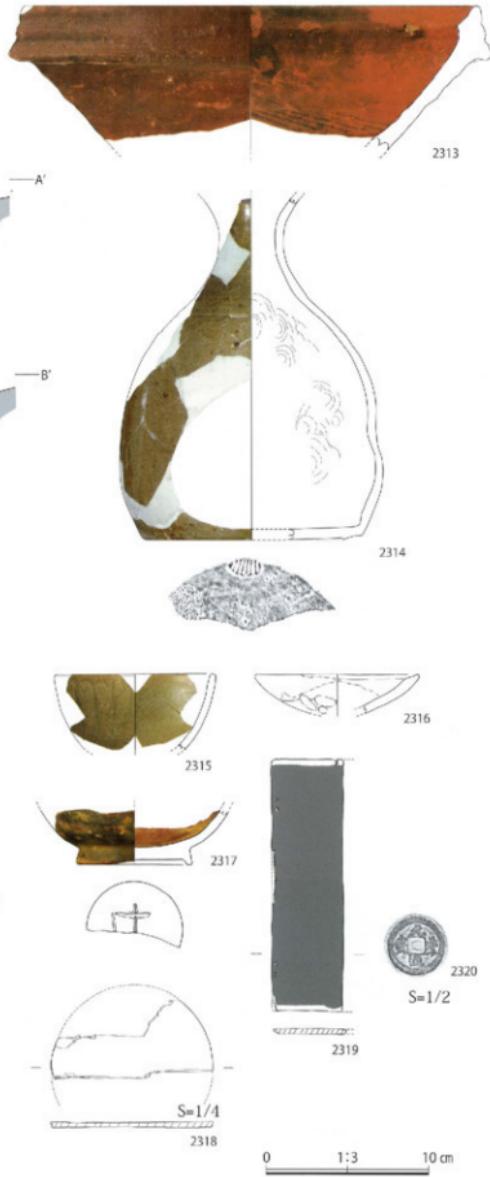
SD04

土橋

付属施設としては、屋敷境のような遮蔽施設は検出されていないが、土橋を検出している。これは後述する『方形区画』と『短冊形区画』を繋ぐための施設であり、規模は幅1.04m、長さ1.72mを測る。盛土によりつくり付けられたものではなく、素掘りの溝を掘削する過程でその部分だけを掘り残すことで形成されている。

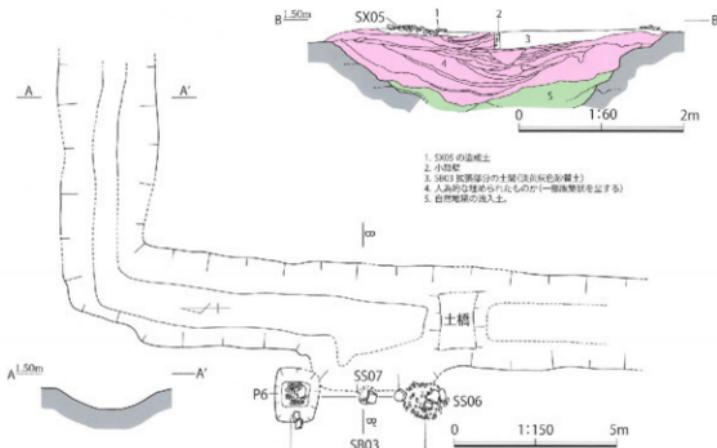


第377図 間仕切溝SD03 実測図

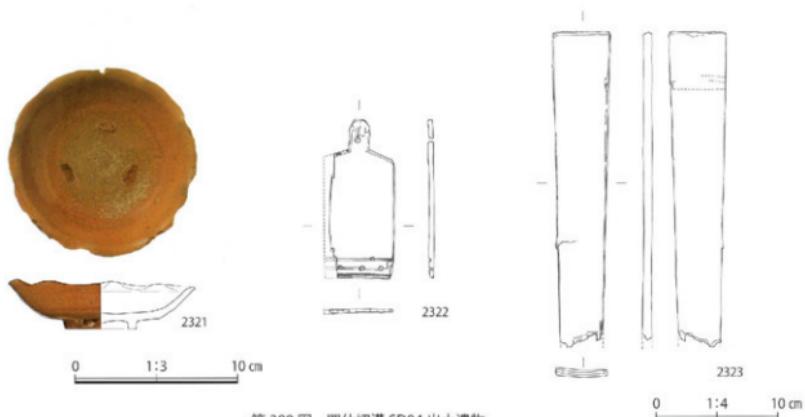


第378図 間仕切溝SD03 出土遺物

- 溝の崩落** 土橋を検出した北側は、溝が不整形に広がる形状を呈する。SB03の東端梁行と接する部分であり、SS06・07の2つの礎石が積み直されていた。溝の肩部が崩落した痕跡と考えられる。
- 溝の存続期間について** 先にも述べたように、SD03よりは長期に渡り機能していたようだが、やがて同じように人為的に埋められSB03の倉庫施設が拡張される。SD04が埋められると『帯状区画』、『方形区画』、『短冊形区画』の区分はなくなり、1つの地続きの屋敷地となる。
- SD04出土遺物** 出土遺物としては国産陶器1点、木製品8点である。製品として台帳に登録した木器は8点であったが、加工痕のある木片は多數出土している。2321は胎土の目跡をもつ肥前陶器の皿である。木製品には漆器椀、桶樽類、刷毛、下駄、不明品があり、このうち刷毛2322と桶樽類の部材2323を掲載した。



第379図 間仕切溝SD04実測図



第380図 間仕切溝SD04出土遺物

第5節 帯状区画

屋敷境の大溝とSD03に挟まれた幅5.9～7.3m、長さ37.6mの区画であり、調査後の標高は0.85～1.03mを測る。ここからは礎石建物跡1棟(SB01)、畠跡(SN01)、多数の素掘りの土坑を検出している。

なお、SD03が埋められた後につくられた性格不明遺構2個(SX01・02)と掘立柱建物跡1棟(SB02)についてもここで取り扱うこととする。

さて、調査後にこの帯状区画を見ると両側に側溝をもつ道路のように見えなくもない。このため現地調査の段階で『帯状区画』が道路の機能を兼ね備えた屋敷境として利用されていた可能性もあるとの指摘があった。確かに、城下町造成当初においては築城や城下町造成のために道路として利用された時期があったことは否定できないが、武家屋敷として利用されるようになった後は大小のゴミ廃棄土坑、畠、礎石建物などがつくられており、公的な道路のような空間ではない。また、遺構間の重なりが多い区画であり、土層の堆積状況は他の区画に比べて非常に複雑であった。特筆すべきは、第3-1・3-2遺構面というように他の区画に比べて1つ多い遺構面を検出している点である。第3-1・3-2遺構面については第5章で詳述しており、ここでは最終遺構面の概略を記す。

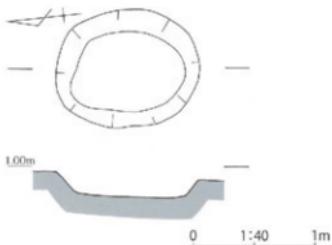
第1項 素掘り土坑

帯状区画からは多数の素掘りの土坑が検出されている。根石や柱根が遺存しており、礎石の抜き取り痕や柱掘方といったように性格の分かれるものもあるが、何も出土していない土坑についてはその形状や掘削深度だけから厳密に性格を区別するのは難しい。ここでは土坑内の土層堆積状況等からゴミの廃棄に利用された3つの土坑を取り扱う。

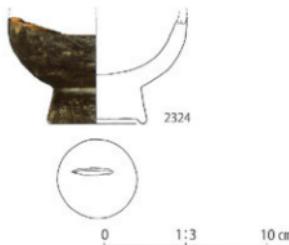
ゴミ土坑

1. 素掘り土坑 SK01(第381図) 帯状区画のやや東側、C2区から検出された素掘りの土坑である。平面形は橢円形を呈し、規模は上縁部長軸1.18m、短軸0.96m、深さ最大19.3cmを測る。後述するSK06などと比較すると小規模であるが、ゴミ廃棄土坑として利用されており、土坑内はゴミで充填されていた。ゴミは木片が主体であり、種別の分かることは漆器椀だけであった。

SK01出土遺物(第382図) 2324はSK01から出土した漆器椀であり、内外面共に黒漆が塗られている。高台内に「-」の刻印をもつものであり、高台径は5.8cmを測る。

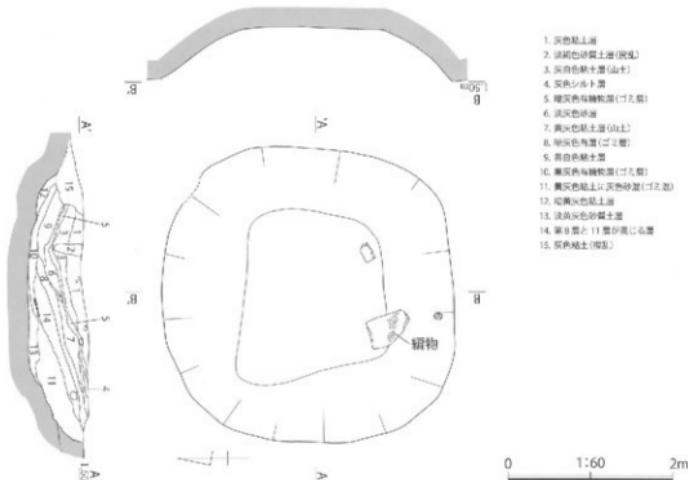


第381図 SK01実測図



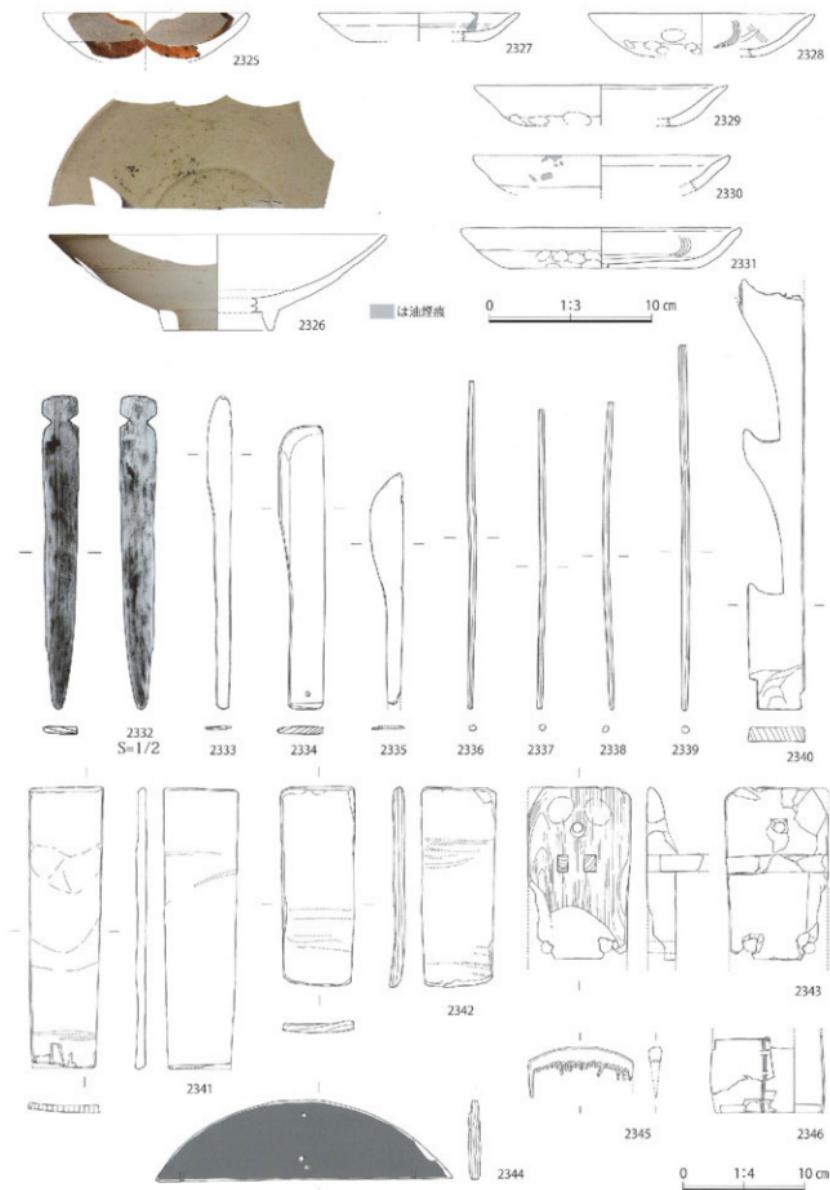
第382図 SK01出土遺物

- ゴミ土坑**
- 素掘り上坑 SK02(第383図) 帯状区画の西端、C4区から検出された素掘りの土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は上縁部直徑3.6m、深さ最大0.71mを測る。当初の性格は分からぬが、ゴミ廃棄土坑として利用されており、ゴミ層と粘土層が互層状に堆積していた。比較的少量のゴミを廃棄し、それを粘土で覆い隠す廃棄方法が連続して行われた様相を呈する。ゴミ層からは国産陶器、不明磁器、土師器皿、植物製品、瓦といったものが出土している。
 - SK02出土遺物(第384図) 国産陶器は総て肥前陶器の皿であった。4点が出土しており、この内1点を掲載した。磁器は白磁の中皿が1点出土しているが产地は分からぬ。断面に漆織ぎの痕跡が残るものである。土師器皿は19点が出土し、この内4点を掲載した。実測可能なものは京都系と呼ばれる非口クロ形成のものであった。灯芯油痕をもつものは灯明皿として利用されたものである。植物製品には荷札木簡、櫛、桶樽類、箸、箒、置台などがあり、草茎製の編物も出土している。瓦は平瓦の破片が1点出土しただけであった。荷札木簡については墨書の残りが悪く、判読できるものではなかった。
- ゴミ土坑**
- 素掘り土坑 SK03(第385図) 帯状区画の東端、C1区から検出された素掘りの土坑である。平面は東西に長い不正楕円形を呈し、規模は上縁長軸4.2m、短軸1.3m、深さ最大0.468mを測る。埋土は上下2層に分かれており、下層が灰黒色のゴミ層、上層はゴミ層を覆い隠すように入れられた黄灰色の山土であった。ゴミ層からは国産陶器、中国青花、土師器皿、瓦、植物製品が出土している。
 - SK03出土遺物(第386図) 国産陶器は产地不明の皿が1点あるほかは総て肥前陶器であり、皿、碗、火入がある。中国青花は精製の景德鎮系の小鉢が1点だけ出土している。植物製品は出土量も多く、漆器椀、墨打ちされた木材、桶樽類、栓、折敷、箒、下駄などがあり、棕櫚製の簾も出土するなど種類も豊富である。特徴的な遺物に六葉と考えられる木製品2356がある。瓦は丸瓦が5点(0.95kg)、平瓦が4点(0.63kg)ほど出土しているが小片のため図化できるものではなかった。六葉や瓦、墨打ち痕のある木材が出土するなど、建て替え等に伴う廃棄土坑なのかもしれない。



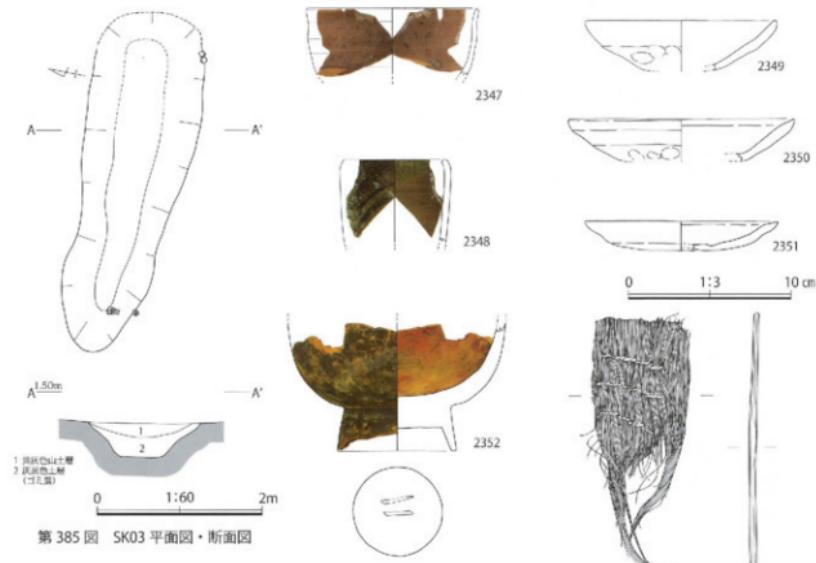
第383図 SK02 実測図

第5節 带状区画(南第4面)

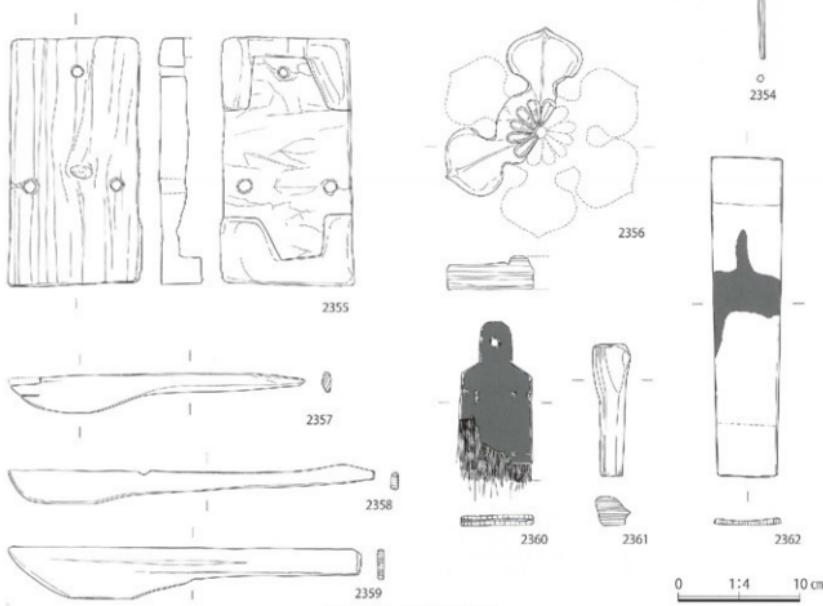


第384図 SK02出土遺物

第6章 南屋敷第4遺構面



第385図 SK03 平面図・断面図



第386図 SK03 出土遺物

第2項 石積方形土坑（第387～390図）

掘り方の内部に方形に配置された石積みの部屋をもつ地下施設を石積方形土坑とした。南屋敷第4遺構面からはここに記載する2個しか検出されていないが、同様の施設は第3章の平成18年度調査区北屋敷中間層から1個、第4章平成19・20年度調査区の北屋敷第1面から2個、第5章南屋敷3面から5個検出されている。この他、今回の調査地以外の松江城下町遺跡（母衣町68番地⁽¹⁾）からも同様の遺構が検出されている。時期や場所を問わずに検出される遺構であり、言い換えれば屋敷には必要不可欠の遺構と言えるのかもしれない。その性格については貯蔵施設（穴藏）や廻、水溜と記載してある報告書もあるが、ここから検出された石積方形土坑がどれにあたるのかは不明と言わざるを得ない。規模や深さなどその形態は様々であり、一律に論じることはできないのかもしれない。

石積方形土坑

1.SK04（第387図） 帯状区画の西側、C3区から検出

された内法で長辺1.67m、短辺0.83mを測る東西に長い石積方形土坑である。石材は差し渡し24～53cmの当地で大海崎石と呼ばれる安山岩（以下、大海崎石）や角の取れた川原石が乱積みされている。基本的には加工しない自然石の状態で積み上げられているようだが、中には削石のような石材も見受けられる。内面は漆喰等で塗り固められたものではなく、刻印をもつものや墨打ちがあるような石材も認められなかった。石材の大部分は



廃棄時に抜き取られているが、残りの良い南東隅を見ると2～3石ほど積み上げられており、高さは50cmを測る。底面に敷石等ではなく素掘りのままで、自然堆積層の灰色シルト層が剥き出しになっている。掘り方は長辺2.43m、短辺1.93m、深さ0.42mを測る隅丸長方形であり、造成土を掘り抜き自然堆積層の地盤まで達していた。廃棄時には黄褐色粘土で埋め戻しを行っているが、間層にゴミを挟み込んでいる。分層できるものの、これらの作業は時をおかず一斉に行ったと認識している。周辺にピットや礎石はなく、屋外に設置されていた施設かもしれない。性格は不明である。

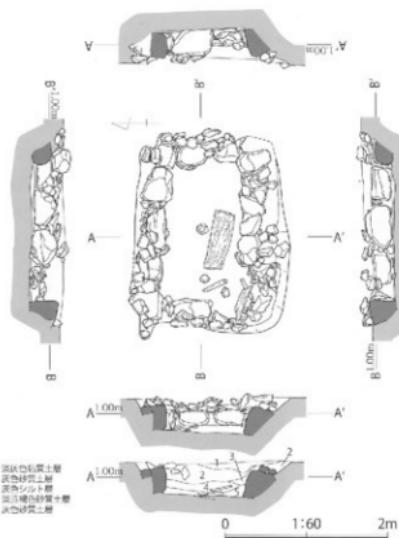
出土遺物としてはゴミ層から土師器皿2点、不明木製品が出土している。

SK04出土遺物（第388図） 土師器皿は出土した2点を掲載した。京都系と呼ばれる非クロ形成のものであり、口径は2363が11.8cm、2364が12.4cmを測る。2364は灯芯油痕をもつものであり、灯明皿として利用されたものである。

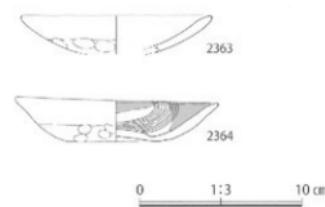
石積方形土坑

2.SK05（第389図） 前述のSK04の南東側、C3区から検出された内法で長辺1.10m、短辺0.84mを測る比較的小さな石積方形土坑である。石材は差し渡し20～73cmの大海上崎石や角の取れた川原石が加工しない自然石の状態で積み上げられている。上端部に30cm程度の段差が生じている箇所も見られることから、少なくとももう1石は積み上げられていたようである。石材の内面には黒色の付着物があり、現地での調査指導時には「水垢ではないか」という指摘を受けている。底面に敷石等ではなく素掘りのままで自然堆積層の灰色シルト層が剥き出しがなっている。遺物としては土師器皿3点、木製品、軒丸瓦のほか、ウリ科植物の種子がまとまった状態で出土している。

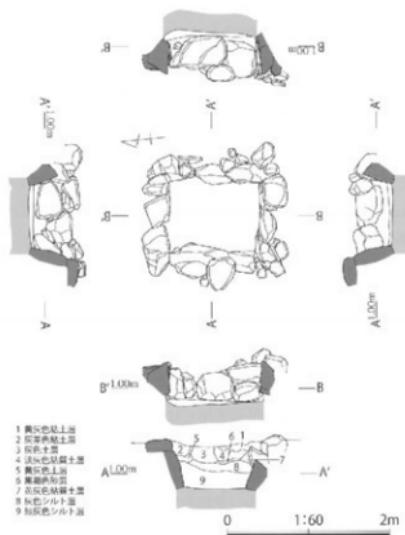
SK05出土遺物（第390図） 土師器皿は出土した3点を掲載した。いずれも京都系と呼ばれる非クロ形成のものである。口径には大小があり、2365は12.5cm、2366は9.4cm、2367は10.0cmを測るものである。2368は組み合わせて製品となる箱の部材のようなものであり、縁辺が残存している部分に目釘の孔が開いている。2369は軒丸瓦の破片である。



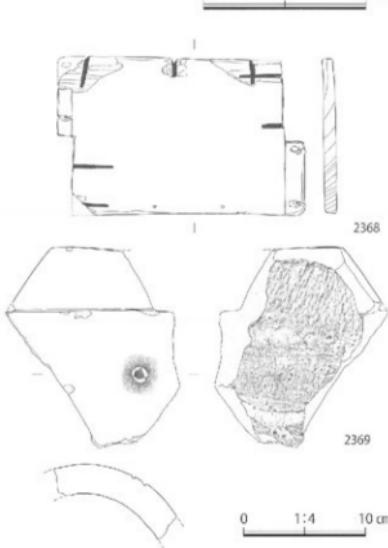
第387図 SK04 実測図



第388図 SK04 出土遺物



第389図 SK05 実測図



第390図 SK05 出土遺物

第3項 畠跡 SN01(第391図)

畠跡

帯状区画のほぼ中央、C2区の標高1.25m辺りで南北方向に延びる6本の溝を検出した。これらの溝は互いに平行に並ぶものであり、等間隔に配置されていることから畠の畝間と判断した。溝の北端は現代の建物基礎の影響で消滅しているが、残存部分での長さは1.75～4.93m、幅0.1～0.5mを測る。第3面の基盤層である黄褐色の造成土を取り除き、面的に掘り下げを行っている段階で等間隔に並ぶ畝間溝の存在をもって初めて畠と認識するに至っており、畝立てされた作土の大部分は削平してしまっている。このため残存部分での溝の深さは最大で12.7cm程度である。



SN01

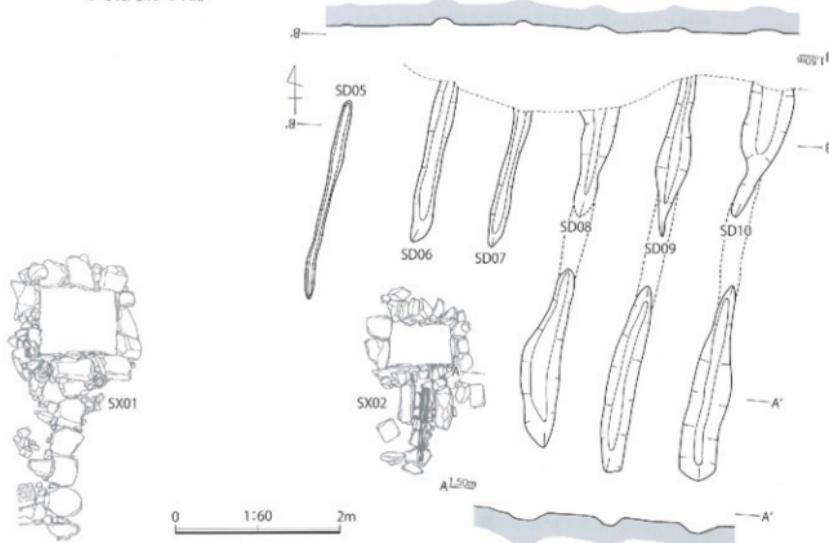
畠の基盤層は細かい黒色粘土ブロックを含んだ緑灰色土層であり、非常に特徴的な色調であった。遺構の空闊地である西へ向けて広がっていることから、畠も更に西へ向かって続いている可能性が高い。この部分を含めた規模は東西11.0m、南北5.2mの約58.2m²を測る。

土壤分析

畝間溝SD06に堆積した粘土の土壤分析(第9章P23)を行ったところ、栽培関連植物としてイネ科、オモダカ属、ウナギツカミ節—サナエタデ節、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ベニバナ属型の花粉化石が検出された。ヒユ属については種実分析でも検出されていることから栽培されていた可能性が指摘されている。この他、植物珪酸体分析ではイネ植物珪酸体が多量に検出され、種実分析においてもイネの穎基部が検出されており、遺構の形態に反して水稻が栽培されていた可能性が指摘されているが、このことは、雨の跳ね返りを防いだり、耕作土の流出を防止するための敷藁が施されていたことを示すものと認識している。

出土遺物

遺物としてはSD08から土師器皿の破片が1点ほど出土しているが、細片のため同化できるものではなかった。



第391図 畠跡 SN01 実測図

第4項 磐石建物跡 SB01(第392図)

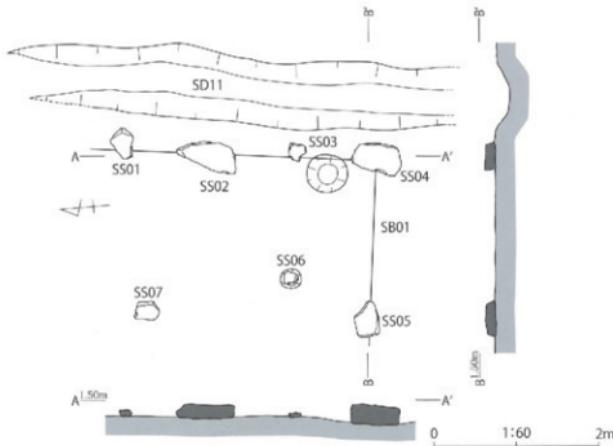
礎石建物
SB01

帯状区画の西端、C4区には溝SD11によって区切られた区画があり、石材が散在していた。西側と南側が調査区外となっているため石材に厳密な規則性を見出すことができなかったが、これらの石材は建物の礎石と考えられる。第4遺構面の基盤層に直接据え置かれたものであり、根石等は検出されていない。ここからは合計7個の礎石が検出されているが、抜き取り痕もあることからもう少し多くの礎石が並んでいたようである。石材はSS02・04が上面が扁平な川原石、その他は大海崎石であり、規模は、差し渡し20~73cmのものが利用されている。比較的規模の大きな礎石の柱間寸法を実測すると、SS02~SS04が2.0m(6尺6寸)、SS04~SS05が2.0m(6尺6寸)を測る。礎石が据え置かれた平坦部での標高は1.30~1.32m、礎石天端での標高は1.34~1.44mを測る。

雨落ち溝

素掘りの溝SD11は雨落ち溝と考えられるものであり、建物跡の東側から検出されている。南北方向に一直線に延びるものであり、規模は幅0.75~0.83m、長さ5.4m、深さ最大15.6cmを測る。溝底部での標高を計測すると南側が高く北側が低いことから、素掘りの大溝SD01へ向けて排水されていたものと考えられる。溝の底部中央付近からは拳大の石材が散在した状態で検出されているがその用途は定かではない。第6節で記述するSB03北側の雨落ち溝SX04には同様の大きさの礎石が敷き詰められており、ここでも同じように礎石が敷き詰められていた可能性を示すものかもしれない。この他に遺物等は出土していない。

溝については上面の第3-2遺構面でも同じような位置で屋敷境に向けて延びる石積溝SD12(第354図)が検出されており、更に上の第3-1遺構面からも同じように南北方向に延びる石積溝SD08(第320図)が検出されている。各遺構面を通して検出されるこれらの溝が何を意味するのか判然としないが、基本的な建物配置が変わらなかったことを示すものかもしれない。



第392図 磐石建物跡 SB01 実測図

第5項 掘立柱造構 SB02 と石積造構 SX01・02(第393図)

C2、C3区の辺りは遺構の重なりが複雑であり、特にSD03が埋められた後の利用状況については新旧関係を把握しきれない部分があった。調査時には検出面の高低差などから島跡SN01(新)－SX01・02(古)という新旧関係を考えていたが、整理段階で図面を見直してみると島の歓がSX02を避けるように配置されており、同時期に機能していた可能性も考えられた。更に掘り下げを行っている段階でSB02を検出しているが、柱を避けるようにこれらの石積溜柵が配置されており、建物との関連性が想定されることからここで同時に掲載した。

石積造構 SX01

SX01はC3区から検出された性格不明の石積造構である。方形に配置された石積みの溜柵部と付帯施設の石組水路から構成されている。溜柵部の規模は内法で長辺(東－西)0.92m、短辺(南－北)0.75m、深さ51.1cmを測る。底面に敷石等ではなく、素掘りのままでSD03の埋土である灰色シルト層が剥き出しになっている。

石組水路は溜柵部の南面に取り付けられている。ここから南に向けて延びた後、直角に折れ曲がり西へ向かう。

規模は延長2.9m、側石天端から底石までの深さ14.6cmを測る。この水路部分については石材の残りが悪く、特に側石は大部分が抜き取られており屈曲部でしか検出されていない。このため、この水路が開渠であったのか暗渠であったのか判断することはできなかった。底面に配置された底石でのレベルは、溜柵部に向かって徐々に低くなってしまい、水が流れているとするならば溜柵部に向けて流れていたと考えられる。石組水路と溜柵部との取り付け部分には扁平な石が載せられ暗渠になっており、蓋石の下からは閉塞装置と思われる四角い石が検出されている。溜柵部、水路共に石材は総てが人海崎石である。細かな調整を施した壓痕をもつような石材はなかったが、切石と思われる石材は認められた。遺物は出土していない。

石積造構 SX02

SX02はSX01の東方から並列するようにして検出された石積造構である。SX01と同様の形態をもつものであるが、こちらは規模がやや小さく、溜柵部の内法で長辺(東－西)0.75m、短辺(南－北)0.48m、深さ41.1cmである。石組水路の底部には幅11cm、厚さ2cm、長さ92cmを測る木の板が置かれていた。底石の直上から出土しており、木橋など施設の一部として機能していたものかもしれない。

出土遺物

遺物としては溜柵部の埋土中から完形に近い黒織部の沓形碗と土師器皿2個が出土している。黒織部は高台内に「イ」の笠記号をもつものであり、口径12.1cm、器高6.9cmを測る。土師器皿は灯明皿として利用されたものが灯芯油痕で固着した状態で出土している。

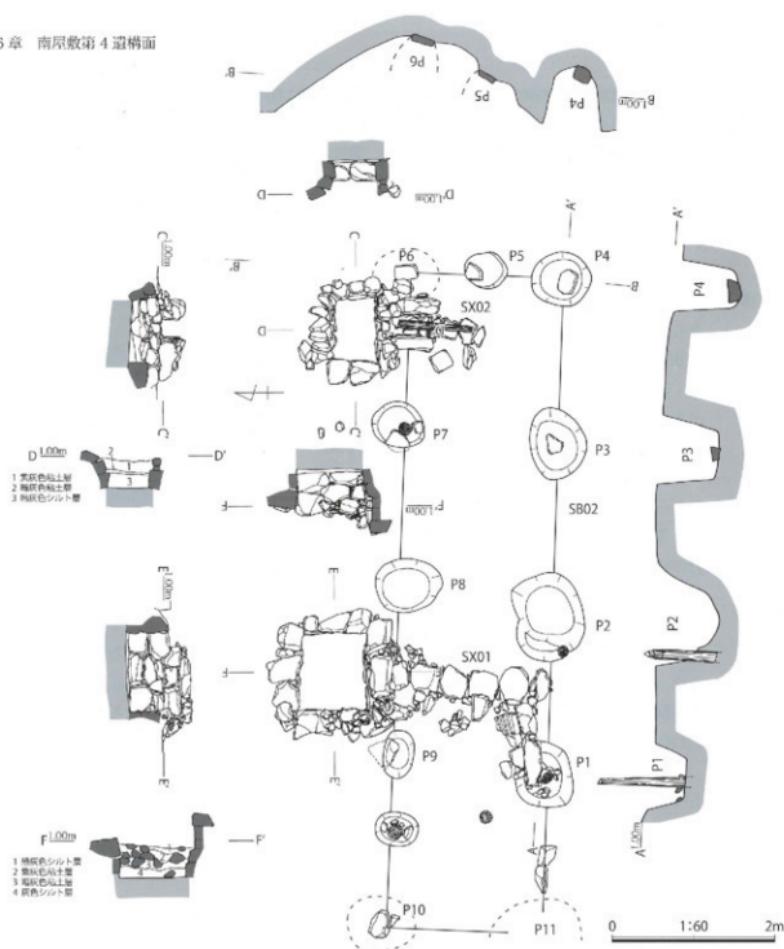
掘立建物 SB02

SX01・02を取り囲むように掘立柱建物跡SB02が検出された。梁行1間、桁行4間の東西方向に長い建物であり、規模は梁行2.0m、桁行8.0mを測る。北側桁行の柱穴は溝SD03を埋めた後に掘られたものである。その底部は溝の埋土を掘り抜いて灰色砂層の自然堆積層にまで達しており、深さ99.3～116.8cmと非常に深い掘り方をもつ。底部には大海崎製の礎盤石をもち、P7などは柱が残るものであった。一方、南側桁行の柱穴は直径0.68～1.07m、深さ48.2～77.3cmを測るものであり、北側に比べると掘り方は浅い。大海崎製の礎盤石をもつのはP1・3・4だけであり、P2については素掘りのままであった。なお、南西角の柱穴P11は後世の井戸により消滅している。この建物跡をSX01・02の上屋と想定した場合、壁面を暗渠で通し、溜柵部だけが屋外に露出する構造となる。その性格については松江城下町遺跡に類似の遺構がなく、不明といわざるを得ない。また、類似した2つの石積造構が同時に存在したのか新旧関係をもつ遺構なのかも確認できなかった。



SX01

第6章 南屢敷第4道構面



第393図 SB02・SX01・SX02実測図



第394図 SX02出土遺物

第6項 帯状区画遺構外出土遺物 (第395～397図)

国産陶器

出土した陶磁器には国産陶器と中国磁器のほか、細片のため国産なのか中国産なのか分からぬ磁器も1点混じるが、混入品の可能性も考えられる。国産陶器は68個の破片が出土しており、このうち11点(2373～2383)を掲載した。肥前陶器の割合が高く、瀬戸・美濃陶器や備前の無釉陶器、產地不明品が混じる。器種構成を見ると肥前陶器は碗皿類が中心で瓶といった製品も見られる。法量については、口径30cmを超える大きな皿も一定量含まれている。特徴的な遺物に桶形の小壺2380があり、胎土等から岸岳系の遺物である可能性が指摘されている。⁽¹²⁾ 第4遺構面において岸岳系の可能性のある製品はこの1点だけである。瀬戸・美濃陶器も碗皿類であり、志野の変形向付皿といった茶陶が2片ほど出土している。備前は小片のため掲載することができなかつたが播鉢と壺片が出土している。產地不明品の陶器は播鉢である。時期について出土割合の高い肥前陶器を見てみると、九期I～二期(1594～1610年代)が中心として出土しており、I期(1580～1594年頃)の小壺やII期(1610～1650年代)の砂目をもつ皿2375がそれぞれ1点ほど混じっている。

貿易陶磁

中国磁器は白磁と青花であり、17片のうち5点(2384～2388)を掲載している。青花は精製のものが中心であり、景德鎮窯と指摘された製品が2点、漳州窯と指摘された製品は3点である。白磁についても精製の製品が中心であるが、粗製の皿も1点出土している。

土師器皿

土師器皿は171個の破片が出土しているが、残りの悪いものが多く6点(2389～2394)を掲載した。底部に糸切り痕をもつロクロ形成のもの(2389～2392)と非ロクロ形成のもの(2393・2394)がある。灯芯油痕をもつものは灯明皿として利用されたものである。

植物製品

植物製品の大部分が木製品であり、台帳に登録したものは67点であるが、板切れや木端などを含めると出土量はこの数倍に上る。破片の状態で出土しているものが多く、不明品の割合が最も高い。種類が特定できるものとしては曲物、下駄、籠、箸、椀、桶樽類、栓、柄杓、荷札木簡、ヘギ板など多岐にわたる。17世紀後半～18世紀前半と指摘を受けた漆器椀⁽¹³⁾も出土しているが、棟瓦と共に混入品と思われる。木簡は4点が出土しているが判読が困難なものばかりであった。

金属製品

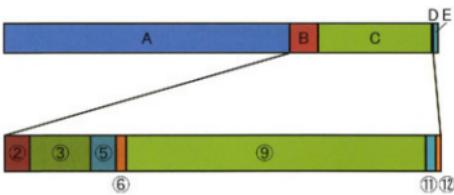
金属製品としては銭貨2404が1個出土しただけである。鋳化のため銭文は判然としないが、「開元通寶」と読めるものである。

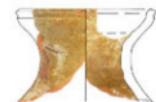
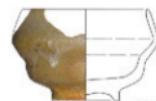
瓦

瓦は162点・31.9kgが出土しており、このうち6点(2405～2410)を掲載した。出土した瓦の内訳は丸瓦50点(12.6kg)、平瓦108点(19.1kg)、不明品4点(0.2kg)であった。丸瓦はコビキBが主体であるが、コビキAと思われる小片も数点ほど混じる。棟瓦の小片も出土しているが、混入品と考えられる。

表21 帯状区画遺構外出土陶磁器片数一覧表

名称	破片数	割合%	BCDの内訳	破片数	割合%
A 土師皿	171	65.8	① 中国青磁	0	0.0
B 中国磁器	17	6.5	② 中国白磁	5	5.8
C 国産陶磁器	68	26.2	③ 中国青花	12	14.0
D 中国小便器と下駄	1	0.4	④ 宋国玉彩	0	0.0
E 混入品	3	1.2	⑤ 瀬戸美濃	5	5.8
合計	260	100.0	⑥ 備前	2	2.3
			⑦ 越前	0	0.0
			⑧ 青磁施加印墨	0	0.0
			⑨ 肥前系青磁	59	68.6
			⑩ 肥前系灰磁	0	0.0
			⑪ 不明陶器	2	2.3
			⑫ 不明磁器	1	1.2
			合計	86	100.0





2379



2380



志野



2382



志野

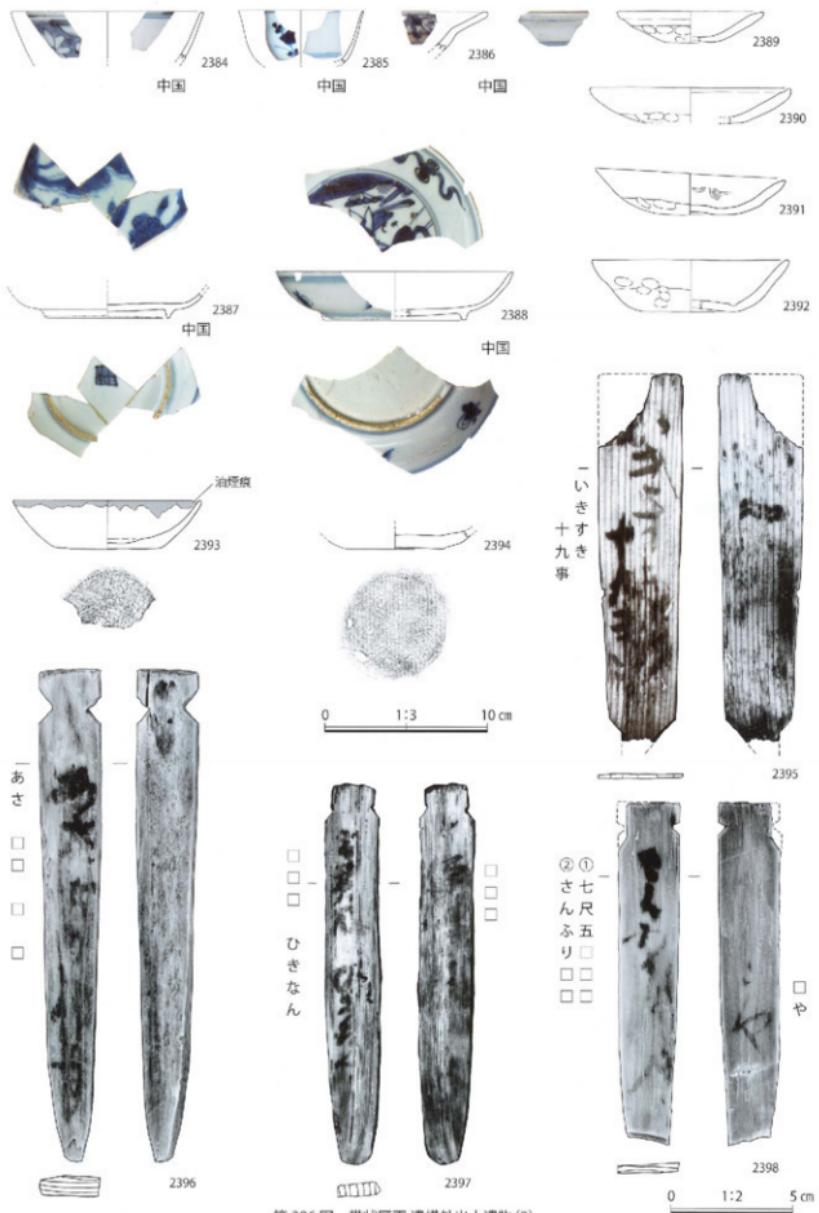


2383

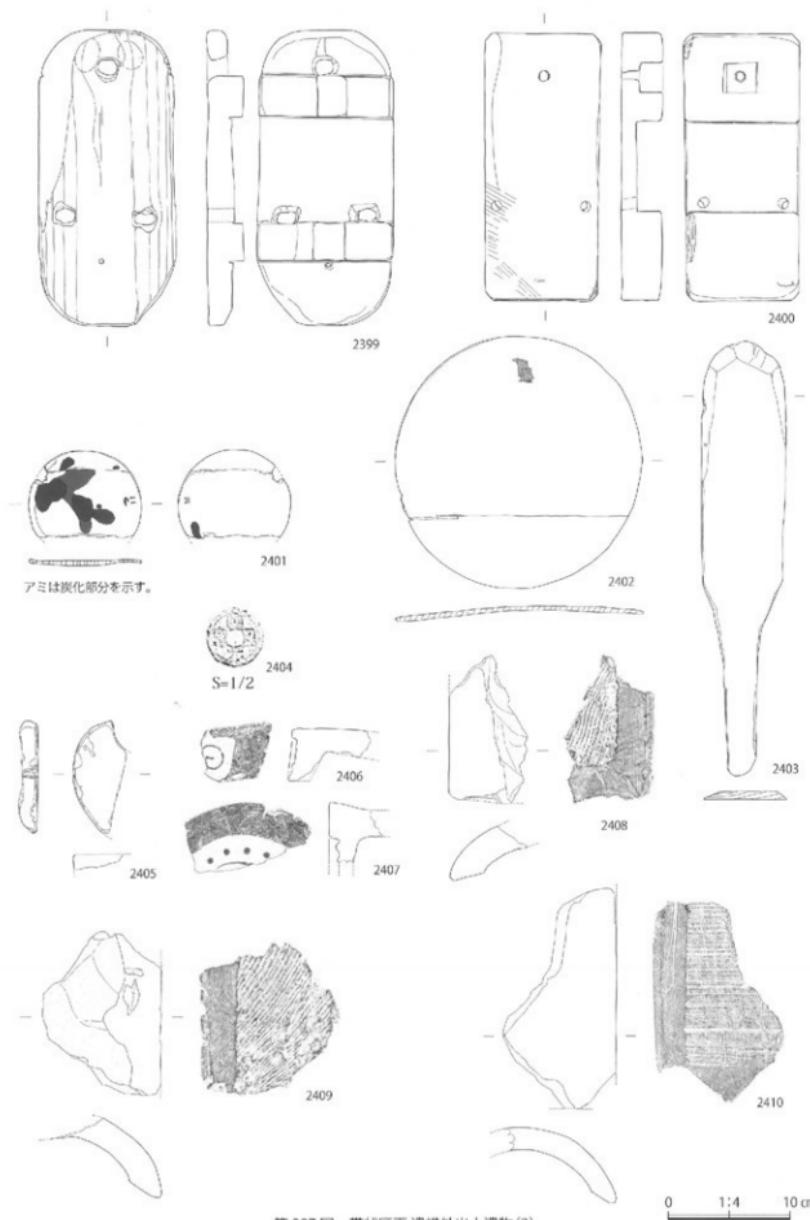
第395図 帯状区画 遺構外出土遺物(1)

0 1:3 10 cm

第5節 帶狀區画(南第4面)



第396図 帯状区画遺構外出土遺物(2)



第397図 帯状区画 遺構外出土遺物(3)

第6節 方形区画

SD03と04に囲まれた方形の区画であり、遺構面での標高は1.01～1.33mを測る。礎石や礎石跡、柱穴、杭跡などの密度が高く、大型の建物跡2棟(SB03・04)を復元することができた。SB03の東側には間仕切溝SD04に仕切られた短冊形区画があり、ここは土橋で繋がっている。また、SB04の南側にやや礎石や柱穴の密度が薄い区域があり、導水施設(SX03)を検出した。



この区画からは、第3造構面の形成土である黄色上層を掘り下げている途中の段階で礎敷遺構(SX07)を検出している。広い範囲で確認できる遺構面のようなものではないことから、遺構面としての設定は行なわなかったが、場所によっては小規模な嵩上げ造成が行われていたようである。

第1項 建物跡 SB03(第398～401図)

方形区画の東側、B 2区を中心に検出された建物跡である。当初段階においての身舎は東西桁行5間(10.07m)、南北梁行2間(4.00m)であるが、その後東側に1間分が拡張され最終的には東西6間(12.00m)の建物となる。身舎の平側にあたる南面と北面に廂が付くもので、南北軸は座標方位北より3度ほど東を指している。柱間寸法は現地の実測で2.00mの6尺6寸を基準とするが、北側の廂についてだけは1.35m(4尺5寸)で配置されていた。

身舎の柱基礎

この建物跡の最大の特徴は、南側の桁行と廂が礎石であるのに対し、北側の桁行と廂が掘立柱となっていることである。松江城下町遺跡の中でも類例はなく、全国的に見ても非常に特殊な建て方と言える。南側の礎石の下に掘立柱に伴う柱穴列が存在する可能性が考えられたため、礎石の下にサブトレンチを入れて確認を行ったが、柱穴等は確認されなかった。

礎石が置かれた身舎南の桁行基礎は、拳人の根石が充填された基礎地業掘方をもち、ここに差し渡し39～53cmほどの礎石が据え付けられていた。一方、この礎石に対応する北側桁行は、小土坑の底部に拳人の根石を敷き詰め、ここに地下式礎石が据え付けられている。規模は南側礎石とほぼ同程度で差し渡し36～45cmを測る。P3～6・20については礎石の上に礎板が置かれており、P3(第400図2411)・P4(2412)の礎板は桶樽類を転用したものであった。礎板や礎石の上には柱根の残るものや柱の当りが付くものもある。柱を地上に出すか地中に埋めるかの違いはあるが、基礎地業ということに限ってみれば良く似たつくりと言ってよい。後述する建物SB04が石材を置くだけの礎石であるのに比べると、非常にしっかりした基礎地業が行われていたことになる。

廂の柱基礎

廂の柱基礎についても身舎と同じく北側が掘立柱であり、南側が礎石であった。南側については総ての礎石が抜き取られるか動かされており、基礎地業における根石の位置で何とかその存在を確認することができた。SS06に対応する根石は確認することができなかつたが、ここまで廂が伸びている可能性も考えられる。北側の廂部分の柱基礎についてはP 11～14・16が根石を伴うものであり、身舎北側の柱基礎と非常に似た基礎地業が施されているのに対し、P 15は非常に小さな柱掘方で根石を伴わない。P 15～16～6の検出面では縦木舞と考えられる地面に突き刺さった竹の痕跡を検出しておらず、この部分については木舞壁をもつ小部屋のような施設だったのかもしれない。

身舎内部の柱基礎

身舎内部のP 8～10についても地下式基礎石を伴う掘立柱であった。建物中央の2間×2間の部分であり、床束になるものと考えられる。西端のP 7だけは地下式礎石をもつものではなく、

柱筋も通らない。建物に伴うピットではないのかもしれない。

礫敷遺構 建物東側には東西2間、南北2間の礫敷遺構SX03があり、拳大の川原石が隙間なく敷き詰められていた。この礫敷部分には床束柱がなく、直上からは多数の遺物が散乱した状態で出土していることから、土間として利用されていた場所と考えられる。ここから出土した遺物については、SX03山上遺物として第401図に掲載した。礫敷遺構の性格については礫石の隙間から多量の炭化物が出土していることから、台所のような火を使う空間を想定している。SX03の北側には長さ5.55m、幅0.16～0.30m、深さ9.5cmの素振りの溝SD12が東へ向けて延びており、建物の外まで続く。この建物跡に伴う遺構という確認はないが、建物に関連した遺構であるならば排水溝としての機能が考えられる。

建物の拡張部分 SX03の東側からは木舞壁によって囲まれた1間(2.0m)×2間(4.0m)の空間を検出した。これは間仕切溝SD04を埋めた後に拡張された部分である。床面に貼り付けられた淡黄灰色砂質土(第379図3層)を取り除いた段階で写真撮影を行っているため、傾斜のついた床面として写っているが、本来は淡黄灰色砂質土上面が生活面であったと考えられる。建物基礎については根石を作り礎石の抜き取り痕があるものの、北東角については直径10cmの木杭打ち込まれているだけあり、台所に付随する簡易な倉庫を想定している。

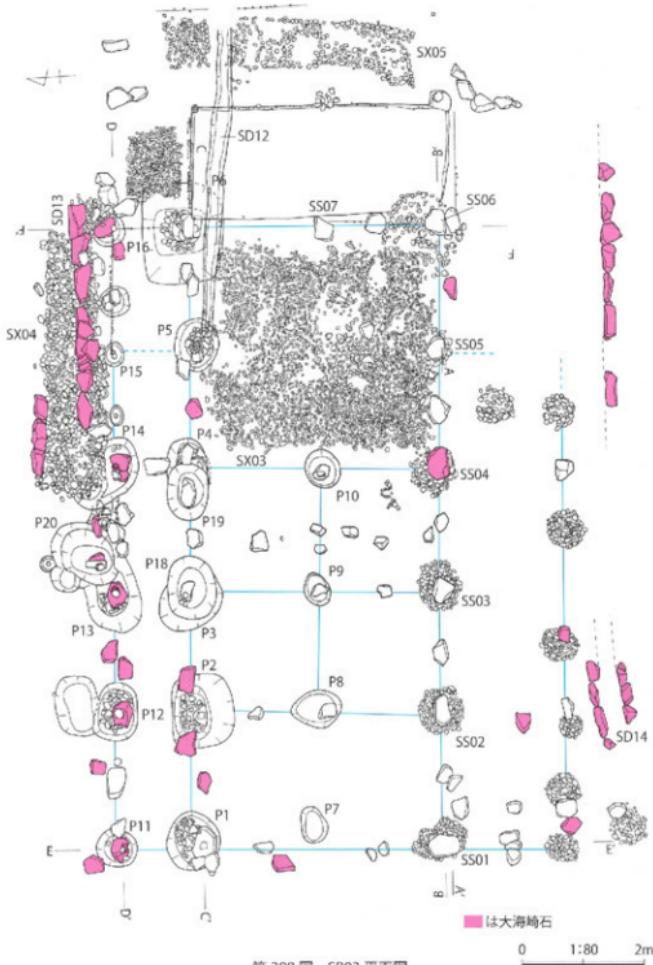
外部施設 外部につくられた施設には礫敷遺構SX04・05と石組水路SD13・14がある。建物北側から検出されたSX04は桁行と平行に配置されており、幅1.0m、長さ4.3mの範囲に拳大の川原石が敷き詰められていた。中央部分が若干窪んでおり、雨落ち溝と考えられる。この北側には石が3個ほど配置されているが、抜き取り痕から本来はSX04と同程度の長さをもった石列だったと考えられる。また、SX04の上にはこの石列と平行するように石が並べられており、雨落ち溝SX04の段階を経て、石組水路SD13が造り付けられたようだ。建物南側からも石組水路SD14を検出しており、東の行列に続く様相を呈する。つまり、建物の南と北に石組みの排水機能を備えた建物として復元することが可能である。この他、東端からも雨落ちか通路と考える礫敷遺構SX05を検出している。梁行と平行に配置されており、規模は幅0.8m、長さ4.15mを測る。拳大の川原石が敷き詰められており、東側には長辺に沿って縦木舞の痕跡が残る。

出土遺物 上出した遺物についてはグリッドごとに取り上げを行っており、厳密にはSB03かSB04のどちらの建物に帰属するのか区分が難しく、後述する『第6項 方形区画遺構外出土遺物』で一括して取り扱うこととした。ここでは建物内の礫敷遺構SX03の直上から出土した遺物についてのみ取り扱う。陶器壺では肥前系陶器壺や志野脚紐形の中碗2416が出土している。土師器皿は糸切痕が残るロクロ形成のものだけであり、このことは非ロクロ形成の土師器皿との使い分けが行われていたことを示すものかもしれない。木製品には桶樽類や枠、折敷がある。特筆すべきは蓋付きの曲物2418内に墨書きされた自然石2419が入れられていたことである。片面に『王神宮』、もう一方に『米』『泉』と共に、九字のまじないと考えられる9本の線などが描かれている。また、曲物の蓋裏面にも阿倍晴明判紋⁽¹⁴⁾とよばれる星印が墨書きされており、側面にも判読不明の文字が書き連ねてある。

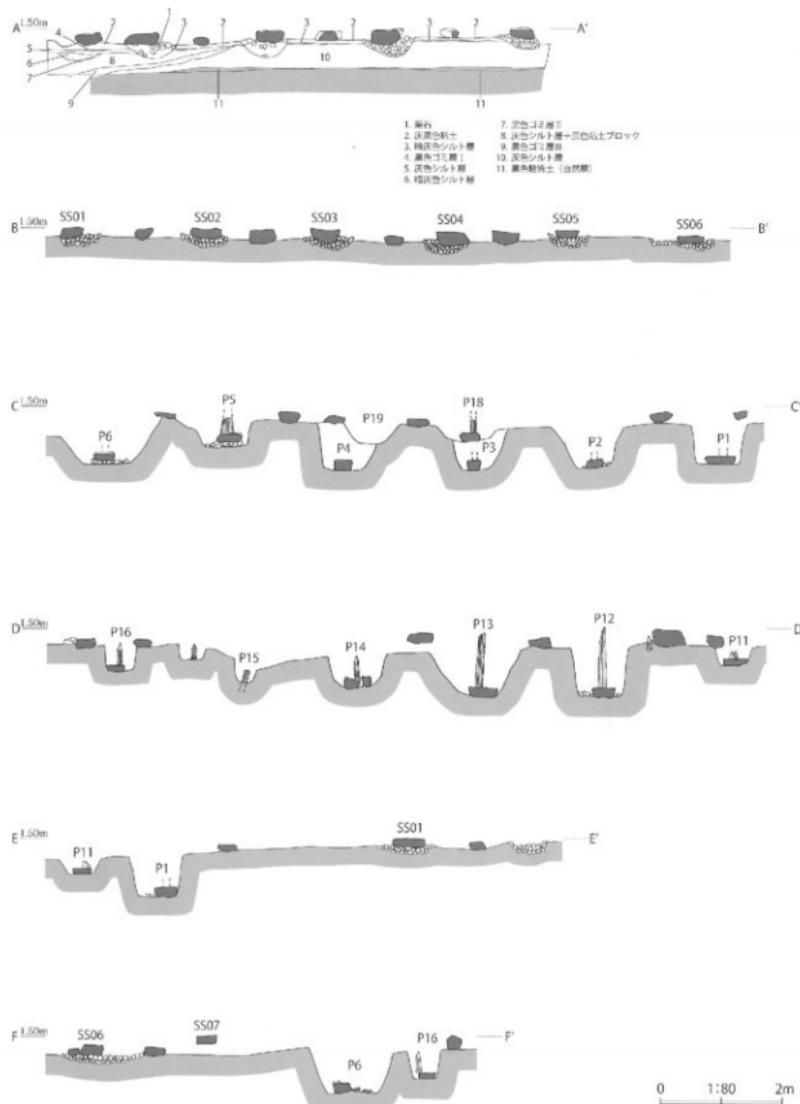
第2項 磐石建物跡 SB04(第402図)

SB03の西側から検出された南北桁行6間(11.8m)、東西梁行4間(7.8m)の磐石建物跡であり、SB03とは2.15m(7尺)ほど離れた場所に位置する。身舎の表側にあたる北面に扉が付くものであり、南北軸は座標方位北より3度ほど東を指している。SB03と直交する場所に配置されており、同時に機能していた建物と考えられる。また、調査指導では廊下等で繋がっていた可能性も指摘されている。

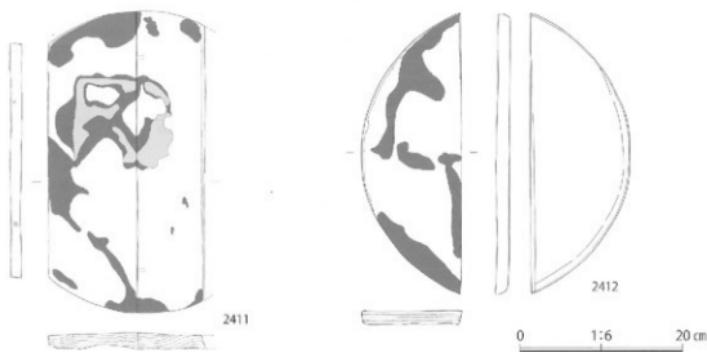
柱間寸法は実測図で 1.96m の 6 尺 5 寸を基準とするが、北側の廊についてだけは 1.35m(4 尺 5 寸) で配置されていた。礎石の基礎地業については、SS12 が根石、P1 が地下式礎石をもつた掘立柱になるものである。これ以外の礎石については基礎地業が行われておらず、差し渡し 36 ~ 58cm の石材が灰白色砂層上に直接据え置かれた状態で検出された。石材は、赤色のものが大海崎石であり、その他は角のない川原石状の石材が利用されていた。梁行の礎石と礎石の間には半間おきにやや小ぶりで華奢な礎石が置かれていた。大部分が大海崎石であり、検出位置は灰白色砂層上面よりも若干浮いた位置に配置されている。



第398図 SB03 平面図



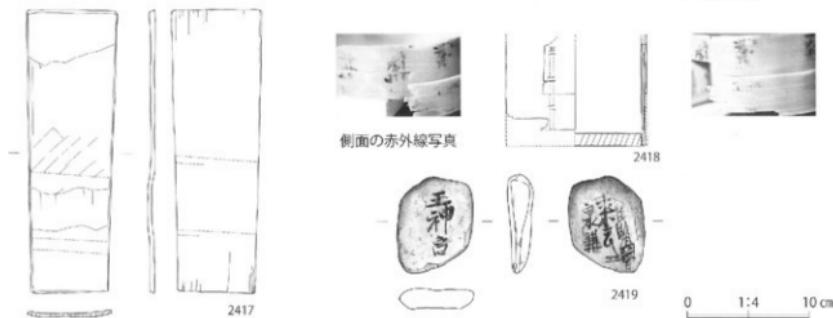
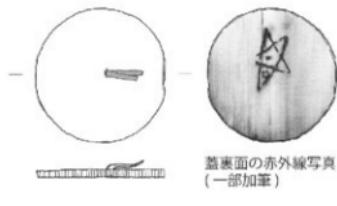
第399図 SB03断面図



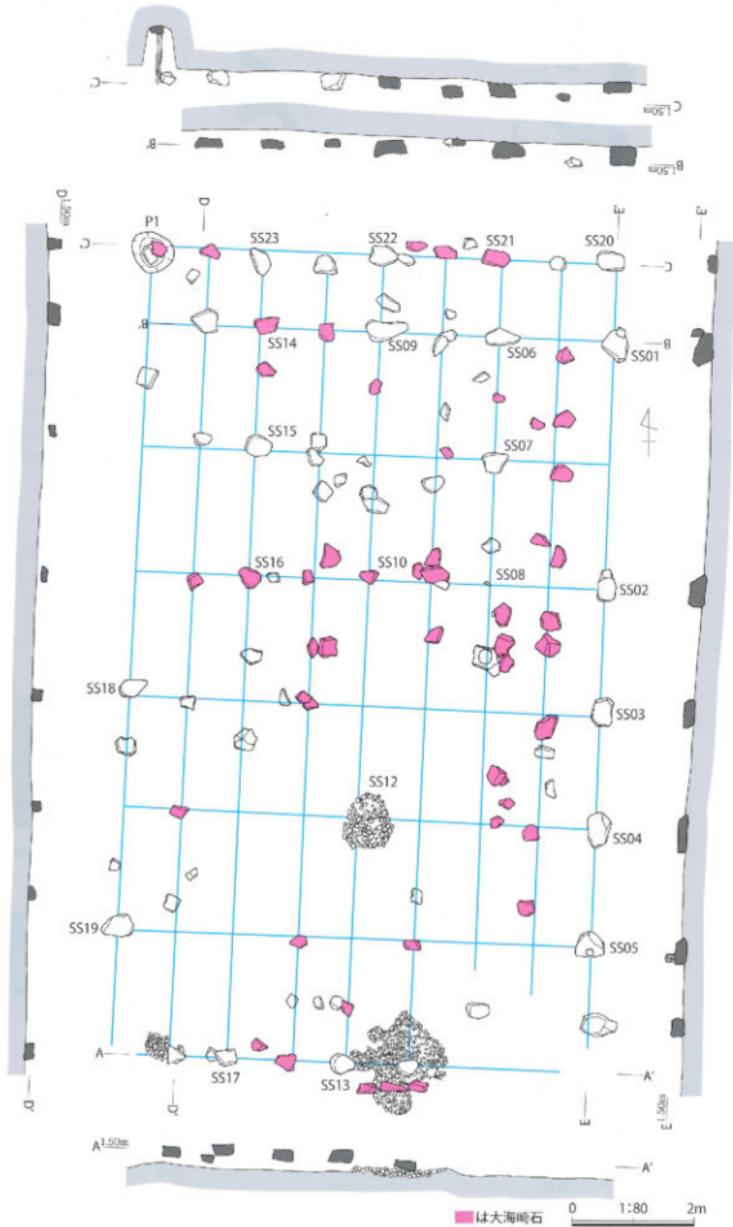
第400図 SB03柱穴内出土遺物



0 1:3 10 cm



第401図 SB03石敷造構(SX03)出土遺物



第402図 SB04平面図・断面図

第3項 導水施設 SX06(第403図)

SBO4の南方にあるA3区で検出された上水に関する遺構である。南北に伸びる台形状に掘り込まれた溝の北端に円形の土坑が掘り込まれていた。形態的には赤穂城遺跡⁽¹⁵⁾や福井城下町遺跡⁽¹⁶⁾で検出される上水道関連遺構に酷似しているが、井戸を主として利用する松江の城下町遺跡では初めて検出されたものである。今後の松江城下町遺跡の調査によっては訂正もあると思うが、今のところ城下町全体に敷設された大規模な上水道関連施設ではなく、この敷地内だけで利用された施設と考えている。つまり、飲料に適した水が湧き出る井戸から水を分配するような施設を想定しており、便宜的に導水施設とした。そもそも松江城下町周辺は飲料水に苦労した地域であり、明治の頃までは水充りが訪れていたという記録が残っている。調査区内においても多数の井戸を確認しているが、金気が強く飲料水として利用できそうな水が湧き出る井戸は限られていた。



SX07

汲み出し桶 土坑は平面円形を呈し、規模は直径1.4m、深さ最大59.4cmを測る。土坑底部には丸桶の抜き取り痕があり、底径62cm前後の桶が据え付けられていたと考えられる。ここが終点となることから、竹管を繋ぐために用いられた会所のようなものではなく、水を汲み取るための汲み出し桶と考えられる。汲み出し桶の抜き取り後には廃棄土坑として利用されており、ここからは貝などの食物残渣や国産陶器、中国青花、土師器皿、瓦、木製品が出上している。

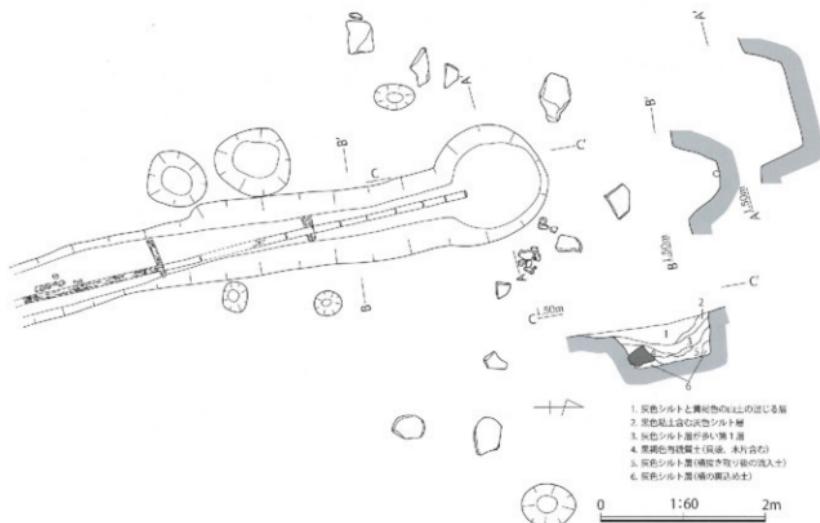
管路部分 溝は長さ5.0m以上、幅0.76～0.94m、深さ44.9cmを測るものであり、更に南の調査区外へ向かって続いている。溝の底部には節を抜いた竹が埋設されており、その周囲には植物繊維が巻き付けられていた。竹管の下には30～50cmほどに切断された芯持ち材が2本ほど横木として敷いてあり、微妙な高さ調整がなされていたことが分かる。その勾配は約5.0mで15.2cmであり、北側の汲み出し桶へ向かって徐々に低くなっていく。竹管は真竹製で直徑約8.0cm、長さ6.0mを測るものであった。

出土遺物としては埋土中から土師器皿、瓦、木製品が出土したと記録しているが、当初は土坑が付属しているという認識がなく、出土地点から考えて桶の抜き取り後のゴミ層から掘り上げたものである。このため導水施設出土遺物として土坑出土遺物と一緒に取り扱っている。

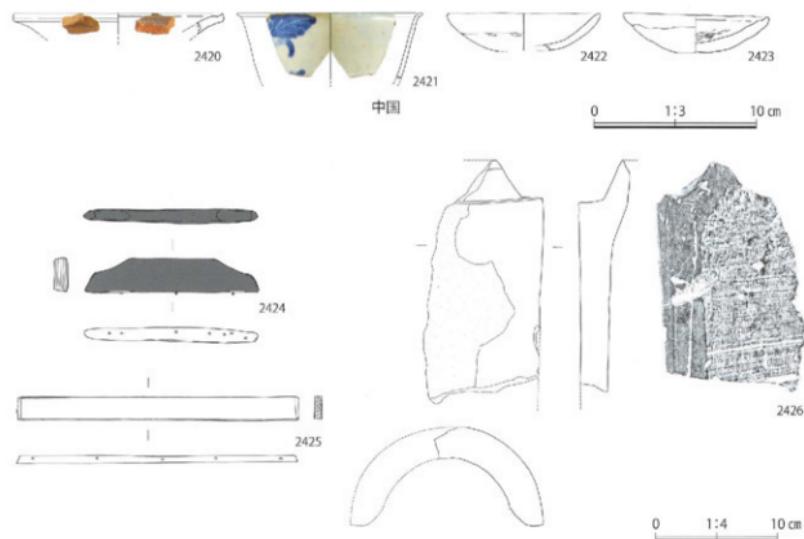
石組遺構 竹管の抜き取り時に壁面に横穴を開けたところ、石組遺構に繋がっていることを確認した。平面調査ができなかったため、この石組みの規模や平面形などは分からなかった。性格としては竹管と竹管を繋ぐために用いられた小規模な石製の枠(会所)か石組の井戸と考えられる。

上屋 付近にピットや礎石があるものの、散在的であり上屋を構成する柱の並びを確認することはできなかった。仮に上屋や板垣といった遮蔽物があったとするならば、これらの柱穴や礎石を候補としてあげることができる。

出土遺物 導水施設出土遺物(第404図) 出土遺物には国産陶器、中国青花、土師器皿、瓦、木製品のほか、サザエや二枚貝などの食物残渣が出上している。国産陶器には產地不明の無釉陶器と肥前陶器皿がある。2420は口縁部の小片であり、詳細は不明であるが九陶Ⅱ期段階の溝縁形のものである。土師器皿は3点のうち2点を掲載した。いずれも小形の非ロクロ形成のものである。瓦は丸瓦6個(2.71kg)、平瓦2個(0.59kg)が出土しており、このうち丸瓦1点を掲載した。コビキBのものである。木製品は木端を除くと5点が出土しており、この内2点を掲載した。いずれも何かの部材の一部であるが、小片であり詳細は不明と言わざるを得ない。



第403図 導水施設 SX06 実測図



第404図 導水施設 SX06 出土遺物

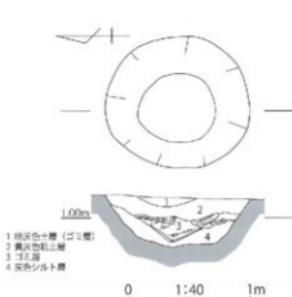
第4項 素掘り土坑

建物跡 SB03 の北側からは、ある程度まとまった格好で素掘りの土坑が検出されている。柱根が遺存しており、柱掘方といったように性格の分かるものもあるが、何も出土していない土坑についてはその形状や掘削深度だけから厳密に性格を区別するのは難しい。ここでは土坑内の土層堆積状況等からゴミの廃棄に利用された SK06 を紹介する。

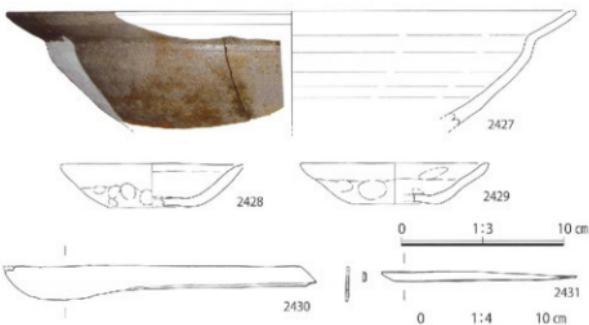
ゴミ土坑

素掘り土坑 SK06(第405図) 方形区画の北側、B3区から検出された素掘りの土坑である。平面形は円形を呈し、規模は上縁部直径 1.16m、深さ最大 37.5cm を測る。規模や平面形は第5節の帯状区画で紹介した SK01 と類似するものであり、ゴミの廃棄後にそれを覆い隠すように山土が入れられている点は同節の SK03 と同様の廃棄形態をもつものである。ゴミ層からは木製品を中心として国産陶器、土師器皿、瓦が出土している。

SK06 出土遺物(第406図) 2427 は肥前陶器の大皿であり、鶲縁形の口縁をもつ。帯状区画から出土した 2377 と同一個体のものである。2428・2429 は非口クロ形成の土師器皿である。小片のためか灯心油痕や煤の付着は認められない。木製品の内、籠状の木製品と楊枝を掲載している。この他、細片のため図化できるものではなかったが、瓦の破片が 1 点出土している。



第405図 SK06 平面図・断面図



第406図 SK06 出土遺物

第5項 碓敷遺構 SX07(第361図)

SX07

SBO3 の北東角付近から検出された性格不明の礎敷遺構である。一部が SBO3 の SX04 と切り合っており、新旧関係は SX04(古) - SX07(新)である。抜き取られていたり動かされた石もあるが、拳大の石材がほぼ方形に配置されており、規模は 2.5 × 2.5m を測る。上屋を構成する礎石や柱穴は検出されておらず、SBO3 の内部から検出された SX03(上間) とは違った性格を考える必要があるのかもしれない。そもそもこの遺構は標高 1.56m の高さで検出されており、第3遺構面と第4遺構面の中間部分にあたる。広い範囲で確認できる遺構面のようなものではないことから遺構面としての設定は行わなかったが、場所によっては小規模な嵩上げ造成が行われていたようで、同じ遺構面であっても高低差がついていたようである。第3-2 遺構面からも同様の礎敷遺構 SX02・07・08(第354図)が検出されているが、北屋敷からはどの遺構面からも検出されていない点が注目される。



第6項 方形区画遺構外出土遺物(第407～414図)

ここで掲載する遺物は、第3遺構面の形成土である黄色造成土を除去した後に検出された第362図第5～13層から出土した遺物を取り扱う。この層は第4遺構面を覆うような格好で検出された土層であり、大量の木片や完形に近い遺物が出土している。これらは建物を解体した時の壁材や屋根材等の廃棄物と考えられ、SB03やSB04上では厚く堆積していた。この層から出土した遺物は建物の存続期間を考える上で有用な資料である。出土遺物には国産陶器、中国陶磁器、土師器皿、金属製品、瓦、植物製品といった種類のものがある。

国産陶器

国産陶器は138点が出土しており、このうち26点(2432～2457)を掲載した。肥前陶器の割合が高く、瀬戸・美濃陶器や備前の無釉陶器、軟質施釉陶器、産地不明品が混じる。産地別に器種構成を見てみると肥前陶器は碗皿類が中心で擂鉢・瓶・壺・香炉といったものがある。瀬戸・美濃陶器は志野胴紐形の中碗2450、備前は擂鉢と大鉢2455、産地不明のものには皿・鉢・壺・瓶といったものがある。特徴的なものは初期京焼と言われる軟質施釉陶器の半筒碗2439が出土している。

貿易陶磁

貿易陶磁には中国青花、白磁、三彩があり、58点のうち10点(2458～2467)を掲載している。青花は精製のものが中心であるが、粗製の大皿も2点混じる。白磁は皿であり、端反形の口縁をもつものである。三彩は交趾焼と言われる華南三彩の小皿であり、鮮やかな青色を呈する。

土師器皿

土師器皿は410破片が出土しており、このうち16点(2468～2483)を掲載した。底部外面に糸切り痕をもつロクロ形成のものと非ロクロ形成のものがあり、大きさには大中小がある。灯芯油痕をもつものは灯明皿として利用されたものである。

金属製品

金属製品は用途不明のものが1点出土しただけである。2484は細長い板状の金属製品であり、長さ13.4cm、幅20cm、重量19.64gを測る。

瓦

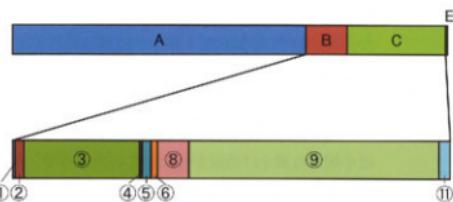
瓦は285点(63.37kg)が出土しており、このうち4点(2552～2555)を掲載した。出土した瓦の内訳は丸瓦48点(12.84kg)、平瓦228点(50.16kg)、不明品9点(0.37kg)であった。

植物製品

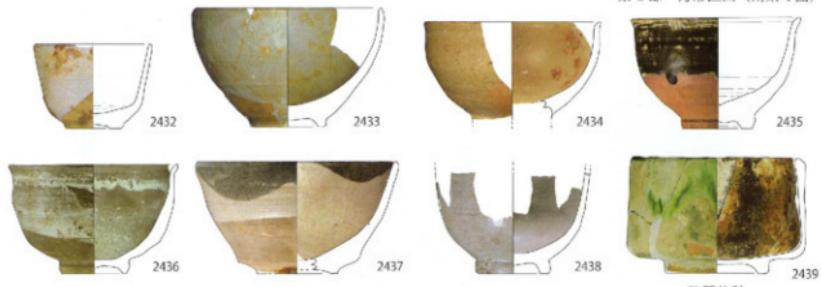
植物製品の大部分が木製品であり、台帳に登録したものは209点であるが、板切れや木端などを含めると出土量はこの数倍に上る。破片の状態で出土しているものが多く、不明品の割合が高い。種類が特定できるものには櫛、下駄、笠、箸、楊枝、曲物、膳(折敷など)、漆器椀・皿、桶樽類、栓、柄杓、人形、木簡など多岐にわたる。墨書きもつ資料は7点が出土している。断片や文字が判然としないものが多いが、2546は人名が書かれており「猪兵衛」と読める。また、桶か曲げ物の底に書かれた2550は「こうるか」と読み、いわゆる船の腸や卵の塩漬けを入れるための容器であった可能性がある。この他、2551については人名が横に並べて書き連ねてある木片であるが、その用途は分からぬ。

表22 方形区画遺構外出土陶磁器破片数一覧

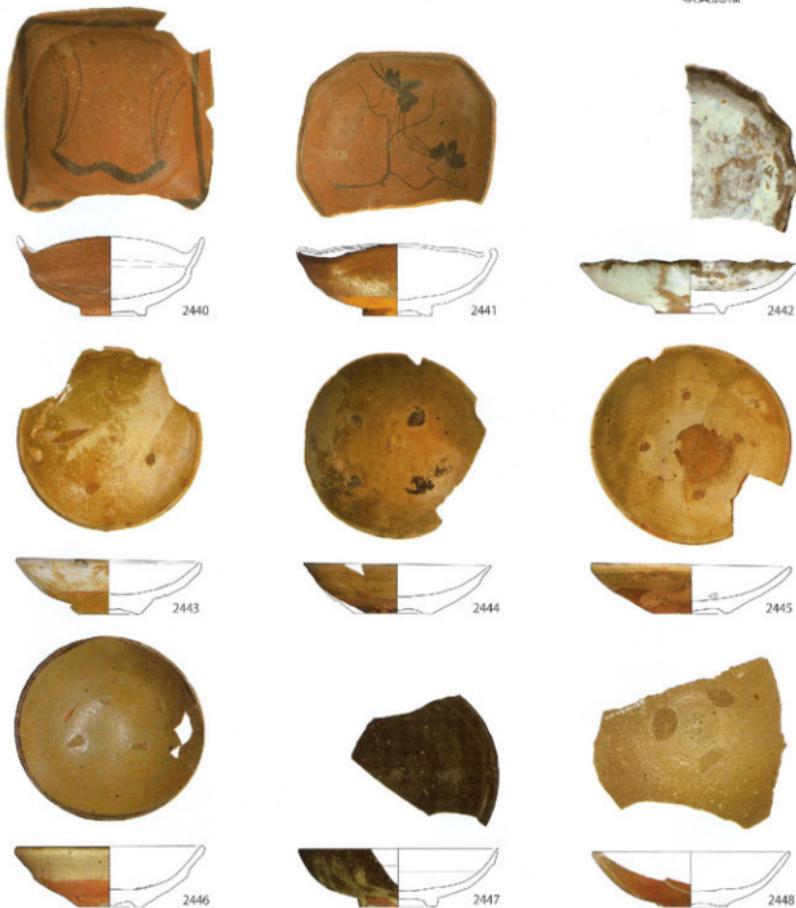
名称	破片数	割合%	BCDの内訳	總件数	割合%
A 土師皿	410	67.3	① 中国青磁	1	0.5
B 中国陶磁器	58	9.5	② 中国白磁	4	2.0
C 国産陶磁器	138	22.7	③ 中国青花	32	26.5
D 中国かむらこ不規	0	0.0	④ 中国五彩等	1	0.5
E 瓦	3	0.5	⑤ 瀬戸天窓	4	2.0
合計	609	100.0	⑥ 櫛	3	1.5
			⑦ 駄舟	0	0.0
			⑧ 軟質施釉陶器	14	7.1
			⑨ 肥前系陶器	112	57.1
			⑩ 肥前系磁器	0	0.0
			⑪ 不明陶器	5	2.6
			⑫ 不明磁器	0	0.0
			合計	196	100.0



第6節 方形区画(南第4面)

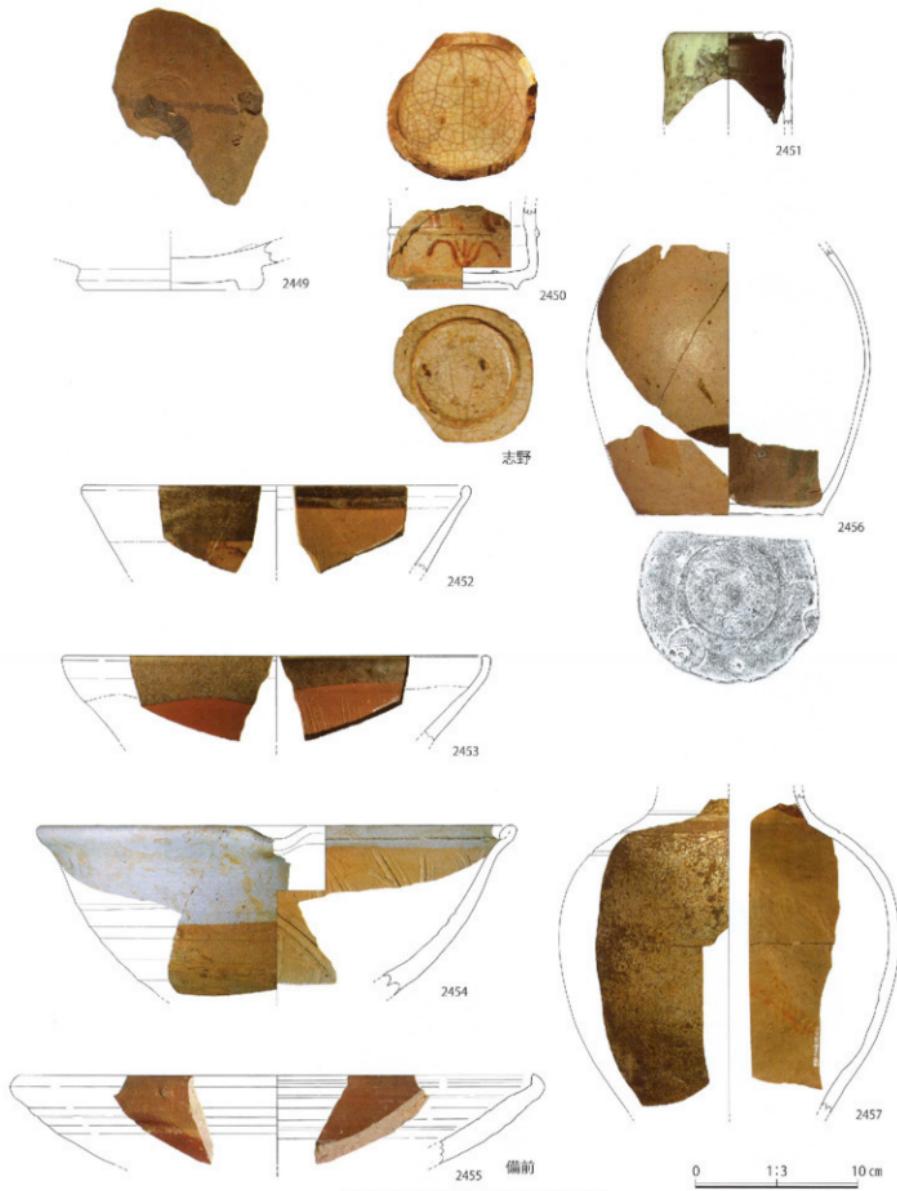


款質施釉



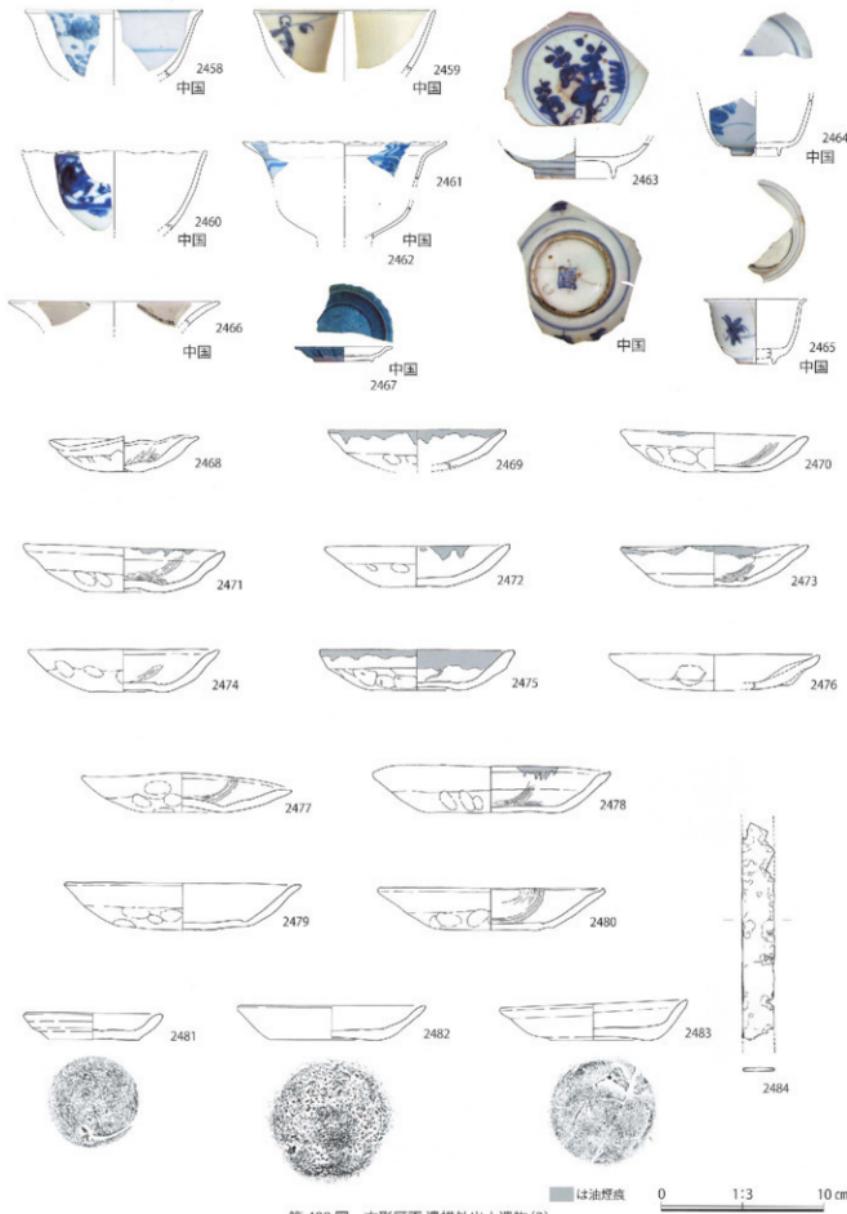
第407図 方形区画遺構外出土遺物(1)

0 1:3 10 cm

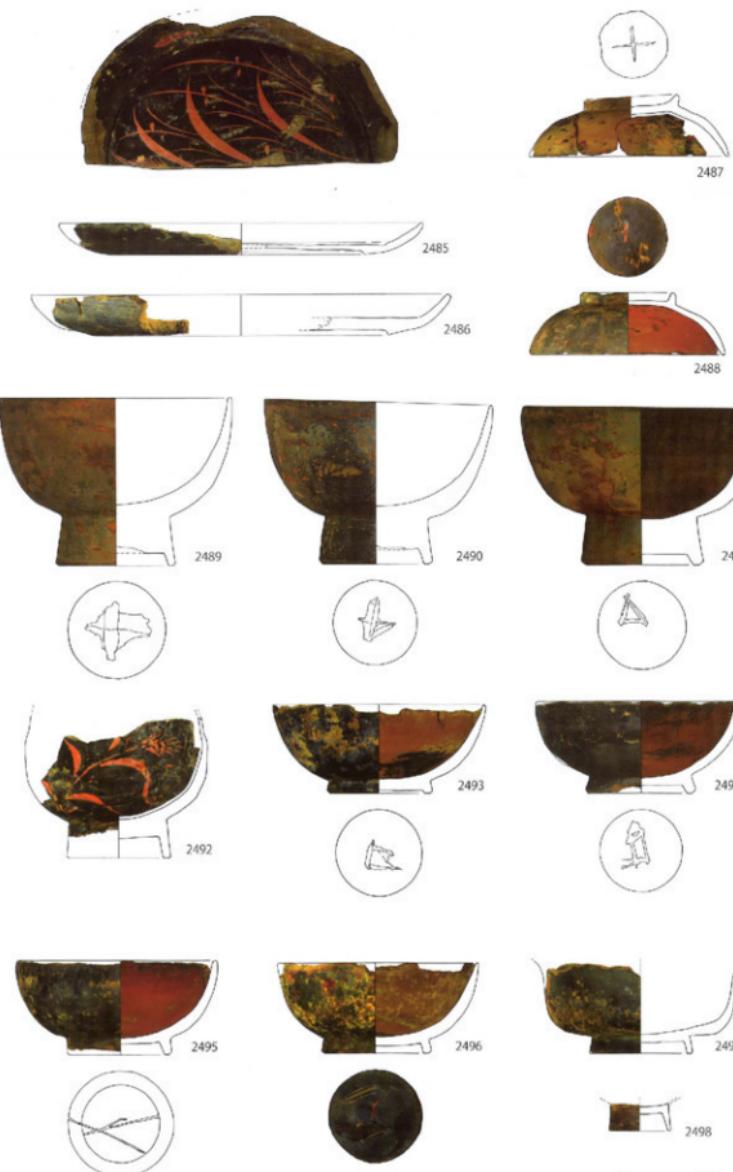


第408図 方形区画 遺構外出土遺物(2)

第6節 方形区画 (南第4面)



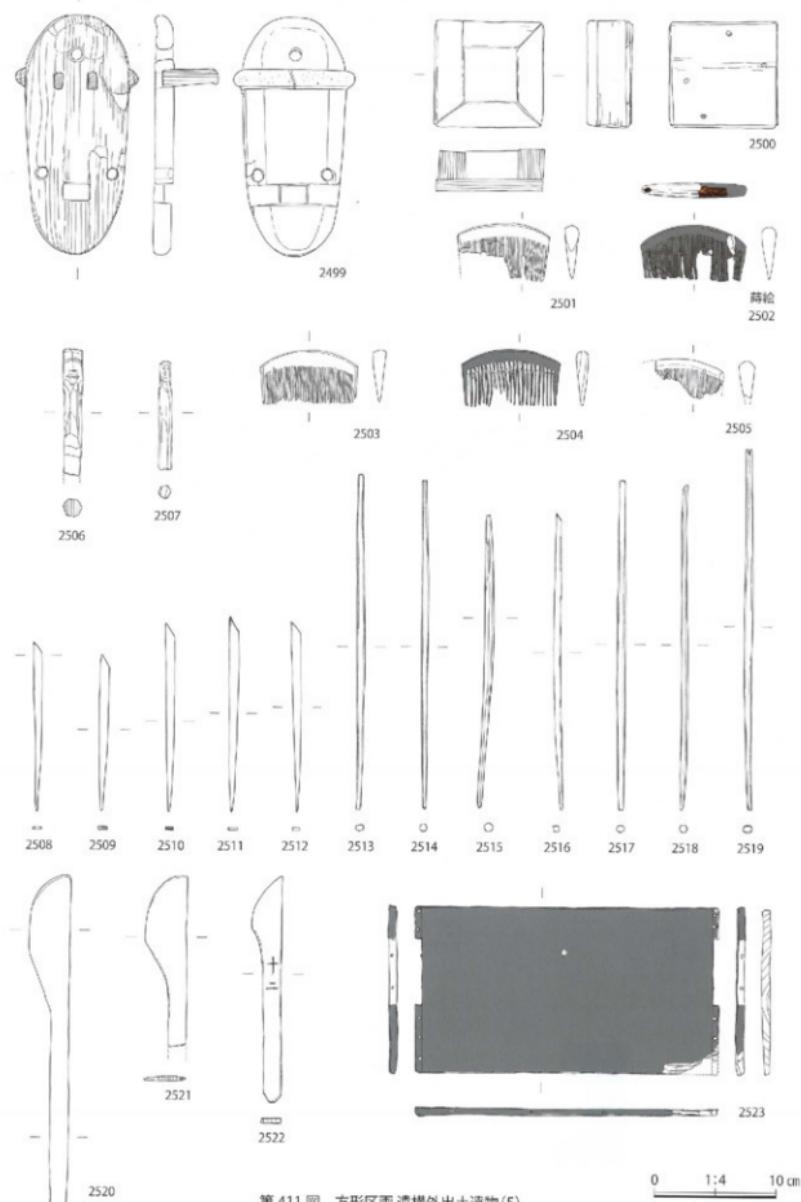
第409図 方形区画 遺様外出土遺物(3)



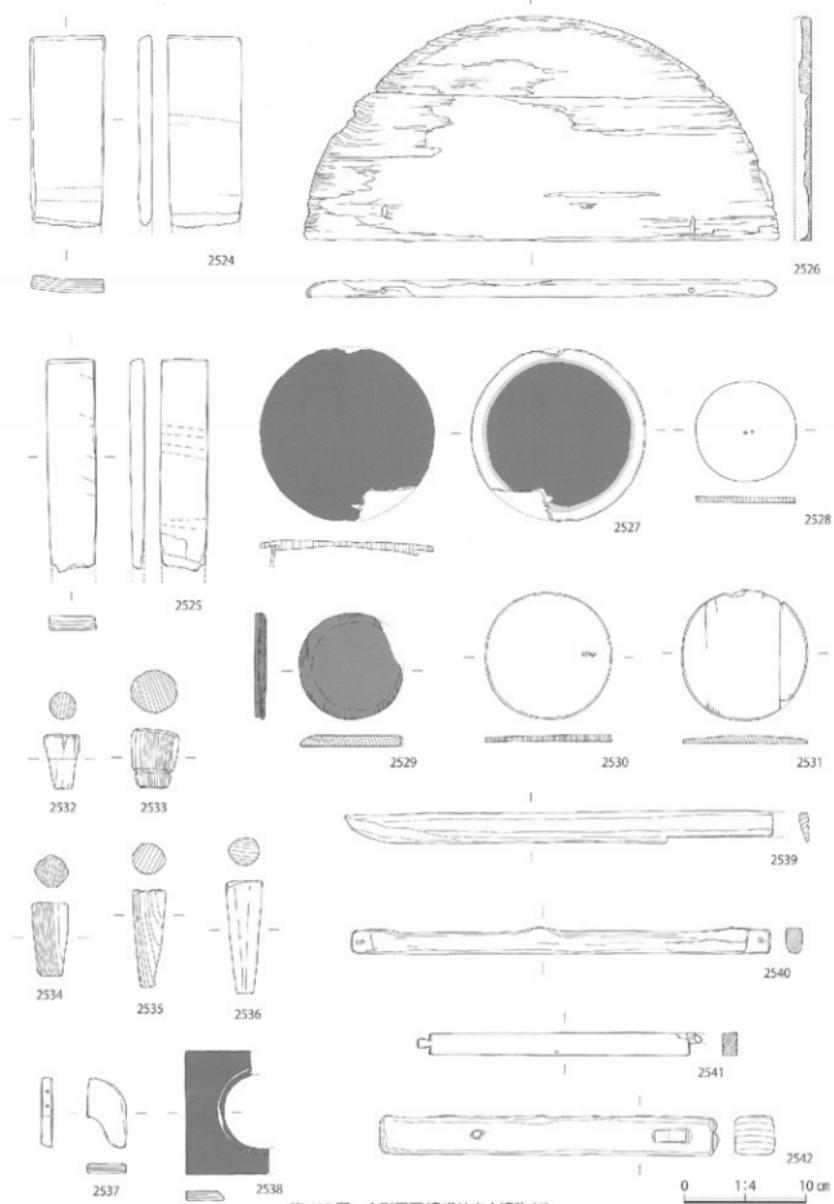
第410図 方形区画 遺構外出土遺物(4)

0 1:3 10 cm

第6節 方形区画（南第4面）



第411図 方形区画 遺構外出土遺物(5)



第412図 方形区画 遺構外出土遺物(6)

第6節 方形区画（南第4面）



上
く
く
志
□
□

2543



2544

□
□
□
□
□
□



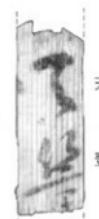
2545 (1:4)

猪
兵
衛



2546

力
屋
右



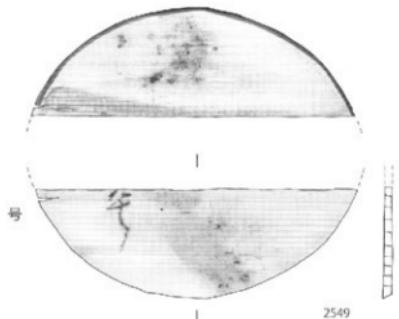
2547

天
登



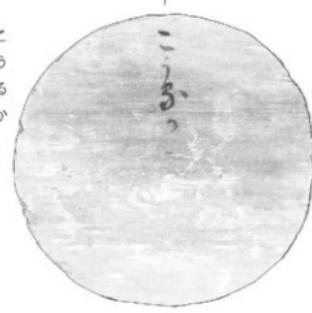
2548

こ
う
る
か



2549

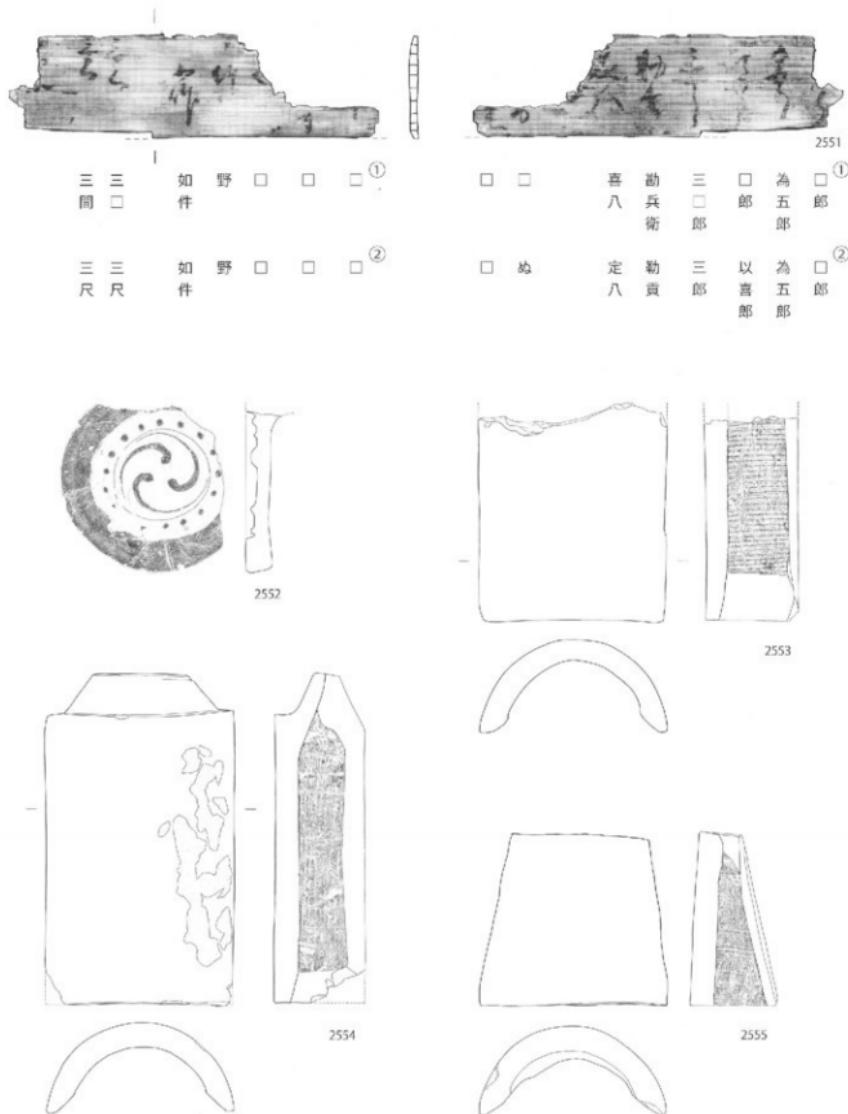
号



2550

0 1:2 5 cm

第413図 方形区画 遺構外出土遺物(7)



第414図 方形区画 遺構外出土遺物(8)

0 1:4 10cm

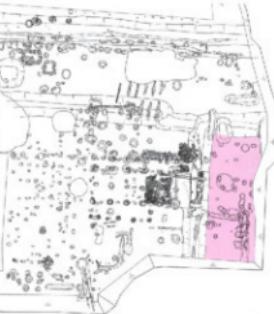
第7節 短冊形区画

間仕切溝SD04に囲まれた長方形の区画であり、短冊形区画としている。検出面での標高は1.01～1.20mを測り、前述の『方形区画』とは土橋で繋がっている。南屋敷の表記は、天守側が西側にあることや絵図に記載された屋敷主の表記が西側を頭にしていることから、この区画が屋敷地の奥部にあたる場所と考えている。主な遺構としては布掘りの杭列SA05、溝、土坑、ピットを検出しているが、大部分が調査区外となるため調査できたのは長さ15m、幅6mほどの範囲である。区画全体からすれば北西隅のごく一部分でしかなく、この区画の性格を復元するには至っていない。第3遺構面の段階になると、ここに多数のゴミ廃棄土坑がつくられており、これらの土坑は第4遺構面にまで達していた。このため、土坑の掘り残しや搅乱もあり、出土した遺物の一部は第4遺構面に伴わないものであった。これらの遺物については混入品として取り扱い、掲載していない。

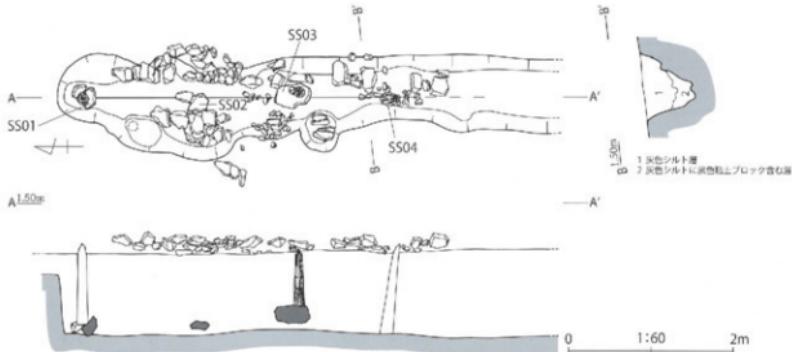
第1項 杭列 SA05(第415図)

SA05 短冊形区画の南東側で検出した杭列であり、南北方向に延びる布掘り柱掘り方の底部から礎盤石と考えられる大海崎石3個SS01～03と礎盤石をもたない柱根1本SS04を検出している。検出できたのは3間分の3.92mであり、その柱間寸法は1.30mであった。南北軸は座標方位北より1度東を指している。

一方、布掘り柱掘り方は造成土を掘り抜き自然堆積層の地盤まで達していた。規模は長さ6.0m以上、幅0.8～0.9m、深さ79.4cmを測り、更に南へ向けて続いている。調査区外にこれに対応する柱があり掘立柱建物跡として復元できる可能性はあるが、柱列の両側から平行に配置された写真の石列を検出しており、建物跡というよりは柵か堀のような施設だったと思われる。



SA05 上面の石列



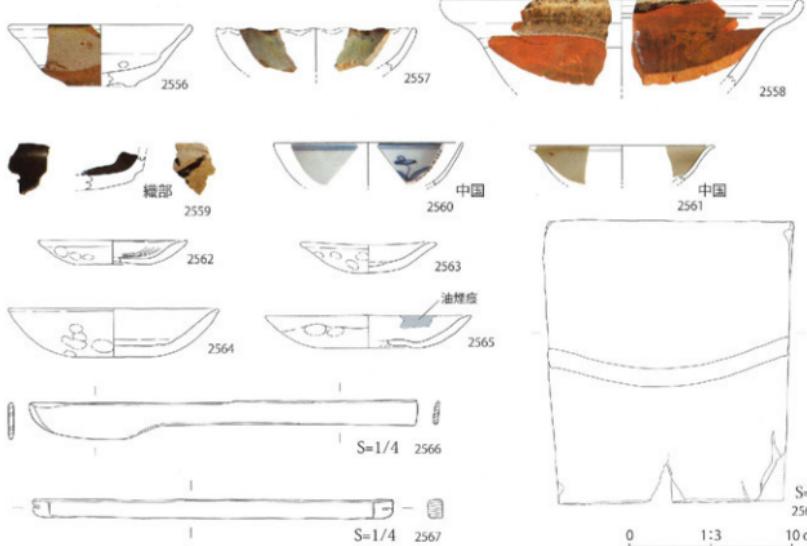
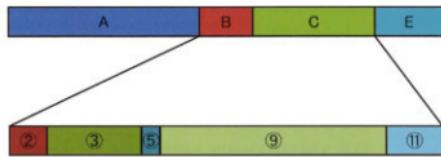
第415図 SA05 実測図

第2項 短冊形区画遺構外出土遺物(第416図)

- 国産陶器** 国産陶器は肥前陶器の割合が高く、瀬戸・美濃陶器や产地不明品が混じる。肥前陶器は碗皿類や擂鉢、瀬戸・美濃陶器は縹部の中碗、产地不明のものは壺・碗といったものがある。
- 中国陶磁** 中国陶磁には白磁と青花があり、7点のうち2点(2560・2561)を掲載している。精製のものであり、碗や皿といった器種が出土している。
- 土師器皿** 土師器皿は25点が出土しており、このうち4点(2562～2565)を掲載した。破片が多く底部外側が残っているものは少ないが、実測できたものは非口口形成のものであった。
- 瓦** 瓦は43点(8.66kg)が出土しており、その内訳は丸瓦11点(1.41kg)、平瓦31点(7.13kg)、不明品1点(0.12kg)であった。2568は平瓦であり、4面の中で唯一完形に近い状態で出土したものである。法量は長さ29.1cm、幅25.5cm、重量2.0kgを測る。
- 植物製品** 植物製品の大部分が木製品であり、台帳に登録したものは14点であるが、板切れや木端などを含めると出土量はこの数倍に上る。種類が特定できるものは窓、下駄、漆器椀だけであった。

表23 方形区画遺構外出土陶磁器片数一覧

名稱	破片數	割合%	BCDの内訳		ほかの 割合%
			① 中國青磁	② 中国白磁	
A 上階里	25	43.9	① 12.5	0	0.0
B 中国產陶器皿	7	12.5	② 7.1	2	8.7
C 国産陶器皿	16	28.1	③ 5.6	5	21.7
D 中国小口甌か不明	0	0.0	④ 中国白彩等	0	0.0
E 酒入品	9	15.8	⑤ 瀬戸表素	1	4.3
合計	57	100.0	⑥ 肥前	0	0.0
			⑦ 越前	0	0.0
			⑧ 軟質燒結陶器	0	0.0
			⑨ 肥前系陶器	12	52.2
			⑩ 肥前系青磁	0	0.0
			⑪ 不明陶器	3	13.0
			⑫ 不明磁器	0	0.0
			合計	23	100.0



第416図 短冊形区画遺構外出土遺物

第8節 小結

はじめに

松江の城下町についてはこれまで本調査の実績がなく、今回の調査地においても既存建物による搅乱のため遺構は残っていないというのが大方の意見であった。当然、嵩上げ造成が繰り返された複数の遺構面が存在するという認識ではなく、当初は庭や駐車場部分に限定的に遺存していると考えていた遺構の検出を主な目的として調査に取り掛かっている。しかし、掘り進むにつれて遺構の残りが良好であることが判り、特に最下層の堀尾期の遺構面についてはほとんど無傷の状態で遺存していることが判明した。この調査を端緒として各所で城下町遺跡の調査が行われることとなったが、当地ほどの面積が確保できる調査区はなく、安全勾配で調査を行うと残りの良い下層についてはほとんど調査ができないといった状況である。これだけ広範な面積で堀尾期の遺構面の調査ができるのは非常に稀なことである。遺跡全体の総括は第8章に譲ることとし、ここでは南屋敷第4遺構面についてのまとめを行うこととした。

嵩上げ造成の契機

まず、遺構面の年代である。低湿地に盛土を施して造成された最初の遺構面であり、その開始時期は堀尾氏が松江に城地を移したとされる 1607～1611 年頃と考えて間違いないが、存続期間については様々なパターンを想定することができる。存続期間を考える上で考えなくてはならない問題が、遺構面造成の契機である。松江の城下町において一般的に言われているのが水害を契機とする造成である。確かに低湿地に造成された城下町であるため、江戸時代には記録に残るような水害がたびたび発生している。ただし、土手を決壊させて氾濫を起こすような河川がないため、1666 年に富田城下町を壊滅させたような上石流型の水害ではなく、平成 18 年 7 月豪雨^[17]で見られるような浸水型の水害だったと思われる。つまり、大雨により穴道湖・大橋川の水位が上昇して地盤の低い場所で側溝等から水が逆流し、降雨が排水不能となることから発生するものである。このため洪水の痕跡は残りにくく、今のところ松江城下町全体を見ても洪水の跡は検出されていない。屋敷を押し流すような水害ではないことから、水害を直接の原因として造成を行うことはなかったように思う。

また、江戸の城下町のように火災が原因になった可能性も考えられる。江戸ばかりでなく、大阪や杵築（大分県）の城下町でも火災がその契機となっており、焼土層が時期を決定する上での鍵層となっているような城下町もある。確かに松江においても大火の記録が残っていることから、場所によっては火災が原因となって嵩上げ造成を行った屋敷地があることは否定できない。しかし、当調査区内に限ってみればそのような火災の痕跡はなく、少なくとも第4遺構面から第3遺構面に移る際の契機は火災ではなかったと言える。

それでは何を契機として造成が行われていたのであろう。現在、歴史館の調査区で考えられているのが屋敷主の交代である。具体的には藩主の交代によって侍町の屋敷割が変更となり、それに伴って嵩上げ造成を行って屋敷を建て替えるというものである。当然そこには繰り返される浸水に対処するため洪水対策という意図が含まれていたと考えられ、水害のない時代においても建て替えを行う際には嵩上げを行ったのであろう。この考えに基づいて各遺構面で想定される年代を一覧表にしたもののが表 24 であり、『山上遺物』『検出遺構』『北屋敷調査区の成果』をもとに南屋敷第4遺構面がどの時期に当てはまるのか考えてみたい。

存続期間

遺物からすると表 25・26 が示すように肥前系陶磁器については磁器（初期伊万里）の出土ではなく、すべてが陶器であった。皿については九陶 I - 2 期（1594-1610 年代）に含まれる鉄絵が施されたものや胎十目ものが主体であるが、II 期（1610～1650 年代）の砂口の皿 2375・2448 や溝縁状の口縁部 2420 をもつものも若干ではあるが出土している。また、碗についても高台の裏ま

で軸薬が施された 2438 もあり、すべてが I・II 期に収まるものではない。消費地である大阪では、このような組成は大坂夏の陣の焼土層から出土する 1615 年までの遺物の組成と良く似ているようである。⁽¹⁸⁾ 第4造構面を 1607～1633 年の造構面と考えるには遺物の組成としては占すぎるようで、堀尾方に第4造構面を放棄して第3造構面を造成した可能性が指摘されている。(表 24A・B)

検出された造構についてだけ注目するならば、屋敷境の重要な機能の 1 つである排水機能がなくなってしまう時期がある。第4節の SD02・SA04 で紹介した第4造構面の最終段階であり、この排水機能の消滅という事象を屋敷境の消滅として積極的に評価するのであれば、寛永 11(1634) 年に堀尾氏に代わって京極氏が入部してきたことによる屋敷剤の変更と捉えることもできる。つまり、京極期においても第4造構面が利用されていたと考えることができる。(表 24E～G)

北屋敷の調査成果を参考すると、北屋敷第3造構面の土坑 SK23 内から京極期の屋敷主と考えられる佐々(九郎兵衛)の名前に入った木簡が出土しており、京極期の造構面と結論付けられている。北屋敷第3造構面の石積溝の屋敷境は南屋敷第3造構面と対応する関係にあることから、南屋敷第3造構面も京極氏により形成されたと考えることも可能なかもしれない。(表 24C～F)

造構面の時期 このように、何を根拠にするかによって造構面の造成主体者が変わってしまう結果となる。これは京極氏の治世が 4 年間と短く、北屋敷第3造構面のように屋敷主の名前が入った木簡などが出土しない限り、出土した陶磁器だけでは京極期をどちらの造構面に属するのか結論が出ないためである。厳密に屋敷主を絞り込むことができず、第4造構面は 1607～1611 年頃に造成され、1638 年に松平直政が入部するころにも機能していた可能性のある造構面と軒をもって考えておきたい。

表 24 第3・4造構面の時期一覧表

	第3面を堀尾氏が造成		第3面を京極氏が造成					第3面を松平氏が造成
	A	B	C	D	E	F	G	
第3面	堀尾・京極 松平	堀尾・京極 松平	京極	京極・松平	京極	京極・松平	松平	
第4面	堀尾	堀尾	堀尾	堀尾	堀尾・京極	堀尾・京極	堀尾・京極	

*堀尾期 1607～1633 年、京極期 1634～1637 年、松平期 1638 年～

造構面の当主 次に、第 12～14 図(P11)を参考に南屋敷第4造構面の当主について考えてみたい。低湿地に盛土を施して造成された最初の造構面であり、堀尾氏の家臣が第4造構面を生活の舞台としていたことは間違いない。島根大学付図書館所蔵の堀尾期の松江城下町絵図を参考にする。周辺の道路や堀の形状は現在と変わっておらず、屋敷境を挟んで北から 2 番目の屋敷地であることからすると『堀尾右近』の屋敷地と考えることができる。ただし、絵図に描かれた屋敷地間の比率をそのまま現代の住宅地図にはめ込むと、北から 2 番目の『堀尾右近』、北から 3 番目の『揖斐伊豆』どちらとも取れる場所に屋敷境が位置することとなる。仮に『揖斐伊豆』の屋敷地とした場合、一番北側の『堀尾采女』と『堀尾右近』の屋敷境が存在しないこととなるが、これについては同じ堀尾姓であることから、絵図には界線が引かれているものの、同じ屋敷地内に居住していたと解釈することも可能かもしれない。しかし、北屋敷からは絵図に記された場所に右近の屋敷となる建物跡が検出されていないことや、絵図に記されたそれぞれの屋敷地の大きさの比率まではそれほど正確に記載されていなかったと考えられることから、今のところ 500 戸の堀尾右近の屋敷地と考えている。

屋敷の配置 建物の配置は、大通りに面した西側が表町となる。17 世紀前半の絵図ではあるが、前述の松江

城下町絵図〈堀尾期〉にも西側を頭として右近の名前が表記されている。大通りから 21.6m までは調査区外となるため詳細は不明であるが、城山北公園緑改良工事予定地⁽¹⁹⁾の例を参考にすると大通りの脇には素掘りの側溝が掘られている可能性が高い。また、長屋門か堀の基壇と考えられる石垣が検出されている遺跡⁽²⁰⁾もあることから、こうした施設の存在も想定される。大通りから 25.2m 入った位置には平側を表門に向かって 4 間 × 6 間の総柱の礎石建物跡 SB04 が配置され、その奥には妻側を表門に向かって 2 間 × 6 間の建物跡 SB03 が SB04 と直行する格好で配置されている。敷地の北側からは「堀尾采女」との屋敷境の大溝を検出したが、南側の「堀斐伊豆」との屋敷境は検出されていない。屋敷境から調査地の南端は 32.5m を測るが、これよりもさらに広い屋敷地だったことになり、屋敷地の規模は東西 38.0m 以上、南北 32.5m 以上である。

今後の課題 建物の上屋構造についてはほとんど検討していないのが実態である。礎石の配置は上屋構造と密接な関わりをもつことからも今後の検討課題としたい。課題としては礎石の石材についての検討も必要となってくる。第 398・402 図に礎石の石材を図示したが、第 4 遺構面の礎石の多くは上部が扁平な河原石であり、当地で大海崎石と呼ばれる安山岩も混じる。束柱の大部分は大海崎石であり、その他の遺構を構成する石材の大部分も大海崎石であった。第 3 遺構面で利用される島石（玄武岩）は全く出土しておらず、来待石（砂岩）も出土していない。これらの石材の利用状況を検討することにより、将来的には遺構面の時期を礎石石材で決定することが可能になるかもしれない。屋根材については、表 27 に示したように遺構面、各遺構内からも瓦が出土している。北屋敷から廃棄されたと考えられる屋敷境から出土したもの除去でも総数 522 点 (111.4kg) が出土しているという事実は、全部ではないにしろ建物の一部については瓦が葺かれていたと考えて問題はないであろう。

続く京極氏も第 4 遗構面を生活の舞台としていたと想定した場合（表 24E～G）、屋敷境を挟んで北から 2 つの屋敷地であることからすると『生駒九郎左衛門 (1,500 石)』の屋敷地となる。しかし、500 石の石高しかない右近の屋敷地を 1,500 石の家臣が拝領することがあったのかという疑問が残る。石高から考えると堀尾右近の屋敷地は佐々九郎兵衛の屋敷地に取り込まれ、生駒は堀斐の屋敷地（一部か）を拝領したと考えるのが自然かもしれない。この右近の屋敷地が佐々の屋敷地に取り込まれた事象が屋敷境の消滅として遺構に反映されているのかもしれない。ただし、この考えについては北屋敷の遺構面の解釈と共に齟齬が生じてしまう結果となってしまった。このことについては第 8 章で詳述する。

このように松江城下町遺跡については検討や検証を加えなければならない点がまだまだ多い。調査は 4 年半の積み重ねしかなく、始まったばかりといえる。今回の調査報告においても遺漏や今後の訂正があることをご了解いただきたい。

表 25 南屋敷第 4 面遺構内出土陶磁器破片数一覧表

名称	破片数	割合%	BCD の内原 破片数	原合%
A 上部	165	69.9	① 中国青磁	2 2.9
B 中国産陶磁器	10	4.2	② 中国白磁	5 7.2
C 中国産陶磁器	56	23.7	③ 中国青花	3 4.3
D 中国・伝産か不明	3	1.3	④ 中国五彩等	0 0.0
E 蓋入品	2	0.8	⑤ 澄川美濃	10 14.5
合計	236	100.0	⑥ 鶴前	2 2.9
			⑦ 鶴前	0 0.0
			⑧ 欲貞新桂萬利	0 0.0
			⑨ 鶴前系陶器	40 58.0
			⑩ 肥前系陶器	0 0.0
			⑪ 不明陶器	4 5.8
			⑫ 不明磁器	3 4.3
			合計	69 100.0

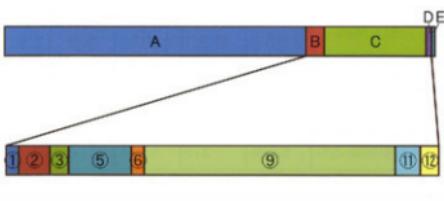


表26 南屋敷第4遺構面出土陶磁器破片数一覧表（屋敷境出土遺物は除く）

名称	破片数	割合%	BCDの内訳	破片数	割合%	BCDの内訳	破片数	割合%
A 上師皿	771	66.4	① 中国青磁	3	2.5	⑦ 越前	1	0.8
B 中国産陶磁器	92	7.9	② 中国白磁	16	13.4	⑧ 敷質施釉陶器	14	11.8
C 国産陶磁器	278	23.9	③ 中国青花	72	60.5	⑨ 肥前系陶器	223	187.4
D 中国か国産か不明	4	0.3	④ 中国五彩等	1	0.8	⑩ 肥前系磁器	0	0.0
E 混入品	17	1.5	⑤ 潮戸美濃	20	16.8	⑪ 不明陶器	14	11.8
合計	1162	100.0	⑥ 備前	7	5.9	⑫ 不明磁器	4	3.4
						合計	119	100.0

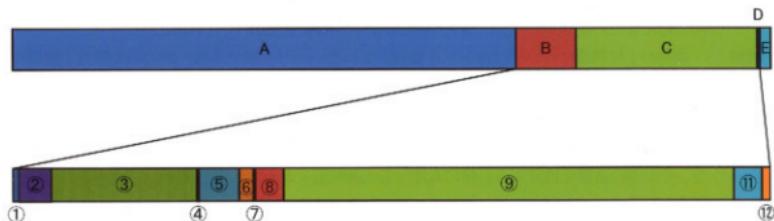


表27 南屋敷第4遺構面出土瓦一覧表(屋敷境出土遺物は除く)

出土地点	丸瓦		平瓦		不明		総数		コピキA	コピキB	棟瓦
	重量(kg)	数量(点)	重量(kg)	数量(点)	重量(kg)	数量(点)	重量(kg)	数量(点)			
① 带状区画	12.6	50	19.06	108	0.22	4	31.88	162	○	○	○
② 方形区画	12.84	48	50.16	228	0.37	9	63.37	285	?	○	×
③ 矩形区画	1.41	11	7.13	31	0.12	1	8.66	43			○
④ その他の遺構内	5.45	18	1.81	12	0.25	2	7.51	32	×	○	×
合計	32.3	127	78.16	379	0.96	16	111.42	522			

出土瓦總破片数の比較



※参考資料：第3遺構面の屋敷境裏込め出土瓦

出土地点	丸瓦		平瓦		不明		総数		コピキA	コピキB	棟瓦
	重量(kg)	数量	重量(kg)	数量	重量(kg)	数量	重量(kg)	数量			
⑤ 屋敷境内	16.03	72	20.17	113	0.1	1	36.3	186	?	○	○
⑥ 南側石垣裏込め	4.86	26	9.05	54	0.07	1	13.98	81			×
⑦ 北側石垣裏込め	82.96	375	53.81	284	0.3	8	137.07	667	○	○	×

註

- (1) 松江城下町遺跡の調査当初において、この黒色粘土が盛土層なのか自然堆積層なのか議論の分かれところであった。調査指導では自然の營力では説明のつかない十層の乱れが指摘され、人為的に運び込まれた盛土という見解も示されている。しかし、検山されるレベルは場所により違うものの、城下町のどこを掘ってもほぼ均一の厚さで堆積しており、今口では城下町造成以前の旧地表面として間違いないものと考えている。
- 調査指導時に指摘された「自然の營力では説明のつかない上層の乱れ」については、城下を造成する際に踏み入れた人々の活動の痕跡と認識している。
- なお、水田の耕作上の指摘もあるが、考古学的に畔や水路と言った遺構は現在までのところでは検山されておらず、自然科学的分析^モも行われていないためその結論は出ていない。今後の調査に期待したい。(P391)
- 城下町造成以前の旧地表面である黒色粘土は、灰色シルト層の上面にほぼ均一の厚さで水平堆積している。検出されるレベルは場所により違っているが、城下町の広い範囲で同様の層序の下で検出されている。調査当時は前述したとおり、どの十層が城下町造成以前の旧地表面なのか結論が出ておらず、土壤の提供を行った第9章『中世松江平野の古環境』で分析いただいた埋土下の上層は、層序の面から今口城下町造成以前の旧地表面として扱っている黒色粘土とは明らかに違うものであることをお断りしておく。調査担当者によると、付近の黒色粘土の切り合いで状況から、この地には土坑か溝状の遺構があり、その埋土部分の可能性を考えられるということである。
- (2) 『鳥根県史第8巻 県政時代(下)P47 には詳細な城下造成の過程が年ごとに記載されているが、「統松江藩の時代」の「築城物語」の中で西島太郎氏が検証されているように、これは口碑を開き取り書き記した可能性が高いことからこのような表現とした。(P393)
- (3) 城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡(母衣町68番地) 第3調査区発掘調査概要報告書 平成20(2008)年9月 (P394)
- (4) 城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡(母衣町40番地外) 発掘調査概要報告書 平成21(2009)年6月 (P394)
- (5) 九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会 10周年記念 2000年2月 (P396)
- (6) 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所保存修復科学センター 伝統技術研究室 室長北野信彦氏の御教示による。(P396)
- (7) 木製品に付着、塗布された黒色の付着物をアミフェで表現している。分析に出ていないため確定できないが、漆や柿渋、木からの灰汁といったものと考えている。桶や樽などの容器内にも同色の付着物を観察することができるが、これらは内容物が染み込んだものである可能性も考えられる。以下、第6章の木製品のアミフェについてはこれによる。(P403)
- (8) 勝浦康守 徳島城下町「季刊考古学」第103号 特集 近世城郭と城下町 雄山閣 2008年5月 (P406)
- (9) 乗岡大「備前焼窯跡の編年について」第3回近世備前焼研究会資料
2000年11月 中近世備前焼研究会 (P408)
- (10) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 NO2』 1982年8月 日本貿易陶磁研究会 (P408)
- (11) 城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡(母衣町68番地) 第1調査区発掘調査概要報告書 平成20(2008)年3月
城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡(母衣町68番地) 第2調査区発掘調査概要報告書 平成20(2008)年7月
註3と同じ (P415)
- (12) 有田町教育委員会学芸員村上伸之氏の御教示による。(P421)
- (13) 註6と同じ (P421)
- (14) 島田成矩『堀尾吉晴』1995年1月 (P426)
- (15) 赤穂市教育委員会「発掘された赤穂城下町」 赤穂大石神社線街路整備事業に伴う赤穂城下町発掘調査報告書1 2005年3月 (P431)
- (16) 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター「福井城跡」 北陸新幹線福井駅建設事業に伴う発掘調査2009年3月 (P431)
- (17) 市報松江9号 (P445)
(2006年7月15日から7月21日かけて降り続いた雨により宍道湖の最高水位が1.96mに上昇。旧市街地を中心にして床上・床下浸水合わせて1,423件の住家被災をもたらした。)
- (18) 大阪城天守閣館長 松尾信裕氏の御教示による。(P446)

- (19) 松江城下町遺跡（南山町 80-11 外）をはじめ多数の遺跡で道路側溝にあたる素振りの大溝が確認されている。
城山北公園線都市計画道路事業に伴う松江城下町遺跡（南山町 80-11 外）第3調査区発掘調査概報
平成 22(2010) 年 7 月 (P447)
- (20) 註4と同じ (p447)

参考文献

- 鳥取県教育文化財団「米子城跡21遺跡」3.3.7号メモ駅境線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
1998年3月
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター「福井城跡」JR北陸線外2線連続立体交差事業および高架軌道4号線街路工事に伴う調査 2004年3月
- 津山市教育委員会「史跡津山城跡」保存整備事業報告書Ⅰ 2007年3月
- 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター「徳島城下町遺跡中徳島一丁目地点 徳島県立城東高等学校校舎改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 2004年3月
- 織豊期城郭研究会「織豊期城郭における礎石建物・位置・規模・用途」織豊期城郭研究会第8回研究集会資料
2000年9月
- 佐賀県立名護屋城博物館「前田利家陣跡」特別史跡・名護屋城跡並びに陣跡 2008年3月
- 財團法人山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター「萩城跡（外堀地区）Ⅱ」2004年3月
- 岡山市教育委員会「岡山城三之丸外曲輪跡・旧岡山藩藩学跡」岡山市立岡山中央中学校校舎改築に伴う発掘調査
書 2008年3月
- 島根県川本町教育委員会「丸山城跡」石見・小笠原氏城郭 1997年3月
- 大手前通りの歴史を調べる会「大手前通りの歴史を調べる会」調査結果報告書 2004年10月
- 山崎信二「近世瓦の研究」奈良文化財研究所学報第78冊 2008年11月
- 関西近世考古学研究会「関西近世考古学研究Ⅲ」1992年12月
- 文化庁文化財部記念物課「発掘調査のてびき」2010年3月
- 江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究事典」柏書房 2001年4月

表 28 南屋敷第4遺構面 陶磁器・土師器観察表

遺物番号	種別	出土地点 区・遺物名	器種	器形	法量(cm)			生産地	九内 編年	備考		
					古器	武器	高さ					
2191	陶器	D-1 SD01(丸入)	中瓶	-	-	-	-	紀前	Ⅲ	白十が施された陶瓶。口絞外壁に圓線。		
2192	陶器	D-1 SD01(中瓶)	中瓶	-	10.8	-	-	紀前	Ⅰ-2	口縁は上方に向いて傾いていて、延びて縁にいたる。		
2193	陶器	D-1 SD01	中瓶	丸形	10.8	-	-	紀前	Ⅰ-2	口縁部は極く外側へ突出する無脚。		
2194	陶器	D-1 SD01・中瓶	中瓶	半圓形	-	1.8	-	紀前	Ⅰ-2	高台は無脚。		
2195	陶器	D-1 SD01	中瓶	-	-	4.3	-	紀前	Ⅰ-2	高台は無脚。		
2196	陶器	D-1 SD01	小瓶	丸形	12.4	5.1	3.1	紀前	Ⅰ-2	肥前上、高台は濃褐色、瓶底に下口文。		
2197	陶器	D-1 SD01	小瓶	丸形	12.8	5.0	3.6	紀前	Ⅰ-2	高台は無脚、口縁部に軌跡による圓窓。		
2198	陶器	D-1 SD01	小瓶	扇形	13.8	5.2	3.7	紀前	Ⅰ-2	肥前上、高台は無脚。		
2199	陶器	D-1 SD01	小瓶	斜瓶形	12.0	4.2	3.9	紀前	Ⅰ-2	西行する瓶口の直角、高台は濃褐色。		
2200	陶器	D-1 SD01	小瓶	束形	15.2	-	-	紀前	Ⅰ-2	輪廓浮凸付、延び外壁無脚。		
2201	陶器	D-1 SD01	小瓶	扁形	13.4	4.8	-	紀前	Ⅰ-2	肥前上、高台は無脚。		
2202	陶器	D-2 SD01	大瓶	-	-	12.0	-	紀前	Ⅰ-2	肥前上、高台は無脚。		
2203	陶器	D-1 SD01	中瓶	折腰形	-	31.2	-	紀前	Ⅳ	口縁部の小片。		
2204	陶器	D-1 SD01	中瓶	腰連形	-	18.0	-	紀前	Ⅱ	口縁部の小片。		
2205	陶器	D-3 SD01	腰連	口縫部無脚	-	30.0	-	紀前	-	腰連部に近似Ⅰ期C。		
2206	陶器	D-3 SD01	腰連	山腹外筒二段	29.0	10.6	10.5	紀前	-	腰連部に近似Ⅰ期C。		
2207	陶器	D-1 SD01	腰連	山腹外筒二段	27.8	-	-	紀前	-	腰連部に近似Ⅰ期C。		
2208	陶器	D-2 SD01	腰連	白綿外筒四段	30.0	12.0	-	不明	-	腰連部は無脚で結合できなかったため、一体として腰連。		
2209	陶器	D-2 SD01	水桶	寸胴口鋸工縫	20.5	26.3	19.0	紀前	Ⅰ	口縁部に斜面による余裕が表現に悩まされる。		
2210	陶器	D-2 SD01	水桶	片口	16.5	-	-	紀前	Ⅰ	外側にノギによる余裕が表現に悩まされる。		
2211	陶器	D-1 SD01	蓋	-	9.6	4.3	-	紀前	-	底部無脚。切り離しは回転無切り。		
2212	陶器	D-1 SD01	小瓶	丸形	8.2	3.6	3.4	紀前	Ⅳ-2	志野小瓶。		
2213	陶器	D-1 SD01	中瓶	卷付直腹形	14.4	8.4	3.5	中国	-	底に内側した點をもつ。小野分類兼付直腹、純製。		
2214	陶器	D-1 SD01	中瓶	鉢形	23.8	11.8	4.1	中国	-	漆黒無口、漆面、底部に粗い小粒付。		
2215	土師器	D-1 SD01	瓶	山形系	8.1	-	2.0	土師系	-	底部無脚。切り離しは回転無切り。		
2216	土師器	D-1 SD01	瓶	山形系	8.8	-	2.3	土師系	-	志野小瓶。		
2217	土師器	D-1 SD01	瓶	山形系	9.2	2.0	2.4	土師系	-	底に内側した點をもつ。小野分類兼付直腹、純製。		
2218	土師器	D-1 SD01	瓶	山形系	10.2	3.3	2.0	土師系	-	漆黒無口、漆面、底部に粗い小粒付。		
2219	土師器	D-1 SD01	瓶	山形系	11.5	5.0	2.7	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2220	土師器	D-2 SD01	直(中)	山形系	11.5	4.8	2.8	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2221	土師器	D-1 SD01	直(中)	山形系	11.7	4.6	2.4	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2222	土師器	D-1 SD01	直(中)	山形系	11.6	4.7	2.5	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2223	土師器	D-1 SD01	直(中)	山形系	11.3	4.6	2.7	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2224	土師器	D-1 SD01	直(中)	山形系	12.0	5.7	2.8	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2225	土師器	D-1 SD01	直(中)	山形系	11.4	4.0	2.7	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2226	土師器	D-1 SD01	直(中)	山形系	11.8	5.3	2.7	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2227	土師器	D-1 SD01	直(大)	山形系	11.4	8.3	2.3	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2228	土師器	D-1 SD01	直(大)	山形系	11.2	8.5	2.7	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2229	土師器	D-1 SD01	直(大)	山形系	11.7	7.6	2.6	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2230	土師器	D-1 SD01	直(大)	山形系	15.8	9.6	3.0	土師系	-	漆黒無口、漆面。		
2231	土師器	D-2 SD01	直(大)	直筒系	15.8	10.8	2.6	土師系	-	底部は無脚無切り、無性底。		
2232	土師器	D-1 SD01	直(大)	直筒系	16.8	9.6	2.8	土師系	-	内外面にスス付。		
2233	土師器	D-1 SD01	直(大)	直筒系	15.8	9.4	3.1	土師系	-	漆黒無口、スス付。		
2234	土師器	D-1 SD01	直(大)	直筒系	12.8	5.2	2.6	土師系	-	口縁内側に突出、油渦底。		
2235	土師器	D-1 SD01	直(大)	直筒系	12.3	4.5	2.4	土師系	-	内面底部に突起。		
2236	土師器	D-1 SD01	直(小)	直筒系	19.8	6.1	2.3	土師系	-	逐個に油渦底切り、油渦底。		
2237	土師器	D-2 SD01	直(小)	直筒系	19.4	5.1	2.6	土師系	-	逐個に油渦底切り、油渦底。		
2238	土師器	D-2 SD01	直(小)	直筒系	11.3	7.4	2.3	土師系	-	底部は無脚無切り、内面にスス付。		
2239	土師器	D-1 SD01	直(小)	直筒系	12.5	7.6	2.1	土師系	-	底部は無脚無切り、無性底。		
2240	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	27.8	-	-	紀前	-	余呂縫腰連世Ⅰ期C。		
2241	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	13.2	-	紀前	-	SD01出-2207と接合。		
2242	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	内面の内側に内側合底、底部外側に直目底。		
2243	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	漆黒無口、漆面。		
2244	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2245	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2246	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2247	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2248	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2249	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2250	土師器	C-2 SD03	腰連	口縫部無脚	-	-	-	中圧	-	前腰底。		
2251	土師器	A-1 SD04	小瓶	なぶり口	11.4	4.3	3.0	紀前	Ⅰ-2	腰連上、高台は遮蔽。		
2252	土師器	C-2 SD02	小瓶	丸形	12.5	7.4	2.3	紀前	Ⅰ-2	腰連上、高台は遮蔽。		
2253	土師器	D-1 SD01	大瓶	直筒系	16.8	9.6	2.8	土師系	-	内外面にスス付。		
2254	土師器	D-1 SD01	大瓶	直筒系	15.8	9.4	3.1	土師系	-	漆黒無口、スス付。		
2255	土師器	D-1 SD01	大瓶	直筒系	12.8	5.2	2.6	土師系	-	口縁内側に突出、油渦底。		
2256	土師器	D-1 SD01	大瓶	直筒系	12.3	4.5	2.4	土師系	-	内面底部に突起。		
2257	土師器	D-1 SD01	大瓶	直筒系	19.8	6.1	2.3	土師系	-	逐個に油渦底切り、油渦底。		
2258	土師器	D-2 SD01	大瓶	直筒系	19.4	5.1	2.6	土師系	-	逐個に油渦底切り、油渦底。		
2259	土師器	D-2 SD01	大瓶	直筒系	11.3	7.4	2.3	土師系	-	底部は無脚無切り、内面にスス付。		
2260	土師器	D-2 SD01	大瓶	直筒系	11.7	4.0	1.8	土師系	-	底部は無脚無切り、内面にスス付。		
2261	土師器	C-1 SK03	直(中)	直筒系	11.7	-	-	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2262	土師器	C-1 SK03	直(中)	直筒系	13.7	-	-	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2263	土師器	C-4 SK04	直(中)	直筒系	11.8	-	-	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2264	土師器	C-3 SK04	直(中)	直筒系	12.4	3.4	2.7	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2265	土師器	C-3 SK04	直(中)	直筒系	12.5	3.7	2.8	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2266	土師器	C-3 SK04	直(小)	直筒系	9.5	-	-	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2267	土師器	C-3 SK05	直(小)	直筒系	10.0	3.6	2.3	土師系	-	内面見込みにスス付。		
2268	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	12.1	6.0	6.8	土師系	-	黒頭底。		
2269	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	11.2	-	-	土師系	-	2322と重複して山上、油渦底。		
2270	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	11.3	3.8	2.5	土師系	-	2323と重複して山上、油渦底。		
2271	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	11.3	4.7	3.2	土師系	I-2	底部の直筒系、軌跡による文様。		
2272	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	11.4	4.2	3.1	土師系	I-2	前腰底。		
2273	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	11.5	3.4	3.5	土師系	I-2	前腰底。		
2274	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	12.8	-	-	土師系	I-2	砂目、底部外壁無脚。		
2275	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	35.6	-	-	土師系	I-2	松脂質、SK06-2427と重合。		
2276	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	27.3	-	-	土師系	II	内面に2-2腰支筋、外側の追跡無脚、底熱。		
2277	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	7.6	4.2	5.6	紀前	I-2	高台は遮蔽。		
2278	土師器	C-2 SK02	中瓶	杏形	6.6	4.1	5.1	紀前	I-1~2	土師系の可能性あり。		

遺物番号	種類	出土地點		器形	法量(cm)			生産地	九字 編年	備考
		区	遺構名		口径	底径	高さ			
2563	土器部	B-1	西側面区画	直(小)	直径9.4	—	1.9	—	—	—
2564	土器部	B-1	西側面区画	直(中)	直径12.8	6.0	3.0	—	—	—
2565	土器部	B-1	西側面区画	直(中)	直径12.0	6.4	2.0	—	—	直邊底。

表29 南屋敷第4遺構面 金属製品観察表

遺物 番号	種類	出土地點		材質	法量			備考
		区	遺構名		大きさ(cm)	重量(g)		
2306	飾り金具	D-1	SD01	銅	長6.7/幅1.6/厚0.06	4.67	赤目,	
2307	不規	D-1	SD01	銅	長5.8/幅0.4/厚0.09	4.03	財面/U字状を呈する。	
2308	掛金具か	D-1	SD01	銅	長3.9/幅0.6/厚0.1	2.50	通常に吊り下げられ。	
2320	錢貨	C-3	SD01	銅板	直2.4/厚1.0mm	2.47	元豊通宝	
2404	錢貨	A-4	幕状区画	銅板	直2.4/厚1.0mm	2.06	聖元通宝	
2454	不明	B-2	方形区画	銅	長13.7/幅2.0/厚0.2	19.64	円金か。	

表30 南屋敷第4遺構面 石製品遺物観察表

遺物 番号	品名	出土地點		種類	材質	法量			備考
		区	遺構名			大きさ(cm)	重量(g)		
2419	鋸割具	H-2	SD03 SK03	川原石	分析未	長6.0/幅4.6/厚1.8	48.06	両面に墨書き、正神吉丁条、九字の御題など。	

表31 南屋敷第4遺構面 墨書き木製品観察表

遺物 番号	品名	出土地點		被み	法量(cm)			本数	備考
		区	遺構名		長さ	幅	厚さ		
2259	木柵	D区	SD01	×平手垂門?	—	—	—	一枚目	上部に切込込み。上端、下端は平らにカットされ、片面は墨書き不明。
2337	木柵	C-4	SK02	○○○ ○○○	—	—	—	一枚目	上部に切込込み。下端は尖らせる。両面削り落とし。
2395	板切	C-2	横状区画	・いきすきすき/ 木口・○○	15.0	3.3	0.2	一枚目	下部に切込込みは二次加工の可能性あり。片面は墨書き不明。
2396	木柵	C-2	横状区画	あき○○○○	20.2	2.6	0.8	一枚目	上部に切込込み。下端は尖らせる。片面は墨書き不明。
2397	木柵	C-2	横状区画	○○○ひきなん・○○○	15.5	2.3	0.6	一枚目	上部に切込込み。下端はやや尖らせる。片面は墨書き不明。
2398	木柵	C-3	幕状区画	さんふり○○・○や	14.0	2.3	0.4	一枚目	上部に切込込み。下部は「次切」とにより窄め。
2540	木柵	B-3	方形区画	七尺五寸○○・○や	10.0	1.9	0.7	一枚目	上部に切込込み。下部は「次切」とにより窄め。
2544	板切	D-3	方形区画	○○○・○○○	12.5	3.9	0.3	一枚目	一枚材。下部欠損。片面墨書き不明。
2545	板	B-3	方形区画	—	41.3	4.9	0.6	一枚目	大帯板。片面墨書き不明。
2546	木柵か	B-3	方形区画	・追兵幕・○○	14.3	2.2	0.2	一枚目	上部欠損。下端は尖らせる。片面は墨書き不明。
2547	板切	B-2	方形区画	・方尾石・天蓋	7.5	2.8	0.2	一枚目	上部欠損。
2548	木柵	A-2	方形区画	—	19.3	2.8	0.5	一枚目	細縫は不明だが形状から木柵とした。
2549	表	B-2	方形区画	・等	13.2	4.3	0.4	一枚目	—
2550	表	B-2	方形区画	・うらか	—	—	—	一枚目	—
2551	板切	A-3	方形区画	・野作伴/二ノ二箇 ・Cノ二箇/各下路/Cノ二箇/三ノ二箇/藝兵衛/直八/C ・野/野作伴/二ノ二箇 ・Cノ二箇/各上路/以表筋/三ノ二箇/艺兵/定八/ね	15.2	4.3	0.4	一枚目	—

表32 南屋敷第4遺構面 木製品遺物観察表

遺物 番号	種類	出土場所	長さ(cm)			本塙り	備考
			高さ (cm)	幅 (cm)	その他		
2240	漆器	D-1 SD01	高さ 12.2	幅 4.1	横み深5.6	内・外・墨、表面に朱絵模様	
2241	漆器	D-1 SD01	高さ 11.4	幅 4.4	横み深5.0	内・外・墨、表面に朱絵模様(紅葉・ススキ)	
2242	漆器	D-1 SD01	高さ 11.5	幅 3.9	横み深5.2	内・外・墨、無	
2243	漆器	D-1 SD01	高さ 12.1	幅 3.8	横み深5.8	内・外・墨、表面に「着色模様」、横み内に「X」の溝	
2244	漆器	D-1 SD01	高さ 10.6	幅 3.2	横み深6.6	内・外・墨、表面に「着色模様」、横み内に「X」の溝	
2245	漆器	D-1 SD01	高さ 10.7	幅 —	—	内・外・墨、表面に朱絵模様、横み内に溝	
2246	漆器	D-1 SD01	高さ 12.8	幅 9.7	高凸縫0.7	内・外・墨、高凸内に「X」の溝	
2247	漆器	D-1 SD01	高さ 12.3	幅 9.2	高凸縫0.7	内・外・墨、高凸内に「X」の溝	
2248	漆器	D-1 SD01	高さ 12.3	幅 10.8	高凸縫0.7	内・外・墨、外側に「二重縫」、高凸内に溝	
2249	漆器	D-2 SD01	高さ 12.6	幅 9.6	高凸縫0.7	内・外・墨、外側に「二重縫」、高凸内に溝	
2250	漆器	D-1 SD01	高さ 12.5	幅 9.6	高凸縫0.7	内・外・墨、外側に「二重縫」、高凸内に溝	
2251	漆器	D-1 SD01	高さ 13.1	幅 5.6	横み深6.4	内・外・墨、高凸内に「十」の溝	
2252	漆器	D-1 SD01	高さ 12.2	幅 5.5	横み深6.2	内・外・墨、外側に「着色模様」、表面に「X」の溝	
2253	漆器	D-1 SD01	高さ 13.4	幅 5.5	横み深6.7	内・外・墨、表面に朱絵模様	
2254	漆器	D-2 SD01	高さ 12.7	幅 —	—	内・外・墨、医刀を象形して彫りに記入	
2255	漆器	D-3 SD01	高さ 13.4	幅 6.4	横み深6.6	内・外・墨、邊反状の口縁	
2256	漆器	D-1 SD01(入人)	高さ 10.8	幅 —	—	内・外・墨	
2257	漆器	D-1 SD01(入人)	高さ 12.6	幅 5.1	高凸縫0.3	内・外・墨	
2258	漆器	D-1 SD01	高さ 12.6	幅 —	—	内・外・墨	
2260	漆	D-1 SD01	杯 8.2	幅 2.6	厚さ1.3	白木	
2261	漆	D-1 SD01	杯 3.4	幅 1.3	厚さ1.2	白木	
2262	漆	D-1 SD01	杯 5.0	幅 1.2	厚さ1.0	白木	
2263	人形	D-1 SD01	高さ 12.8	幅 4.1	幅 1.9	立人形 塗装部に墨が付着した例が付す	
2264	舟形	D-2 SD01	高さ 18.3	幅 2.8	幅 0.9	板目 板中央に楕円大穴	
2265	丸刀	D-1 SD01	刃部 24.5	幅 3.1	幅 0.9	研磨刀を模した木製品、茎も削り出している	
2266	若・板	D-1 SD01	刃部 27.7	幅 7.5	幅 1.1	研磨刀を模した木製品	
2267	下駄	D-1 SD01	角型直頭下駄 20.8	幅 8.4	幅 2.4	木刀 直頭0.5cm、筋の盛り高さ刻痕、指の痕跡あり、2266とセッタ隣接か	
2268	下駄	D-1 SD01	角型直頭下駄 20.8	幅 8.4	幅 2.4	木刀 直頭0.6cm、筋の盛り高さ刻痕、指の痕跡あり、2267とセッタ隣接か	
2269	下駄	D-3 SD01	角型直頭下駄 20.4	幅 9.4	幅 3.3	木刀 直頭1.3cm、筋の盛り高さ刻痕、指の痕跡あり	
2270	下駄	D-4 SD01	片側直頭下駄 20.1	幅 9.8	幅 4.5	木刀 直頭0.9cm、骨の彫り跡刻痕、指の痕跡あり	
2271	猪肉	D-1 SD01	削成 45.1	幅 2.0	幅 1.3	板目	
2272	猪肉	D-1 SD01	削成 47.5	幅 1.8	幅 1.1	板目 猪肉近くに目印がある	
2274	杓子	D-1 SD01	削成・柄部 42.6	幅 6.4	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2275	杓子	D-2 SD01	削成・柄部 42.5	幅 7.9	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2276	勺子	D-2 SD01	削成・柄部 42.5	幅 7.9	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2277	勺子	D-2 SD01	削成・柄部 43.2	幅 7.9	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2278	猪肉	D-1 SD01	削成 42.6	幅 6.3	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2279	猪肉	D-1 SD01	削成 41.9	幅 6.8	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2280	猪肉	D-1 SD01	削成 41.9	幅 7.1	幅 0.9	板目 杓身・柄部分に墨が付す	
2281	猪肉	D-1 SD01	削成 38.7	幅 5.4	幅 1.0	板目	
2282	猪肉	D-1 SD01	削成 21.1	幅 7.1	幅 1.1	板目 内面に墨の付着物	
2283	猪肉	D-1 SD01	削成 11.2	幅 4.2	幅 0.9	板目 内面に墨の付着物、上面両角に斜切り加工	
2284	猪肉	D-1 SD01	削成・横板 30.4	幅 11.5	幅 1.2	板目 猪肉に目印あり、表面にA	
2285	猪肉	D-2 SD01	底板・横板 21.5	幅 4.6	幅 1.2	板目 猪肉に目印あり、表面にA	
2286	曲物	D-1 SD01	削成・底板 20.5	幅 2.7	幅 1.3	板目 杓身	
2287	曲物	D-1 SD01	削成 20.7	幅 5.4	幅 1.0	板目 杓身	
2288	猪肉	D-1 SD01	底板 26.1	幅 10.1	幅 6.6	板目 猪肉に目印あり、底板に墨の付着物	
2289	猪肉	D-1 SD01	底板 29.4	幅 15.0	幅 6.0	板目 猪肉に目印あり、底板に墨の付着物	
2290	茶	D-1 SD01	高さ 24.4	幅 —	幅 0.6	白木	
2291	茶	D-2 SD01	高さ 26.0	幅 —	幅 0.6	白木	
2292	茶	D-2 SD01	高さ 25.6	幅 —	幅 0.5	白木	
2293	茶	D-1 SD01	高さ 29.3	幅 —	幅 0.6	白木	
2294	茶	D-2 SD01	高さ 30.0	幅 —	幅 0.6	白木	
2295	茶	D-1 SD01	高さ 31.3	幅 —	幅 0.8	白木	
2296	箸	D-1 SD01	高さ 10.0	幅 —	幅 0.7	箸が詰まっている、歯根が骨の一部となっていた	
2297	箸	D-1 SD01	高さ 25.9	幅 7.9	幅 0.4	板目 箸	
2298	匙	D-1 SD01	切迹 24.2	幅 4.1	幅 0.4	板目 箸	
2299	匙	D-1 SD01	切迹 17.1	幅 1.6	幅 0.4	研磨 箸	
2300	匙	D-1 SD01	切迹 13.5	幅 —	幅 0.54	木本 木の枝を削りして作られたもの、物を吊り下げる物	
2301	匙	D-1 SD01	底板 11.0	幅 3.2	幅 0.78	研磨 箸	
2302	匙	D-1 SD01	底板 8.8	幅 —	幅 0.57	板目 箸	
2303	羽扇柄	D-1 SD01	高さ 13.9	幅 2.1	幅 0.6	板目 羽扇柄	
2304	茶	D-2 SD01	高さ 6.1	幅 6.4	幅 0.6	板目 烟草が詰まっている、底板に墨の付着物	
2305	脚踏	D-1 SD01	高さ 14.3	幅 8.5	幅 1.1	板目 底板	
2317	漆筒	C-3 SD03	底板 13.0	幅 13.3	幅 6.8	高台地	
2318	曲物	C-3 SD03	底板 29.6	幅 5.9	幅 0.9	研磨 壁に目印あり、表面に墨の付着物	
2319	漆筒	C-3 SD03	底板 29.6	幅 5.9	幅 0.9	研磨 壁に目印あり、表面に墨の付着物	
2322	漆筒	C-2-3 SD04	底板 13.1	幅 5.4	幅 0.9	研磨 壁に目印あり、表面に墨の付着物	
2323	漆筒	C-2-3 SD04	底板 25.8	幅 4.7	幅 0.97	板目 烟草が詰まっている	
2324	漆筒	C-2 SD05	底板 30.0	幅 —	幅 0.68	高台地内に「」の溝	
2333	漆筒	C-4 SK02	切迹 25.6	幅 2.0	幅 0.3	板目 板目	
2334	匙	C-3 SK02	切迹 23.0	幅 3.3	幅 0.7	板目 箸	
2335	匙	C-4 SK02	切迹 19.2	幅 2.8	幅 0.7	板目 箸	
2336	漆筒	C-3 SK02	底板 26.8	幅 —	幅 0.55	白木	
2337	茶	C-3 SK02	高さ 24.7	幅 —	幅 0.6	白木	
2338	茶	C-3 SK02	高さ 25.2	幅 —	幅 0.6	白木	
2339	茶	C-3 SK02	高さ 30.0	幅 —	幅 0.6	白木	
2340	研磨	C-3 SK02	高さ 33.2	幅 5.0	幅 1.1	板目 下部に墨に染みたための山積み	
2341	地	C-4 SK02	倒伏 23.0	幅 6.1	幅 0.8	板目 タガ強め	
2342	地	C-4 SK02	倒伏 16.0	幅 6.1	幅 1.0	板目 タガ強め	

遺物観察表(南第4面)

遺物 番号	種類	出土地點		名前 部位	法値(cm)				本取り	備考
		X	遺構名		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	その他		
2343	下駄	C-1	SK02	両脚下駄	14.0	8.5	5.0		平日	前後重しぬね2孔。
2344	拂	C-3	SK02	拂	24.6	6.6		厚1.0	板日	把手付拂。表面に目釘穴、上面に黒色の付着物。
2345	柄	C-1	SK02		6.6			4.2	厚1.0	
2346	柄代か	C-1	SK02	側板・底板	φ8.3			6.2	側板	縦充満あり。側板に側板仕切記入。
2347	冰机	C-1	SK03						平日	側板仕切記入。(二)の丸みヨマク。
2353	蓋	C-1	SK03		20.9	8.1				板状。
2354	箱	C-1	SK03		28.3					木本。
2355	下駄	C-1	SK03	両脚下駄	20.0	10.6	3.3		板日	前後六穴に比べ、後脚穴が大きい。裏面、桙孔有り。
2356	六角	C-1	SK03		13.7	11.2			板日	中央に穿孔。
2357	鉢	C-1	SK03	鉢足か	24.4	3.1			板日	底部に縫合記入。
2358	盆	C-1	SK03	鉢足か	30.0	2.6			板日	月光形。底部に縫合記入。
2359	鉢	C-1	SK03	鉢足か	29.2	4.2			板日	縫合記入。
2360	刷毛	C-1	SK03	刷毛形	11.5	6.0			板日	裏面に黑色の付着物。
2361	籠	C-1	SK03	刷毛形	10.8				板日	上段に角形、下部に斜形。
2362	桶か拂	C-1	SK03	側板	26.0	9.9			板日	縫合六穴に比べ、後脚穴が大きい。体部に穿孔。
2368	瓶	C-3	SK05	側板	20.4			13.0	厚1.1	板日
2369	小瓶	C-2	箱状区画	造形下駄	21.5	11.2	3.6		板日	縫合六穴に比べ、後脚穴が大きい。
2400	卜瓶	C-2	箱状区画	側脚下駄	21.5	9.5	3.5		板日	縫合六穴に比べ、後脚穴が大きい。
2401	曲物	C-1	帯状区画	底板か	9.2				板日	縫合か。裏に把手付痕。
2402	曲物	C-1	帯状区画	底板か	9.2				板日	縫合か。裏に把手付痕。
2403	板付子か	C-2	帯状区画	底板か	20.5				板日	縫合か。
2411	手拂	B-2	SD03 PG	底板か蓋板	35.6	6.9			板日	縫合六穴に比べ、後脚穴が大きい。
2412	手拂	B-2	SD03 PG	底板か蓋板	37.2	19.5			板日	縫合六穴に比べ、後脚穴が大きい。
2417	手拂	B-2	SD03 SK03	底板か	34.2	12.2			板日	縫合六穴に比べ、後脚穴が大きい。
2418	曲物	B-2	SD03-SK03	蓋代	23.6	7.4			板日	縫合。
2421	不明	A-3	SK06		14.6	2.8			板日	2419と入れ替わる。蓋の跡。側板の裏面は無漆不毛。
2425	不明	A-3	SK06		23.1	7.0			板日	裏面に黒毛穴。
2439	蓋	B-3	SK06	切端か	26.5	2.8			板日	縫合。
2451	拂	H-3	SK06		16.2	0.5			板日	
2485	筒器	A-4	方形又四		22.3		2.0			内外・底、内西に赤漆丸文(スキ)。
2486	筒器	B-4	方形又四		25.8		2.5			内外・底。
2487	筒器	B-2	方形又四		12.2		3.8			内・赤・外・黒。外面に赤動物文。縫合内に×の痕記。
2488	筒器	B-3	方形又四		11.9		3.8			内・赤・外・黒。縫合内に×の痕記。2486とセットになるもの。
2489	筒器	B-2	方形又四		14.2		10.3			内外・三・高台内に「十」の痕記。
2490	捺器	B-2	方形又四	縫丸形	13.9		10.2			内・赤・黒。筒内に縫合。
2491	捺器	B-2	方形又四	縫丸形	14.6		9.5			内・赤・外・黒。筒右側に△の痕記。
2492	捺器	B-2	方形又四	縫丸形			9.0			内・赤・外・黒。外側に赤絶文(スキ)。
2493	捺器	H-5	方形又四	縫丸形	13.0		0.5			内・赤・外・黒。底内方に縫合。
2494	捺器	H-2	方形又四	縫丸形	12.4		5.7			内・赤・外・黒。筒内方に縫合。
2495	捺器	H-2	方形又四	縫丸形	12.3		5.8			内・赤・外・黒。筒内方に縫合。
2496	捺器	H-4	方形又四	縫丸形	12.3		5.6			内・赤・外・黒。筒内に△の痕記。2488とセット。
2497	捺器	H-3	方形又四	縫丸形			6.5			内外・三・捺器の口縫。2456とセット。
2498	筒器	A-3	方形又四	杯			1.6			
2499	下駄	A-2	方形又四	漆刷下駄	19.6	8.7	5.5			前の糸し込み柄付は、後漏の糸し込み柄付。
2500	持か	A-3	方形又四		8.8	8.8	3.5			骨量は44.5g。
2501	梅	A-3	方形又四		7.3	4.7				筒。
2502	梅	A-3	方形又四		8.4	4.5				上部破損。
2503	梅	A-2	方形又四		8.0	4.5				白木。
2504	梅	A-4	方形又四		8.1	4.8				筒。
2505	梅	A-3	方形又四		5.6	3.0				白木。
2506	人形	A-4	方形又四		10.4					人形は斜めにカット(二次削り)。
2507	人形	A-3	方形又四		9.0					
2508	絲紋	B-2	方形又四		13.8	0.7				筒。
2509	絲紋	B-2	方形又四		12.8	0.5				筒。
2510	絲紋	B-2	方形又四		15.5	0.8				筒。
2511	絲紋	A-3	方形又四		16.0	0.8				筒。
2512	絲紋	A-1	方形又四		16.0	0.8				筒。
2513	管	B-2	方形又四		27.5					
2514	管	B-4	方形又四		27.0					
2515	管	B-2	方形又四		23.8					
2516	管	A-2	方形又四		24.4					監査部に加え、先端3点削めにカット。蓋ではない可能性あり。
2517	管	A-2	方形又四		27.0					
2518	管	A-1	方形又四		26.7					
2519	管	H-2	方形又四		29.5					
2520	筒	A-3	方形又四	明透か	27.5					
2521	漆	B-3	方形又四	切端か	13.9	3.4				下部は斜めにカット(二次削り)。
2522	漆	A-3	方形又四	切端か	18.5	2.5				
2523	漆	D-3	方形又四	側板	24.9	13.5				筒。
2524	漆	A-1	方形又四	側板	16.0	6.0				筒。
2525	漆	A-1	方形又四	側板	17.5	3.9				筒。
2526	漆	B-2	方形又四	底版か蓋板	36.9	18.5				筒。
2527	曲物	A-3	方形又四	底版か蓋板	φ11.3					側板の一部が生存。黒色の小・黒物。筒脚か。
2528	曲物	A-3	方形又四	底板か	φ8.3					筒。
2529	曲物	A-3	方形又四	柄板か	φ8.7					筒日。筒に二・丸孔。黒色の付着物。
2530	曲物	A-3	方形又四	柄板か	φ10.4					筒日。筒丸み。
2531	曲物	A-3	方形又四	底版か蓋板	φ10.6					筒日。筒丸み。
2532	筒	B-1	方形又四		4.5					
2533	筒	A-3	方形又四		4.9					
2534	筒	H-3	方形又四		6.0					
2535	筒	A-1	方形又四		8.0					
2536	筒	A-1	方形又四		9.2					
2537	小筒	B-3	方形又四	側板か	5.6	3.2				筒日。筒に二・丸孔。
2538	側板蓋か	H-2	方形又四	底板か	10.1	8.8				筒日。筒丸み。

遺物番号	種類	出土地点		名称 部位	法量(cm)				本取り	備考
		文	表情面		長さ (1面)	幅	高さ (脚高)	その他の		
2539	盾形刀	A-2	方形区画		35.2	2.6			6.8	刃状の加工あり。
2540	不明	B-3	方形区画	部材	34.5	2.1			1.4	円錐に凹痕と目打ち孔。
2541	不明	B-2	方形区画	部材	33.2	1.8			1.2	円錐に凹痕、中央に穿孔。
2542	不明	B-2	方形区画	部材	27.8	3.2			3.5	底面、角柱状の底材の上面に洞穴あり。
2566	劍	B-1	梯形区画	切底か	31.8	2.9			0.4	底面、先端加工。
2567	小刀	B-1	梯形区画	部材	29.5	1.6			1.2	円錐に凹痕と目打ち孔。

表33 南屋敷第4遺構面 瓦觀察表

遺物番号	種類	出土地点		法量(cm)					備考
		区	通構名						
2309	削平瓦	D-1	SD01	幅18.5/反凸面5.1/平底厚2.0					下向、裏文、周縁間にスタンプ。複数の丸唐草の巻き込み無い。
2310	削丸瓦	D-1	SD01	外径16.6/内径10.4/瓦脚部厚2.0					連続三巴文、右巻、底部は長い。
2311	丸瓦	D-1	SD01	長13.9/幅8.3/厚2.3					シビキ丸。
2312	丸瓦	D-1	SD01	長20.7/幅15.3/厚1.8/土縫長3.7/卡鉤軸8.6					シビキ丸。
2369	丸瓦	C-3	SF05	長16.4/幅14.0/厚1.9	下縫長3.0/工縫軸5.8				凸出に円形のスタンプ。
2405	不明	C-1	梯状区画	長9.2/幅4.2/厚1.2					複数丸瓦の一郎印。
2406	削平瓦	C-1	梯状区画	幅5.5/反凸面4.3/平底厚2.0					唐草ののみ残存、唐草光澤の巻き込み無い。
2407	削丸瓦	C-2	梯状区画	長16.4/内径11.0/瓦脚部厚2.1					連続三巴文、右巻、底付焼文。
2408	丸瓦	C-2	梯状区画	長12.0/幅6.5/厚2.6					シビキ丸。
2409	丸瓦	C-2	梯状区画	長11.9/幅6.8/厚2.2					シビキ丸。
2410	丸瓦	C-2	梯状区画	長18.2/幅11.0/厚2.0					シビキ丸。
2426	丸瓦	A-3	SX06	長19.0/幅9.2/厚2.7/上縫長3.3					シビキ丸。
2552	削丸瓦	A-3	方形区画	外径15.6/内径10.4/反凸面厚2.1					連続三巴文、底付焼文。
2553	丸瓦	-	方形区画	長17.9/幅15.3/厚1.7					シビキ丸。
2554	丸瓦	A-3	方形区画	長27.0/幅16.4/厚2.0/土縫軸7.6/平縫長3.4					シビキ丸。凹面は有口、ほぼ完形。
2555	削丸瓦	-	方形区画	長14.2/幅15.5/厚2.1					シビキ丸。底形。
2568	平瓦	A-1	板帶形区画	長29.1/幅25.5/板縫軸23.0/厚1.9					1242円形、重量2.0kg、長さ:幅=1:0.876

第7章 第4遺構面以前の遺構

ここでは盛土が施される前、または盛土が施されているもののまだ屋敷が建設される前のごく早い時期につくられ、武家屋敷として機能する段階では既に廃絶されていた遺構や遺物を取り扱う。ただし、本来はここで記載すべき時期の遺構であるが、切り合い関係が認められなかつたため第4遺構面で取り扱ってしまった遺構が存在する可能性もある。これらの遺構は築城や城下の造成に携わった人々の生活の痕跡と考えている。

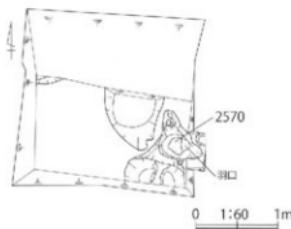
第1節 鍛冶遺構（第419図）

鍛冶遺構

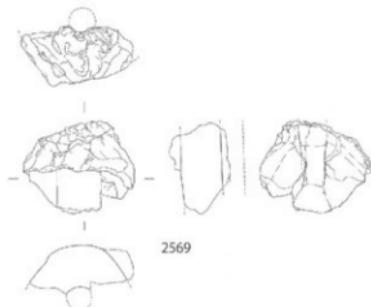
本調査段階から、北屋敷調査区西側の第4遺構面より下層で、土層観察用の鞋で炭層が確認されていたが、第4遺構面は地下保存することが決定していたため、炭層の性格を把握することができなかった。しかし、追加調査でこの炭層の範囲を確定、記録し、柱基礎で第4遺構面が失われる部分については、G1～G5のトレンチを設定し、炭層の下の遺構の有無を確認することになった。追加調査の途中、G4トレンチ内において第4遺構面の下と自然層直上という2面の炭層が存在することが判明した。そこで新たにG6～G10のトレンチを設定し、その範囲を確認する調査を行った。



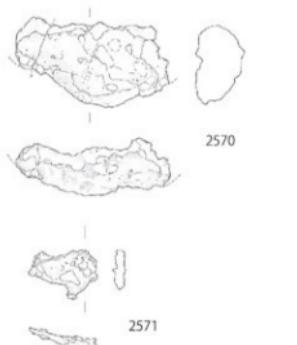
G1 炉跡検出状況（西から）



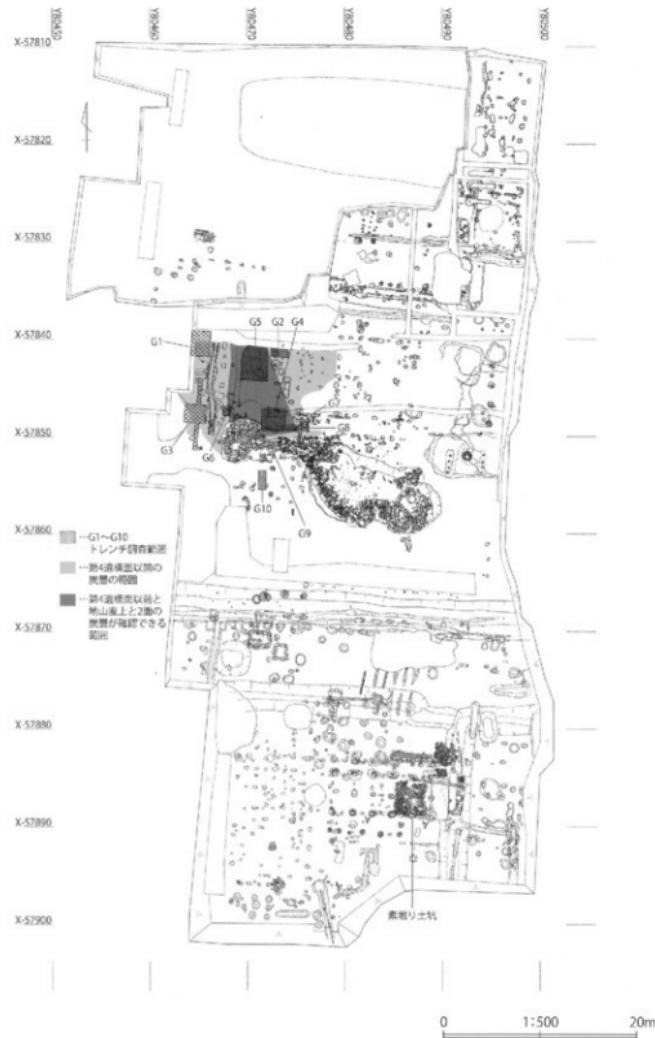
第417図 4面以前炭層調査 G1



第418図 G1出土遺物



0 1:4 10 cm



第419図 第4遺構面以前の遺構位置図
※第4遺構面の遺構図に位置を表記

その結果、2面の炭層がある一定範囲の広がりをもつことが判明し、第4遺構面以前の炭層の標高は約1.4m、自然層直上の炭層の標高は約0.9mを測った。

この炭層中、または炭層を除去した後の整地面から、羽口や滓が出土した。採取した炭の一部を水洗にかけたところ、鍛造薄片と粒状滓を検出することができた。また、トレンチの一部(G1)では炉跡と思われる遺構も検出している。さらに、詳しくは第8章述べられるが、出土した羽口と滓を科学分析にかけたところ、鉄成分が検出され、これらの鉄成分が鍛錬鍛冶に由来するものとの結果であった。

各トレンチの詳細については、以下のとおりである。

G1(第417図)

G1 調査区北西端に設定したトレンチで、第4遺構面以前の炭層の1面のみを確認した。トレンチ東側で第4遺構面以前の炭層を取り除いたところ、約40×55cm、深さ約15cmの楕円形の土坑を検出した。土坑からは羽口と椀形滓2570が付着する状態で出土しており、鍛冶炉である可能性が高い。羽口は非常にもろくなっており、取り上げ時に形が失われてしまった。この土坑周辺は火を受けて赤黒く変色していた。この土坑の他にもいくつか不定形土坑が検出されたが、性格は不明である。また、ここで検出された炭は非常に細かく、むしろ灰に近いものであった。

G1出土遺物(第418図)

羽口・滓 2569は断面円形の羽口である。科学分析にかけたところ、鉄成分が検出された。2570は椀形滓である。2571は羽口先で固化した滓である。

G2(第420図)

G2 調査区中央やや西側に設定したトレンチで、第4遺構面以前の炭層の1面のみを確認した。この炭層内からは滓が多く出土しており、羽口片も少量出土している。また、炭と床面が焼きついたような部分も認められたが、炉跡などの遺構は確認できなかった。



第420図 4面以前炭層調査G5・G2平面図



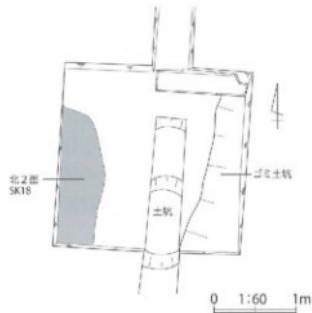
G1・G5・G2検出状況(南東から)



G5内遺物出土状況

G3(第421図)

G3 調査区西側に設定したトレーニチで、第4遺構面以前の炭層の1面のみを確認した。ここでは炭層の堆積がかなり薄くなっている。このトレーニチ内の東端で、第4面より下層、炭層より上層になるゴミ穴と思われる土坑を検出した。出土遺物は箸と木片のみである。トレーニチ内の西端は、第2面に伴う廃棄土坑SK18で切られている。また、地山直上の炭層の存在を確認するため、トレーニチ中央に断ち割りを入れたところ、用途不明の土坑を検出した。この他には炉跡といった遺構は検出されなかった。



第421図 4面以前炭層調査 G3

G4(第422・423図)

G4 調査区中央に設定したトレーニチで、2面の炭層を確認することができた。第4遺構面以前の炭層の堆積は、G3同様にかなり薄くなっている。この面ではトレーニチ中央で平面円形の土坑を検出しているが、羽口や滓は伴わず、丸跡といった遺構も検出されなかった。しかし、自然層直上の炭層からは羽口片、滓が出土した。羽口片には、断面が方形のものと円形のものが2種類見られた。また、羽口片が出土した辺りだけが、周辺の炭とともにやや焼けつい感じであった。その他の範囲では、炭の中に滓があまり認められず、木くずが混じったりしている。さらに、トレーニチ内南側で直径約1cm程度の竹が、床面に貼り付くように出土した。竹の西端は尖り、東端は直角に切断してある。竹の用途は不明である。

G4出土遺物(第424図)

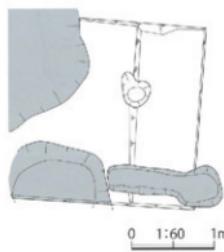
羽口 2572・2573は断面円形の羽口である。2574・2575は断面方形の羽口である。

G5(第420図)

G5 調査区北西側に設定したトレーニチで、第4遺構面以前の炭層を確認した。このトレーニチからは大量の滓と羽口片が出土しており、また、炭の一部を水洗にかけたところ、鍛造剥片と粒状滓が検出できた。炭層を取り除いた床面には、熱を受けたためか灰が貼り付き、固化あるいは羽口が貼り付いた状態で検出した部



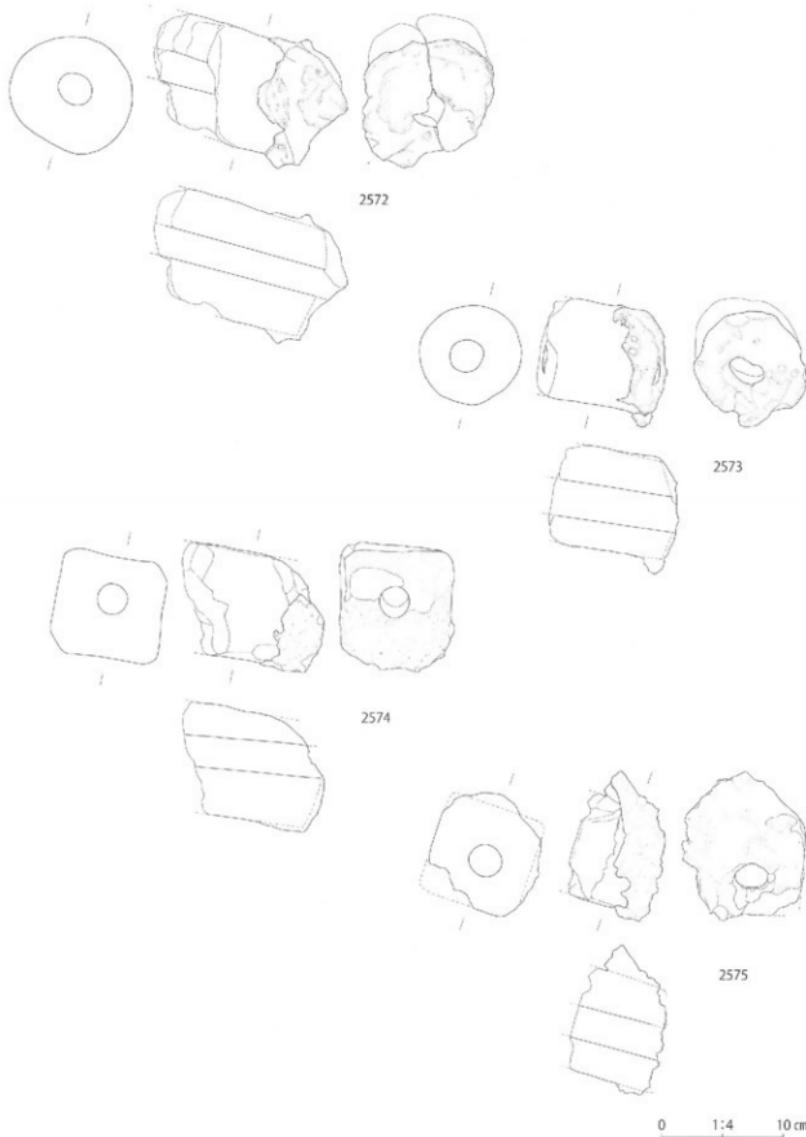
G4 自然層直上遺物出土状況(東から)



第422図 4面以前炭層調査 G4



第423図 自然層直上炭層調査 G4



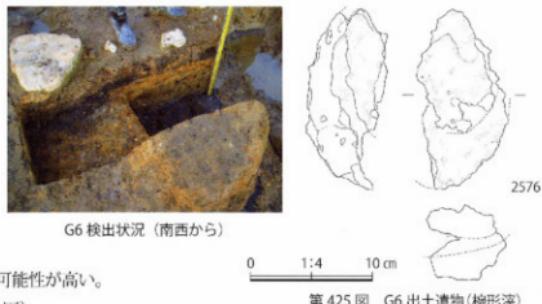
第424図 G4出土遺物

分が見られた。さらに床面には人の足跡のような痕跡が無数に見られた。この痕跡の性格は不明であるが、鉄製剣片などが検出できたことにより、ここで鍛錬鍛冶を行っていた可能性が高い。

G5 出土遺物(第426図)

**羽口
土製品
木製品**

2577は断面方形の羽口である。側面にへラ状のもので線刻が施されている。2578は断面方形に羽口である。2579は用途不明の土製品で、胎土に何らかの毛を混ぜ込まれている。合わせ口にして成形されており、合わせ目に炭が多く固着している。2580は用途不明の木製品で、楕円状の穴が2ヶ所見られる。



第425図 G6出土遺物(楕円形)

G6(第419図)

G6

炭層の範囲の確認のため調査区西側に設定したトレンチで、炭層を2面確認した。トレンチ内西側で炭層の中から楕円形が出土した。さらに下層を断ち割ったところ、自然層直上の炭層はトレンチの東から中央部分で終わっていた。

G6出土遺物(第425図)

楕円形

2576は楕円形であるが、1度炉に流れたものが固まった後で、さらにもう一度流れた状態で固まったものである。科学分析にかけたところ、鉄成分が検出された。

G7(第419図)

G7

炭層の範囲の確認のため調査区中央に設定したトレンチである。第4遺構面以前と自然層直上とともに、2面の炭層が確認できたが、遺構は認められなかった。

G8～G10(第419図)

G8～G10

炭層の範囲の確認のため調査区に中央から南側にかけて設定したトレンチで、第4遺構面以前と自然層直上とともに炭層は確認されなかった。

第4遺構面以 第4遺構面以前出土遺物(第427図)

前出土遺物

炭層の調査時に、第4遺構面の造成土の中から出土したものである。2581は志野向付である。

国産陶器

2582は軟質施釉陶器の破片である。鉢の把手であろうか。2583～2585は中国磁器貿易磁器である。

石製品・金属製品

2586は石製の軸石で黒色を呈する。2587は鉄製品で角の一端を折り曲げるものである。

漆器

物と思われる。2588は漆椀である。外面は黒漆塗り、内面は朱塗りが施されるもので、外

瓦

に赤絵で紅葉の模様が描かれている。2589は軒平瓦で、瓦頭の唐草文の部分のみが残っている。

分が見られた。さらに床面には人の足跡のような痕跡が無数に見られた。この痕跡の性格は不明であるが、鍛造剝片などが検出できたことにより、ここで鍛錬鍛冶を行っていた可能性が高い。

G5 出土遺物(第426図)

- 羽口** 2577は断面方形の羽口である。側面にへラ状のもので線刻が施されている。2578は断面方形に羽口である。2579は用途不明の土製品で、胎土に何らかの毛を混ぜ込まれている。合わせ口にして成形されており、合わせ目に炭が多く固着している。2580は用途不明の木製品で、楕円状の穴が2ヶ所見られる。

G6(第419図)

- G6** 炭層の範囲の確認のため調査区西側に設定したトレンチで、炭層を2面確認した。トレンチ内西側で炭層の中から楕円形が出土した。さらに下層を断ち割ったところ、自然層直上の炭層はトレンチの東から中央部分で終わっていた。

G6 出土遺物(第425図)

- 楕円形** 2576は楕円形であるが、1度炉に流れたものが固まった後で、さらにもう一度流れた状態で固まつたものである。科学分析にかけたところ、鉄成分が検出された。

G7(第419図)

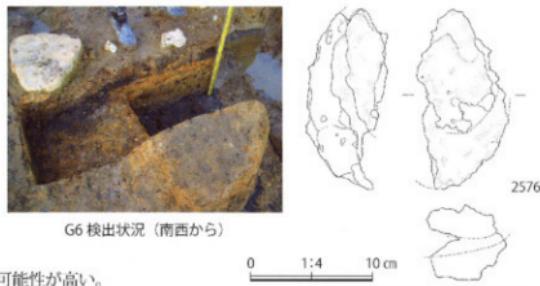
- G7** 炭層の範囲の確認のため調査区中央に設定したトレンチである。第4遺構面以前と自然層直上とともに、2面の炭層が確認できたが、遺構は認められなかった。

G8～G10(第419図)

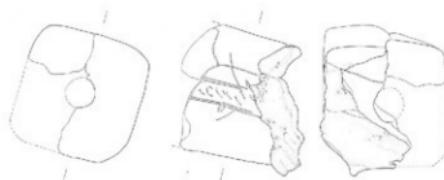
- G8～G10** 炭層の範囲の確認のため調査区に中央から南側にかけて設定したトレンチで、第4遺構面以前と自然層直上とともに炭層は確認されなかった。

第4遺構面以 第4遺構面以前出土遺物(第427図)

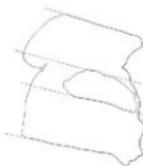
- 前出土遺物** 炭層の調査時に、第4遺構面の造成土の中から出土したものである。2581は志野向付である。2582は軟質施釉陶器の破片である。鉢の把手であろうか。2583～2585は中国磁器貿易磁器である。2583は龍泉窯産の青磁碗である。2584は青花碗である。2585は青花皿である。石製品・金属製品 2586は石製の基石で黒色を呈する。2587は鉄製品で角の一端を折り曲げるものである。刃漆器 物と思われる。2588は漆椀である。外面は黒漆塗り、内面は朱塗りが施されるもので、外面瓦に赤絵で紅葉の模様が描かれている。2589は軒平瓦で、瓦頭の唐草文の部分のみが残っている。



第425図 G6出土遺物(楕円形)



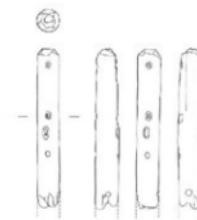
2577



2578



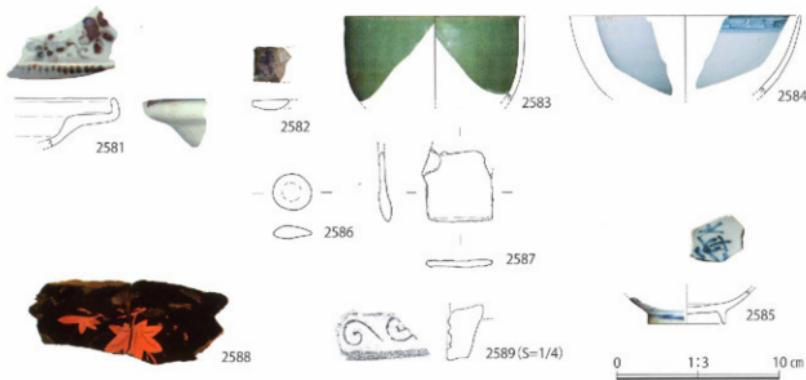
2579



2580

0 1:4 10 cm

第426図 G5出土遺物



第427図 第4遺構面以前出土遺物

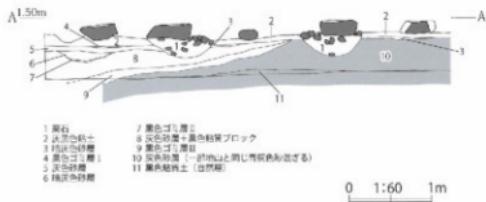
以上のように、第4遺構面以前の炭層についてはG5周辺の炭層の堆積が最も厚く、ここを中心外側に向かって薄くなっている。焼土や鍛造剝片、粒状滓などが出土していることも含めて、G1、G2、G5を中心に鍛錬鍛冶が行われたと考えられる。また、炭層の範囲が調査区全体に広がるものではないことや、使い捨てのよう羽口が多く出土することなどから、長期に渡って操業されたものではないと思われる。

自然層直上の炭層については、G4、G5、G6、G7で確認された。しかし、厚さが約1~2cm程度しかなく、澤の出土量が上部の炭層に比べてはるかに少ない。また、炭層内に木くずも混じることから、この場で鍛冶を行ったとは考えにくい。他の場所から廃棄されたものとも考えられるが、近くで鍛冶を行っていた可能性は考えられる。

これらは松江城築城に関係するものか、屋敷地内で使用する目的で鍛冶場が存在したものと推測する。よって、第4遺構面以下で検出される土坑についても、鍛冶操業といった築城や屋敷の造営に携わった人々の生活の痕跡である可能性が考えられる。

第2節 素掘り土坑

南屋敷第4面の建物跡SB03(第398図)の礎石列を断ち割って下部構造の調査を行っていたところ、建物建設以前に掘られた素掘りの土坑を確認している(第428図5~9層)。工事で影響を受けない礎石については地下保存が決まっていたため、礎石を撤去しての調査は実施していない。規模は東西方向3.0m以上、深さ40cm以上を測る浅い皿状の土坑である。遺物は中国白磁の破片や瓦片、植物遺体が出土しており、ゴミ廃棄土坑状を呈する。検出当初は低湿地における建物の基礎地業の可能性も考えたが、土坑の範囲が建物の一部分だけに留まるものであり、基礎事業とは考え難い。建物を建てる以前に生活していた集団のゴミ廃棄土坑と考えるのが自然である。



第428図 素掘り土坑土層断面図



第429図 素掘り土坑出土遺物

第3節 小結

今回の調査では城下町形成当初の様相を伺い知ることができる貴重な資料を得ることができた。特に鍛冶遺構については、松江城上御殿跡でも見つかっており、ここでの操業年代は不明であるが、「刃物の補修をその業としていたようである。」と報告されている。⁽¹⁾また、岡山城三之外曲輪では、造成当初の遺構からつぼや羽口といった銅の精錬に関係する遺物が出土しており、「三之外曲輪の造成や城内の整備段階にそれに資材を供給する工房などである可能性が考えられる。」という報告がなされている。⁽²⁾このことから、松江でも築城に伴い城のすぐ近くで鍛冶場をつくり、供給していた可能性も考えられ、武家屋敷が建てられるよりも先行して、城下町が築城に関係する資材の供給場となっていたことを示唆するものである。

註

- (1) 松江市教育委員会「史跡松江城上御殿跡発掘調査報告書」1987年
- (2) 岡山市教育委員会「岡山城三之外曲輪跡旧岡山藩藩学跡—岡山市立岡山中央中学校校舎改築に伴う発掘調査—」2008年

表34 第4遺構面以前 陶磁器・土器遺物観察表

遺物番号	遺構名	材質	基部	器形	法量(cm)			生産地	凡て編年	備考
					高さ	底径	縦幅			
2581	第4遺構面造成土中	陶器	縦	壺子				芝野	大原4類型平、向付。	
2582	同	陶器	縦	壺子	11.0			原山古墳	初期、中期夏期偏配。	
2583	同	陶器	横	壺子	11.0			女塚	紀伊風、青銅。	
2594	同	陶器	六深	丸壺	14.2			中国	紀伊風。	
2595	同	陶器	縦	壺子		4.9		中国	紀伊風。	
2596	同	陶器	横	壺子		5.1		中国	紀伊風。	
2597	同	陶器	横	壺子				中国	白底。	

表35 第4遺構面以前 瓦観察表

遺物番号	遺構名	種類	法量(cm)	色調	備考
2599	第4遺構面造成土中	軒下瓦	下弦幅7.0/瓦長幅2.8		焼成瓦。

表36 第4遺構面以前 金属製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
2597	第4遺構面造成土中	工具の方	鉄	長15.0/幅1.5	70.10	

表37 第4遺構面以前 石製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
2596	第4遺構面造成土中	石斧	石	φ2.0/厚0.7	5.67	

表38 第4遺構面以前 木製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	名称	法量		備考				
				部位	大きさ(cm)	縦	横	高さ(表面)	その他	木取り
2570	G5	木舟	舟	長	13.0	1.5		2.0	新材	橋田竹の丸。
2585	第4遺構面造成土中	舟	舟							

表39 第4遺構面以前 鋼冶関連遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
2569	G1	鋸	木	刃長約4.5/刃幅約4.5	224.91	複数枚。
2570	G1	鋸	木	長板に沿って0.5×4.0	296.27	メタル鋸など、船着場丸。
2571	G1	鋸	木	長5.5/幅1.0/厚1.0	17.93	
2572	G4	鋸	木	長6.5/幅1.5/厚0.5/内側2.0	1370.00	鋸材、一部ガラス質になっている。
2573	G1	鋸	木	長10.0/幅2.0/厚0.5/内側3.0/外側2.8	710.00	鋸材等。
2574	G1	鋸	木	長11.0/幅9.0/厚0.5/内側2.0/外側2.5	1010.00	鋸材等。
2575	G4	鋸	木	長7.5/幅1.5/厚0.5/内側2.0/外側2.5	616.59	鋸材等。
2576	G6	鋸	木	長14.0/幅6.0/厚0.5/内側3.3 2個共に長16.0/幅6.5/厚2.5	488.75	2個共に被用したあわせ形が背面で示している。
2577	G5	鋸	木	長10.2/幅0.8/厚0.5/内側2.0/外側2.0	660.00	複数枚、複数。
2578	G5	鋸	木	長8.0/幅0.7/厚0.5/内側2.0/外側2.1	454.66	鋸材等。
2579	G5	手鋸	木	長15.5/幅0.9/厚2.1	1190.00	鋸材等。

第8章 まとめ

はじめに

「調査の詳細については、松江城下町遺跡（殿町 287 番地）は〔第3章〕、松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）の北屋敷〔第4章〕、南屋敷〔第5章〕、追加調査で見つかった南屋敷の第4遺構面〔第6章〕、第4遺構面以前の遺構〔第7章〕とに別け述べてきたが、これらの遺構はいずれも、絵図面に見られる2つの屋敷地（北屋敷・南屋敷）の範囲に入るものである。指定された遺跡名、調査年度における遺構検出方法の相違、また実際調査を行った機関の相違などによってこのような煩雑な掲載になってしまったことを、まず、ご容赦願いたい。」

以上のことと踏まえ、本章では各章で述べてきた当調査地で検出された特筆する遺構をあげた上で、北屋敷・南屋敷の変遷を概観し、出土した陶磁器と土師器の概略を述べてまとめたい。

第1節 遺構の変遷

松江城下町遺跡（殿町 287 番地）（殿町 279 番地外）では、大きく別けて4層の整地層からなる遺構面を確認しており、1607年に堀尾吉晴が松江に初めて城下町を開いた時からの屋敷地の変遷過程を垣間見ることができた。以下、特筆する遺構に触れながら、屋敷地の空間の変遷を述べていく。なお、遺構面の考察、遺構の詳説については、第3章～7章の小結を参照されたい。

※以下、遺構番号の前の数字は概要を述べた章を示す。（④SB03→第4章のSB03）

1. 0期（17世紀初頭）〔北・南屋敷 第4遺構面以前〕（図は第7章第419図を参照）

〔北屋敷〕

【殿町 279 番地外】 第4遺構面の下面で検出した鍛冶関連遺構がこの期にあたる。鉄滓や羽口など鉄鍛冶がこの地で行われていたことを示す遺物が多く出土している。羽口にいたっては、江戸期は段面丸形が多い中、方形を成すものが多く見つかっており、鍛冶炉の形態を知る上で興味深いものである。

調査が部分的なものであったことから、遺構の広がりや規模について明確ではないが、屋敷地造成以前の面で検出していることなどから、西に堀を挟んで隣接する松江城の建設時に関係する鉄鍛冶の飯場のような施設があったとも推測される。

〔南屋敷〕

この期の南屋敷からは、ゴミ廐棄土坑が見つかっている。北屋敷と同様、屋敷地に建物を建設する以前の人々の活動を示した貴重な遺構となっている。

2. 1期（17世紀初頭）〔北・南屋敷：第4遺構面〕（図1）

1607年（慶長12年）に堀尾吉晴が松江城の建設を着手した頃の最初の城下町遺構がこの期にあたる。当調査地には重臣の屋敷が2つあったことが古絵図⁽¹⁾や文献から知られている。

この遺構面を形成する整地層は、北屋敷と南屋敷で異なる上を用いていたことから、屋敷ごとに整地（盛上）が成されたと考えられる。また、これら屋敷ごとの整地土の相違は、後述する各遺構面においても同様の状況が伺える。

〔屋敷境〕

この期に掘られた素掘りの大溝（⑥SD01）が当地、初現の屋敷境となる。主として屋敷割りを行った際の境界の溝であるが、城下町内の計画的な排水も考慮されつくられたと思われる。この素掘りの大溝（⑥SD01）は後にやや幅の狭い溝（⑥SD02）に替わられるが、素掘りの溝であることに相違はない。

【北屋敷】

北屋敷には堀尾采女（4,000石）が屋敷を構えていたことが分かっている。なお、今回の調査範囲は当時の堀尾屋敷地の西側の半分程度と推測されることから、東側に同程度の面積で未調査の屋敷地が広がっているものと思われる。出土遺物から比定される年代観は17世紀初頭である。

この期にあたる第4造構面は、水はけの良い黄色の山上を基盤としており、松江城北側に堀を通すために掘削された龜山山、赤山^②の土を敷いて屋敷の造成（整地）を行ったと思われる。実際、造成土中には須恵器の壺片が混入しており、赤山に存在した横穴墓^③などを破壊して持ち込まれたとも推測できる。

【殿町 279番地外】 主たる遺構は、建物跡（④SB03～06）、渡り廊下（④SC01）、護岸に石を積んでつくられた瓢箪状の池（④SG02）、小形の池（④SG01）、鍋水（④SD01）、花壇状遺構（④SX02）があげられる。

建物跡（④SB03）は9間×4（6）間以上の規模の大きい礎石建物跡であり、池（④SG02）の北に隣接し、池側には縁側が付設されていたものと考えられている。このような状況から主屋的な建物で池を眺望するための「客間」的な要素をもった建物であったと解釈している。このように、この期の池を祭視した主たる場所は、この④SB03内からと考えられ、その方向は北から南へ向されていたと思われる。また、規模不明の建物跡（④SB04）については、小規模の「離れ」的な建物であったと考え、池（④SG02）と小形の池（④SG01）間の鍋水（④SD01）を跨ぐ渡り廊下（④SC01）で建物跡（④SB03）と連結していたものと推測する。池（④SG02）は調査において、水を常時導水する、また排水するといった施設は見つかっていない。このようなことから、池内には常時導水（流水）されていたのではなく、特別な時に何らかの方法で窓口から水を落としていたものと考えられる。また、小形の池（④SG01）は方形を呈する石積みの質素なもので、風情を感じさせる池（④SG02）とは形態が大きく異なっている。この両者間に鍋水（④SD01）で連結されていることからセット関係にあったと考えるが、どのような相互関係を保ったものであったか定かでない。遺構の詳細を知るためにも今後、同様形態の遺構の事例が見つかることを期待したい。なお、小形の池（④SG01）の南側には植栽痕を検出した空間が認められることから、築山がつくられていたものと推測している。2間×4間の建物跡（④SB05）と2間×3間の建物跡（④SB06）については、調査地外である西側にも続く東西に延びる「長屋」のような施設であったと考えているが、両者が同一の建物で南北に長い比較的規模の大きい建物であったことも考えておく必要がある。

【殿町 287番地】 主たるⅠ期相当の遺構は、「最終面の遺構面」で検出した木枠方形土坑（③SK10）、建物跡（③SB05・06）がこの期にあたると思われる。

木枠方形土坑（③SK10）は地下式の小形倉庫のようなものと考えられ、後述するⅡ期の同様な形態をもつ、木枠土坑とセットの建物跡（③SB02）と同様、建物内に付設していたものと推測している。なお、2間以上×2間以上の建物跡（③SB05）は前述の「殿町 279番地外」の建物跡（④SB03）の北端と同軸に位置することから、両者が同一の建物であった可能性も考えておかなければならない。

【空間構成】 北屋敷においては、前述のとおり西側の約半分を調査したに過ぎない。よって東側半分の未調査の屋敷地も合わせて空間構成を考えてみる。まず、調査では確認することができなかったのだが、表門は北側であったと想定する。これは古絵図に書かれた当屋敷地の当主名の方向から推測できるものである。^[4] これに従うと、建物跡（④SB03）の背後に池（④SG02）があり、その先に築山があった様子が想像でき、北の表門側ではなく南である裏側に庭園がつくられていたことが分かる。江戸後期の資料ではあるが、現存する有澤家、三谷家の屋敷絵図^[5]を見ると、同様に裏側に庭園が配置されていることから江戸期の屋敷地の普遍的な配置構成はこのようなものであったのかもしれない。次に前述のとおり、④SB03が「客間」的要素が強い建物と仮定した場合、東の調査区外の屋敷地には「居宅」を主とした主屋が存在するものと考えられる。実際、検出したこの期の廐窯土坑は南屋敷と比べその数は少なく、食物残骸も多くはない。これら

の事実からも台所のような「居住」的主屋が東の調査区外の屋敷地にあると推測できる要素の一つとなろう。

以上から、Ⅰ期段階の北屋敷は、北側（表門側）に長屋、その後方の一定の空間を挟んだ東西方向に長い「客間」的建物が渡り廊下によって「離れ」に繋がって存在し、建物の南側、東側には池・築山・花壇を備えた庭園が配されていたと考える。

〔南屋敷〕

南屋敷のこの期は堀尾石近（500石）が屋敷を構えたと考える。当時の屋敷地に対する今回の調査範囲は地下保存された東側や開発範囲外の南側部分が一部残るが、当時の南屋敷地の大半は調査地に入ると考えている。山上遺物から比定される年代観は17世紀初頭である。

南屋敷の第4造構面は黒色粘土、灰色シルト、青灰色シルトを主体とした造成土を基盤としており、前述の北屋敷の基礎上とは大きく異なる。この造成土は第6章第2節で述べたとおり、北屋敷との境となる屋敷境の大溝を掘削した残土などを使用したものと考えている。

この期の南屋敷は遺構の残存状況が良好であったことから多くの遺構が検出されたが、これら遺構はⅡ期の初期段階（京極期1634～1637年を指す）、あるいはその頃まで継続するものが含まれているとも考えている。ただ、第4造構面という同一の面にⅠ期とⅡ期が混在することから明確な分別はできていない。このようにⅡ期段階にも継続するものもあるが、遺構の概観はⅠ期で述べておくこととする。

検出した主たる遺構は、素掘りの大溝（⑥SD03・04）、石積方形十坑（⑥SK04・05）、畠跡（⑥SN01）、建物跡（⑥SB01～04）、性格不明遺構（⑥SX01・02）、導水施設（⑥SX06）などがあげられる。

素掘りの大溝（⑥SD03・04）は屋敷地内を分割するためにつくられた間仕切りの溝と思われ、初期段階には3つの区画に別けられていたことが分かっている。石積方形十坑（⑥SK04・05）は周間に2～3段の石を積んだ小形の土坑で、他地域においても同様な遺構の報告が少なからず見られるものである。なお、このような小形の石積土坑はこの期と後述するⅡ期のみに見られる遺構であり、存在する時期が限定するものとも考えられる。畠跡（⑥SN01）は当期の屋敷内に畠がつくられていたことを示すもので、南屋敷内で畠の痕跡が見つかったのは今期に渡りこれのみである。自然科学分析においてはイネ植物の珪酸体が多く見つかっていることから、水稻が行われたとの報告が成されているが、畠の耕作による「敷き藁」がここに敷かれていたものと解釈している。建物跡（⑥SB01）は1間×2間以上の小規模なもので、屋敷境溝（⑥SD01）に沿って存在することから、長屋のような建物であった可能性が考えられる。なお、後述するⅡ期段階においても同様の建物が見つかっている。性格不明遺構（⑥SX01・02）は2～3段の石で積まれた石積方形十坑に石積水路が付設するものである。建物跡（⑥SB02）が同地に重なるようであることから、その関連性が疑われるが、明確なことは分かっていない。建物跡（⑥SB03）は2間×5間から後に2間×6間になった当期の主となる礎石建物跡である。両桁行には庇を付設し、北端の桁行と庇のみ掘立柱によってつくられるといった特殊な構造を見る。このような礎石と掘立を合わせてつくられた建物は、現時点では江戸期の建物で類例を知らない特殊なものである。なお、この建物内の礎が敷き詰められたところからは多量の炭化物が検出されており、台所であったとの解釈が成されている。建物跡（⑥SB04）は庇付の礎石建物で主屋的な建物と考えている。導水施設（⑥SX06）は竹の管を使用した上水に関連するものであるが、上水に関しては井戸が用いられている（当地松江の調査事例などから、この屋敷地内のみにて使用された局所的な施設と考えられている）。

【空間構成】 この期の南屋敷は「初、素掘りの大溝（⑥SD01・03・04）によって3つの区画（方形区画・短冊形区画・帯状区画）に分割しており、これらの区画はある意味をもって使用されていたと捉えることができる。南屋敷はこのようなことに着目し、屋敷地を概観してみる。

まず、古絵図の記載を根拠とした表玄関は西側である。方形区画には建物跡（⑥SB03）が表門側に入り方向で、その奥に表入り方向を表門に向けた建物跡（⑥SB04）が建っている。⑥SB03は前述のとお

り、台所跡をもつことや⑥SD04が埋められた後、倉庫が付設されることなどから、「居住」を主にしたものではなく、「離れ」の要素をもった建物であった可能性が高い。また、⑥SB04は表門側に近いことから、主屋的な建物であったとも考えられる。帯状区画と短冊状区画については、土坑や畠、また小規模な建物がつくられるが、居住するような建物は存在しない。このように見ると屋敷地のほぼ中心（方形区画）は「主屋」などの建物が建つ居住空間であり、表門側から奥になる空間（短冊形区画）と屋敷境側の空間（帯状区画）は、畠などがあった開けた空間であったと考えられる。

この期の南屋敷は使用目的によって明確に区画が別けられていた様子が伺える。



図1 I期

3. II期(17世紀前半～17世紀中頃)(図2)

[北屋敷：第3遺構面、南屋敷：第4遺構面(17世紀前半)・第3－2遺構面(17世紀前半～中頃)]

1634年(寛永11年)に京極忠高が松江に入府した頃からその後、入府する松平直正(1638年)までの時期を想定する。

[屋敷境]

I期の素掘り溝(⑥SD02)が埋められ、掘立柱の堀(⑥SA04)がつくられる。全時期を通して唯一、屋敷境から溝が消える時である。この屋敷境の溝が消滅していた時間がどのくらいであったかは定かでないが、現時点ではII期の初期段階(京極期)がこれにあたると考えている。この現象は第6章で詳述しているとおり、京極期の新たな屋敷制りに関わるものと解釈する。その後、松平期に入ると屋敷境の溝は再度つくられ2～3段に積まれた石積溝へと変化している。この石積溝は後に幾度かつくり直されながらも同位置に存続される。なお、当期の石積溝は東側からの列と西側の列とに屈曲するズレが生じている箇所が見られる。これは後述する石積溝の上に建てられた南屋敷の建物に起因するものと考えられる。

[北屋敷]

京極期(1634～1638年)には佐々九郎兵衛が、松平期の初期には乙部九郎兵衛(初代)、乙部勘解由、乙部九郎兵衛(3代目)がこの屋敷に入る。いずれも藩の要職を務めた重臣である。出土した陶磁器から比定された遺構面の年代観は17世紀前半～17世紀中頃と想定する。遺構面を成す整地土は、I期段階に20～40cmの盛土を施している。

【殿町279番地外】主たる「殿町279番地外」の遺構は、瓢箪状の池(④SG02)、小形の池(④SG01)、池(④SG03)、鍋水(④SD01)や建物跡(④SB01・02)、渡り廊下(④SC01)、礎石列(④SS01～03)、廐棄土坑(④SK23)があげられる。

瓢箪状の池(④SG02)、小形の池(④SG01)、鍋水(④SD01)はI期段階から跡襲されたもので、池(④SG02)はI期の護岸の石積形態が大形の石で組まれたものから、河原石を張られたものへと変が見られる。また、池(④SG02)東側のI期段階に花壇状遺構(④SX02)が存在した場所には、新たに2間×4(5)間の建物跡(④SB01)がつくられている。なお、規模不明な建物跡(④SB02)はI期の建物跡(④SB03)の軸方向と同じにし、東西方向に短くつくり直されたものと考えている。池(④SC03)は南西側の屋敷境付近に新たにつくられたものである。礎石列(④SS01～03)は調査区北西で確認された礎石列をもつ礎石列で、長屋建物がそこに存在した可能性を示唆させるものである。その他、廐棄土坑(④SK23)からは「佐々九郎兵衛」銘の木簡が見つかっている。前述のとおり「佐々九郎兵衛」は京極時代にこの屋敷に住まつた人物であり、この遺構面の時期を示す鍵となる土坑である。

【殿町287番地】「中間層」で検出された石垣(③SW02)と「最終面の遺構面」で見つかった建物跡(③SB03・04)、木枠方形土坑とセットで見つかった建物跡(③SB02)などがこの期にあたると考える。石垣(③SW02)は北西側で見つかった比較的規模の大きい3段積みの石積の石列で、石材の側面を揃えているものである。調査結果から得られた成果のみでは確定的なことは言えないが、その位置・形状から京極期の古絵図に見られる北西側の鍵の手状の屋敷の堀がこれにあたると、現時点では想定しておきたい(図2参照)。建物跡(③SB03・04)は東西方向に長い「長屋」が想定されるもので、前述の「殿町279番地外」の礎石列(④SS01～03)へと続いた同じ建物であったとも考えられる。木枠方形土坑とセットで見つかった2間×4間以上の建物跡(③SB02)は2間×4間以上の礎石建物跡と思われ、木枠の土坑を覆った単独の建物、もしくは比較的規模の大きい建物の存在を示している。

【空間構成】この期の空間構成を考えるにあたり、まず、I期段階の表門が北側であったのに対し、II期段階では西側に変わっていることに触れておかねばならない。前述のとおり表門の方向の根拠としたのは、古

絵図に書かれた当主名の方向からである。Ⅱ期段階の京極期の古絵図（図2）によると、北屋敷に書かれた当主「佐々九郎兵衛」の銘は西方向から書かれており、表門側が西に変わったと解釈できるのである。これを踏まえ遺構配列を考えると、Ⅱ期段階の北屋敷は、まず、表門の方向を変えた故か、西側の屋敷石垣を鍵の手状の石垣（③ SW02）に新たにつくり変える。主たる建物（④ SB02）はⅠ期の建物を縮小させ一部継承するか、また同軸（方向）で新たにつくり変えられ、池の東側に新たな建物（④ SB01）がつくられている。庭園と建物の関係に主観を掛けば、基本的にⅠ期段階と同様な配置構成となるが、池の景観した場所は池東側に新たにつくられた建物跡（④ SB01）の東側から西側へと変わった可能性も考えられよう。なお、この期の「居住」的下屋もⅠ期と同様、東側の調査区外の屋敷地に存在していると考えられる。

【南屋敷】

出土した陶磁器から比定される遺構面の年代観は17世紀前半～中頃と想定する。

Ⅱ期初期段階である京極期は、古絵図からの考察や屋敷境の消滅などから、新たな屋敷割りが行われたと考えられる。これにより南屋敷は北屋敷の敷地に取り込まれ、佐々九郎兵衛の屋敷地となっていたと現時点では考えている。後の松平期初期に入ると屋敷境溝が再度つくられ、Ⅰ期にあった南屋敷と北屋敷の屋敷割りが復活し、朝日丹波が新たにこの南屋敷に入る。これにより、南屋敷のⅡ期の京極期は第4遺構面がⅠ期から継続して対応し、松平期に入った頃が第3遺構面と第3～2遺構面に対応すると考えている。

以上より、Ⅱ期の初期段階（京極期）の遺構・空間構成はⅠ期で述べたものに従うこととし、ここでは松平期の遺構・空間構成を述べる。

遺構面を成す整地上はⅡ期段階から20cm程度の盛上がりが成される。上面の整地土は黄色の山上である。

主たる遺構は建物跡（⑤ SB08～12）、右積方形土坑（⑤ SK40・61～63・67）、礫敷遺構（⑤ SX02・07・08）、木舞状遺構（⑤ SX03～06）があげられる。

⑤ SB08は5間×7間の規模の大きい礎石建物跡である。南西側に1間×3間の張り出した部分があるが、東側の調査区外にも続くものならば、6間×7間の建物であった可能性も考えられる。⑤ SB09は軸を同じくして⑤ SB08を南に半間分ずらした位置に建てられた礎石建物跡である。礎石の位置から⑤ SB08の東柱とも考えられたが、礎石や礎石抜き取り痕が⑤ SB08のものと比較しても遜色ない大きさのものであったことなどから、⑤ SB08とは別の単独の建物であったと考えている。⑤ SB10は2間×6間以上の礎石建物跡で、北側や調査区外である西側に続く可能性もあることから、もう少し規模の大きい建物跡であった可能性も考えられる。⑤ SB11は西側の屋敷境石積溝の石積みを利用してつくられた南側に半間分の庇をもつ2間半×6間の礎石建物跡である。この建物の範囲内からは小石が敷き詰められた礫敷（⑤ SX02）や細い竹を指した方形状の木舞状遺構（⑤ SX03～06）が見つかっている。⑤ SB12は東側の屋敷境石積溝の右積みを利用してつくられた3間半×7間の礎石建物跡である。屋敷境石積みの上に建てられたことや礫敷（⑤ SX07）が建物内にあることなど、⑤ SB11と類似する点が多い。これら2つの建物は東西に長い長屋であったと考えられよう。礫敷遺構（⑤ SX08）は⑤ SB08内の北西で見つかった方形に小石が敷かれたものであり、Ⅰ期の⑥ SB03内で見つかった礫敷と同様、台所跡であった可能性も考えられる。石積方形土坑はⅠ期と同様の小形のもので、このうち⑤ SK40・61は上坑のみ覆った覆屋があったと考えている。

【空間構成】 前述のとおり、ここでは松平期の屋敷地を概観する。まず、表門側はⅠ期段階と同様、西側となっている。この期の主となる建物跡（⑤ SB08）は屋敷地のほぼ中央に、「期の「離れ」的な建物跡（⑥ SB03）があった上にこれと軸を同じくして建てられている。建物規模はⅠ期段階の⑥ SB03に比べやや大きくなり、この期の主屋的な建物はこの⑤ SB08であったと考えられる。また、表門側にはⅠ期段階と同様、東西に長い建物跡（⑤ SB10）がⅠ期と同軸方向で建てられている。奥の空間（短冊状区画）はⅠ期と同様、廐裏土坑などがある空閑地となっている。また、屋敷境側の空間（帯状区画）には長屋が屋敷境に沿って2棟（⑥ SB11・12）建てられ、北屋敷との複界を遮るものとなっている。以上から、Ⅱ期（松平期）の空間構成は

I期段階の使用目的による区画を基本的に踏襲した形で建物などが配置されたと考えるが、屋敷境の上に建てられた長屋によって明確に視界をも北屋敷と別られたことが見て取れる。

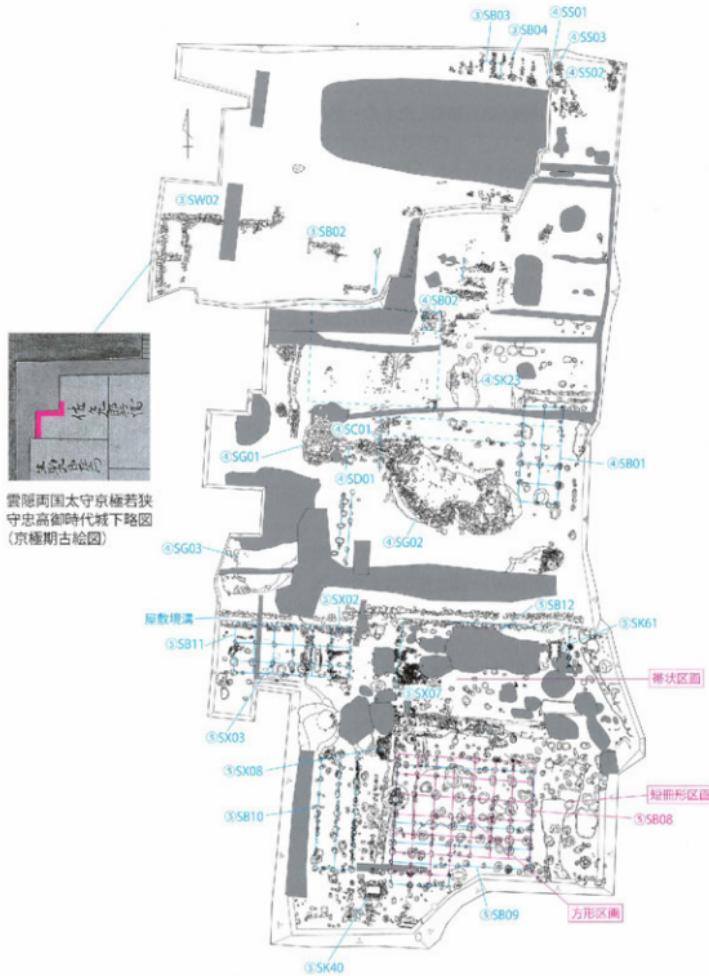


図2 II期

4. III期（17世紀中頃～18世紀代）（図3・4）

【北屋敷：第2遺構面、南屋敷：第3－1遺構面（17世紀中頃～18世紀前半）・第2遺構面（18世紀前半～後半）】

松江藩主、松平直政から松平治郷あたりまでの時期を想定する。

北屋敷のIII期は同一遺構面（第2遺構面）であるのに対し、南屋敷のIII期は17世紀中頃～18世紀前半は第3－1遺構面、18世紀前半～後半には第2遺構面と2面の遺構面がこの期に存在する。このことより、南屋敷では第3－1遺構面の時期をIIIa、第2遺構面の時期をIIIbとして述べていく。

【屋敷境】

IIIa期の屋敷境はII期段階の石積溝をほぼ踏襲したものと思われ、大幅な改修などは見られない。溝の排水の流出方向は東側であったと推測され、^⑩ I期段階と同様である。なお、IIIb期になると東側の屋敷境溝の痕跡が見えなくなるが、当初は途切れることなく存在していたものと思われる。

【北屋敷】

松平期の前半に乙部九郎兵衛（3代目か4代目）がこの屋敷に入る。出土した陶磁器から比定される遺構面の年代観は17世紀後半～18世紀代と想定する。

この期の遺構面を成す整地上はII期段階から約20～30cmの盛土が成される。

【殿町279番地外】 遺構においては、建物遺構などの存在は明らかにできていないが、畠跡（④SN01）、堀跡（④SA01～04）、便槽（④SK20・21）などを検出している。

畠跡（④SN01）は東端で見つかっており、調査区外の東へ続いている。種子・花粉化石が検出されており、当時ここで栽培された植物が特定できる貴重な資料となるものである。^⑪ 堀跡（④SA01）からは、根がらみを持った門柱と見られる柱が2つ見つかっており、堀跡（④SA02）を含め、南北また、東西の空間が別けられていたものと考えられる。また、堀跡（④SA03・04）も屋敷内の空間を別けるものであったと考えている。便槽（④SK20・21）は寄生虫卵が見つかった土坑で、自然化学分析によって明らかにされた便槽としては本遺跡唯一のものである。

【殿町287番地】「中間層」で検出した建物跡（③SB01）、廐棄土坑（③SK07）がこの期にあたると想定する。建物跡（③SB01）は礎石建物跡の一部と見られるもので、その位置から東西方向に平行をもつ長屋であったと解釈しておきたい。また、廐棄土坑（③SK07）は建物跡（③SB01）の下位から検出されており、この建物と新旧関係にある。

【空間構成】 占繪図にて想定される表門側はII期と同様、西側であったと考えられる。

この期の屋敷の空間構成は、主屋などの規模の大きい建物跡の検出ができなかったため、屋敷地内の空間使用を明確にできる材料は少ないが、堀跡（④SA01）によって区画された南北における空間使用が相違することが考えられる。これによって区画された南側は、I～II期段階で池をもつ庭園として使用されていたことから、北側が居住空間で南側はII期段階を継承した庭園的な空間であったことも考えられる。また、唯一検出できた建物跡である長屋（④SB01）の存在から、屋敷北端にはII期と同様、東西方向に長屋が配されていたと想定する。

【南屋敷】

【IIIa期】（図3）

占繪図による屋敷主は朝日千助であり、出土した陶磁器から比定される遺構面の年代観は17世紀中頃～18世紀前半と想定する。遺構面（南屋敷境付近の北側のエリア：帯状区画）の整地上はII期段階から10cm程度の盛土が成されている。

IIIa期の第3－1遺構面は第5章で述べているとおり、主たる建物が建つ屋敷地中央付近がII期の第3

— 2 遺構面と同じ遺構面となっている（第3遺構面）。

III a期の主たる遺構はII期と同様の建物跡（⑤SB08～10）、石積方形土坑（⑤SK40）と第3～2遺構面に盛土が成された南屋敷境付近の北側のエリア（帯状区画）の石積溝（⑤SD07・08）、廐棄土坑群1（SK43～49）、廐棄土坑群2（SK52～55）、石積方形土坑（⑤SK58）、井戸（⑤SE03）があげられる。

石積溝（⑤SD07）は礎石建物⑤SB08の北側に平行する石積溝で、屋敷境溝に連結する石積溝（⑤SD08）と本来はつながっていたと考えており、建物が存在する中央エリア（方形区画）を区画する溝と見ることもできる。廐棄土坑群1（SK43～49）は北東側で、廐棄土坑群2（SK52～55）は礎石建物⑤SB08の北西側で見つかったゴミ穴であり、2ヶ所に密集してつくられていることはこの付近が完全なる空閑地であったことを示している。なお、廐棄土坑群1より廐棄土坑群2の方が多いの食物残骸（貝・魚骨など）を排出することから、廐棄土坑群2付近に台所のような施設があった可能性も考えられる。石積方形土坑（⑤SK58）は他の石積土坑と違い、底面に板状の石が敷かれているものである。井戸（⑤SE03）は来待石の井筒が積まれたものであるが、当初は大海崎石を積んで井戸枠を成型していたと考えられるものである。

【空間構成】 III a期の表門側はII期と同様、西側である。主となる建物は前述のII期と同様である。建物跡（⑤SB08～10）が中央エリア（方形区画）に存在しており、II期段階から変化したのは南屋敷境付近の北側のエリア（帯状区画）のみである。なお、このエリアは大規模な盛上造成による地盤（遺構面）の変更といったものではなく、いわば生活面の変更（限られた区間の造成）といったものである。当期においてはII期段階に建てられた長屋（⑤SB11・12）は存在していないと判断しており、II期に増して空闊的な空間であったと考えられる。また、廐棄土坑群が2ヶ所に集中していることから、屋敷地内の空間をより計画的に使用していたものと思われる。

以上から、III a期の南屋敷はII期同様、I期の区画を踏襲し、建物のエリア、空閑地的なエリアと別れていた上で、廐棄する場所など、より詳細に屋敷地内の利用計画が行われていたものと考えられる。

【III b期】（図4）

古絵図による屋敷主は朝日千助であり、出土した陶磁器から比定される遺構面の年代観は18世紀前半～後半と想定する。遺構面の整地土はIII a期から約20cmの盛土が成される。

主となる遺構は建物跡（⑤SB03～07）、塙跡（SA03・04）などがあげられる。

建物跡（⑤SB03）は2間×5間以上の礎石建物跡で東側と南側にさらに延びていくものと考えられる。建物跡（⑤SB04）は3間×4間以上、建物跡（⑤SB05）は2間×5間以上の礎石建物跡である。これら3つの建物跡には新旧関係が認められるが、存在した順については分かっていない。建物跡（⑤SB06）は2間半×6間以上の礎石建物跡でII期の建物（⑤SB10）の直上に建てられたものである。これはII期⑤SB10の礎石の真上に⑤SB06の礎石があるといったほど正確につくられたもので、そこまで同位置に建てることにこだわったのは大変興味深い。なお、これら建物の礎石はII期⑤SB10は大海崎石が、III a期⑤SB06は島石が使用されており、明らかに石材使用の変化が見られる。石材に関しては、この期に検出した石積溝も同様に島石が多い。南屋敷に関してはIII b期（第2遺構面）に島石を多用する現象が見られる。⁶⁰ 建物跡（⑤SB07）は1間×3間以上の礎石建物跡である。塙跡（SA03）は南北方向に、塙跡（SA04）は東西方向に並んだ礎石列で、両者は連結し敷地内を画する塙が存在したものと考えられている。建物跡（⑤SB03～07）と塙跡（SA03・04）はいずれも軸方向と同じ向きにしてつくられており、この軸方向はI期段階からほぼ変化していない。

【空間構成】 表門側はIII a期と同様、西側である。この期の主屋的な建物は⑤SB03～05と見られ、幾度かの建替えが行われたものと思われる。建てられた位置はIII a期まで空閑地となっていた奥の空間にまで及び、やや東側に建物位置が変化する状況が伺える。なお、これら建物は表門側を裏入り方向にしているのはIII a期から変化はない。南屋敷境付近の北側のエリア（帯状区画）は東側半分が近代の掠乱に

よって消滅しており、正確なことは言えないが、Ⅲ a 期までと同様、空闊地的なエリアであったと想像する。

以上からⅢ b 期の南屋敷は東側奥に主屋が、表門側にⅢ a 期と同様の東西に長い建物が建ち、南西側にも建物が建っていたと考えられる。また北側はⅢ a 期と同様、開けた空間があったとも想像される。

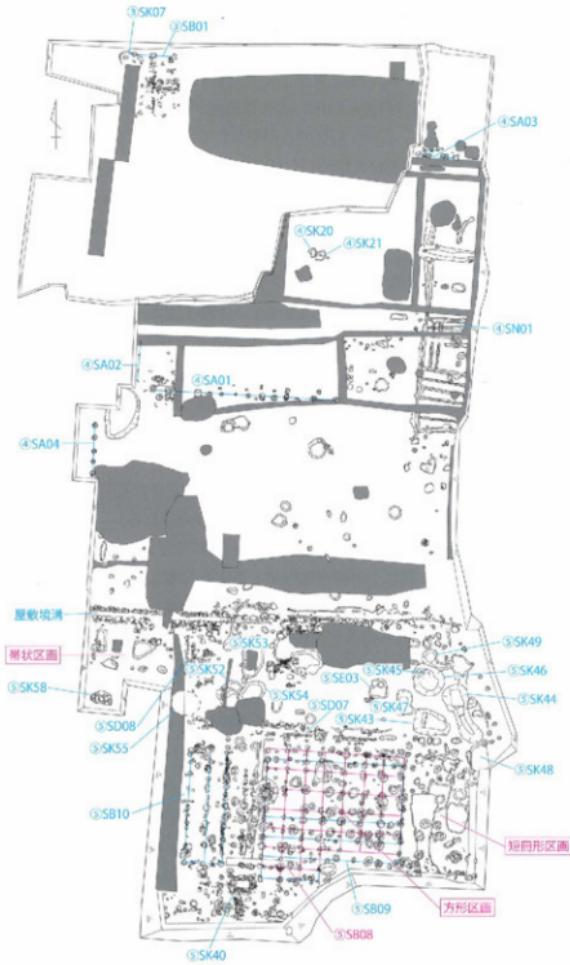


図3 Ⅲ a 期

5. IV期（18世紀代～明治初頭）（図5）

【北屋敷：第1遺構面、南屋敷：第1遺構面（18世紀後半～明治初頭）】

松江藩主、松平治郷から定安及び、廃藩置県後あたりまでの時期を想定する。

【屋敷境】

IV期の屋敷境の痕跡は近代の損壊を受けていたこともあり検出できていない。当初から溝や堀などはつく

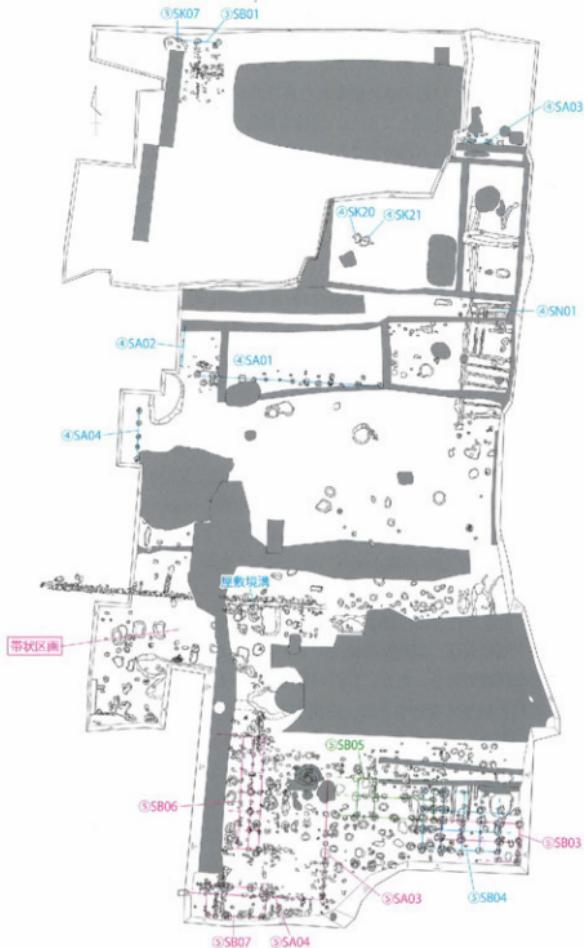


図4 III b期

られていなかったとも考えられるが、家老クラスの「屋敷地に境が全くなかったことは想像しにくい。現時点では北西に残っていた近代の敷地境界の溝と同等なものが存在していたと想定しておく。

〔北屋敷〕

松平期の後半に乙部九郎兵衛（5代目）がこの屋敷に入る。出土した陶磁器から比定される遺構面の年代観は18世紀代～明治初頭と想定する。

遺構面を成す整地上はⅢ期段階から10～30cmの山土系の盛土が成される。

【殿町 279番地外】 遺構においては、多数の上坑を確認しているが明治以降の上坑も多く含まれていると思われ、同期の遺構と断定できるものは少ない。そのような中の主たる遺構としては、石積方形土坑（④SK02・03）、井戸（④SE01～03）、胞衣箱埋納坑（④SK04）があげられる。

石積方形土坑（④SK02・03）は石垣状に積まれた長方形を呈した大形のもので、両者とも石積土坑内に降りることができる石の階段を併設している。同様な形体が各地で確認されているが、その性格、即ち、想定された利用状況は様々である。本遺跡のこれらの周間に他の遺構が見つかっていないことや、石積の間に日張りもなく調査中も水が溜まるような状況であった事実から、屋内での物資保管用の石室などではなく、屋外に設置されたものであったと現時点では考えておきたい。なお、これらの廃棄時期は、土坑に入れられた廃棄遺物から屋敷地が分筆された明治3年以降と想定できる。井戸（④SE01・02）は石組でつくられたもので、軟質砂岩の米待石と大海崎石が用いられている。この来待石はこの期の後半頃に遺構使用石材として出現する傾向が見られる。井戸（④SE03）は板材を使用した本遺跡唯一の木枠井戸で、石積井戸が大半を占める江戸期の松江の井戸形態としては珍しいものである。胞衣箱埋納坑（④SK04）は胎児のへその緒を埋納した箱が見つかった土坑で、松江藩主松平定安の子、鑑子の誕生の際に執り行われたことが分かっている。胞衣の風習は古代から近代まで躋襲する普遍的なもので、江戸期の絵画でもその様子は描かれている。²⁰ 藩主に関する胞衣遺構の出土は大変珍しいものと言える。

【殿町 287番地】 主たる遺構は「中間層の遺構面」で検出された石積方形土坑（③SK08）、「上面の遺構面」で検出された石積溝（④SD01）などがあげられる。石積方形土坑（③SK08）は「殿町 279番地外」で見つかった③SK02・03と類似するものだが、階段の代わりに内側周間に一段のステップを敷設している。このような大形の石積土坑はIV期にのみ見られることから、松江においてはこの時期を示す遺構と解釈できるのかもしれない。石積溝（④SD01）は区画溝か雨落ち溝と想定するが、検出面のレベルからこの期の他の遺構よりも新しい時期のものになるかもしれない。

【空間構成】 古絵図にて想定される表門側はⅡ・Ⅲ期と同様、西側であったと考えられる。

この期の屋敷地内の空間構成は、建物跡の検出ができず、また明治以降の遺構も多く混在することから、想定することすら困難な状況である。ただ、井戸（④SE01～03）が見つかったエリアなどは、これらがすべて同時期に存在したとは言えないものの、密集することは明らかである。この状況からこのエリア付近は建物はない空閑地であったとも考えられる。また、ポイント的なものではあるが、胞衣箱埋納坑（④SK04）が見つかったエリア付近も建物がない空閑地と推測できる。

根拠の乏しい拡大解釈となるかもしれないが、屋敷地の南側のエリアはⅠ期段階からこの期まで庭園として使用されていたのかもしれない。

〔南屋敷〕

古絵図による屋敷主は朝日千助であり、出土した陶磁器から比定される遺構面の年代観は18世紀後半～明治初頭と想定する。遺構面の整地上はⅢb期段階から10～30cmの山土系の盛土が成される。

この期の南屋敷は近代家屋の搅乱によって大半の遺構面は消失していたが、南東のエリアで遺構を確認することができている。

主たる遺構は建物跡（⑤SB01・02）、柵列（⑤SA01・02）、井戸（⑤SE01・02）、祈祷具埋納土坑（⑤SK06・07）などがあげられる。

建物跡（⑤SB01）は4間×5間以上の礎石建物跡であり、北・南・東に延びる規模の大きい建物の可能性が考えられる。建物の軸方向はⅠ期段階と同様である。建物跡（⑤SB02）は5間×6間以上の礎石建物跡を想定したものであり、軸方向は西へ少しずれるものである。両者は建替えたものと思われるが、こ



図5 Ⅳ期

これまでの建物の中で唯一、軸方向がずれていることが根拠として許されるならば、⑤SB02が新しいと言えるのかも知れない。櫛列（SA01・02）は塀など遮蔽施設の痕跡と見られるが、明治以降の可能性も考えられるものである。井戸（SE01・02）は来待石を井筒としたもので、両者とも近代まで使用されていたようである。祈禱具埋納土坑（SK06・07）は建物や屋敷内に祈禱した祭祀貝を埋納した土坑で、土坑内には木箱が安置してあった。詳細は第5章に譲るが、秘伝とも言える祈禱具一式が見つかったことは国内初のことであり、考古学のみならず、江戸期の風俗を解明する貴重な資料と成り得るものである。

【空間構成】 古絵図による表門側はⅢb期と同様、西側と考えられる。

この期は近代の搅乱が広範囲に及んでいることから、屋敷地内の空間構成を明らかにするには至らないが、主屋となり得る建物跡（⑥SB02・03）がⅠ期段階から変わらない中央のエリアに存在していることや、2つの祈禱貝が建物を囲むように埋納されたとも考えられることから、これまでと同様、北側の屋敷境付近は空閑地であったと想像する。これにより、空間使用はⅢb期と人差ないものであったと考える。

さいごに

これまで述べてきたとおり、北屋敷と南屋敷には屋敷地内の造成に時期差が生じていることが分かった。通常、屋敷内の造成の契機は水害などによるものと考えられるが、屋敷ごとに時期を追え造成を行っている事実から見ると、それだけが造成を起因するものではないと思われる。今回、文献などにより南屋敷の家主のすべてを解明することができなかったが、これら家主の交代時が造成に起因するものなのかもしれない。このことは今後の検討課題としたい。また、建物や屋敷境などの軸方向が東北から東へ3~4度と時代を重ねてほぼ同一である成果を得ることができた。これは城下町を整備する際に計画された道路、堀などの軸とほぼ同じになるもので、今後の松江城下町を調査、研究する上で貴重な成果と成り得よう。

註

- (1) 「堀尾期松江城下絵図」（島根大学附属図書館蔵）より。調査地を拡大したものは第1章第12図を参照。
- (2) 龍田山は松江城が立地する小高い單独丘陵で、赤山は龍田山の北側にある丘陵である。
- (3) 「赤山横穴群」島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隱岐編）2003年3月 島根県教育委員会
- (4) 絵図に書かれた屋敷主名の軸方向が表門側と解釈している。
- (5) 「有澤家絵図」島根県立図書館蔵、「三谷家屋敷絵図」三谷家所蔵による。
- (6) 島根大学総合理工学部 沢井哲氏から教示して頂いた。
- (7) 詳細は第9章 自然化学分析を参照。
- (8) 大海崎石は松江市大海崎町付近で採れる淡赤色の安山岩で、江戸期の松江城下町では一番多く見られる石材である。島石は松江市八束町に多くが採れる黒色の玄武岩（火が多數穿孔する）である。同類の石は宍道湖沿岸でも採取できるようである。
- (9) 『江戸の生活文化 「岡倉江戸考古学研究事典」江戸遺跡研究会 [編] 柏書房

第2節 松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）出土の陶磁器について

1. はじめに

平成 19 年度、20 年度にかけて発掘調査を行った松江城下町遺跡（殿町 279 番地外）では、屋敷境を境にして 2 つの武家屋敷（北屋敷、南屋敷）が見つかり、各屋敷で 4 面の遺構面を検出すことができた。

ここでは、それぞれの屋敷地の各遺構面に作る遺構一括資料を用いて、陶磁器の様相と変遷を追っていく。また、松江では藩主の交代を基準として、堀尾期（1607～1633 年）、京極期（1634～1637 年）、松平期（1638～1871 年）とに別けられ、藩主の交代とともに屋敷地に入居する藩士も変わっていることが絵図面などで分かっている。陶磁器の様相と変遷を追うとともに北屋敷、南屋敷の各遺構面がどの時期に該当するのかも述べたいと思う。

2. データについて

今回の調査では、北屋敷では、陶磁器、土器、瓦質土器、土師器皿含めて総破片数が 12,310 片、南屋敷では総破片数 22,136 片と膨大な出土量であった。これらの資料を客観的に把握するために、北屋敷、南屋敷の各遺構面の遺構で産地組成の割合を提示した。また、年代の指標として九州陶磁編年（以後、九陶編年と称する）を用い、生産地年代ではどの時期に比定されるものが主体となる遺構であるかを述べていくこととする。

南屋敷での総破片数が北屋敷の総破片数の約 2 倍と大きな差が見られ、これは南屋敷では屋敷地のほぼ全域を発掘調査しているのに対し、北屋敷の調査では廃棄土坑が南屋敷ほど検出されておらず、北屋敷の居住空間が未調査区に存在している可能性が高いためと思われる。この未調査区を調査すれば南屋敷同様に、多数の遺物が出土すると思われる。

なお、詳しくは第 5 章で述べられているが、南屋敷の第 3 遺構面では調査区南側の礎石建物を残しつつ、その北側を新たに造成し、嵩上げしている遺構面が確認されている。嵩上げ以前の遺構面を第 3-2 遺構面、嵩上げ後の遺構面を第 3-1 遺構面として、山上遺物も別けて取り扱っている。

2. 北屋敷における陶磁器の様相（表 1・図 1）

① 第 4 遺構面

<屋敷境 SDO1 >

第 6 章で詳述されているとおり、屋敷境を示す素掘りの大溝に北屋敷側から廃棄されていた一括資料である。この遺構で出土した陶磁器で、最も大きい割合を示すのは肥前陶器の碗皿である。肥前陶器は絵唐津の皿といった、九陶編年Ⅰ-2 期（1594 年頃～1610 年代）にあたるものが主体を占める。また、九陶編年Ⅱ 期（1610 年代～1650 年代）にあたる鉄線形、折線形といった口縁部片も少量出土している。その後に、大きな割合を示すのが中国磁器である。青花とともに、漳州窯系の五彩の大皿が出土している。その他、志野、織部の碗や備前の描鉢などが伴う。肥前磁器が 1 片出土しているが、担当者により混入品と判断されている。ちなみに総破片数に対して上鉢器皿の割合が 87% とかなりの割合を占める。

< SD04 >

大形の礎石建物跡 SBO3 に伴う雨落ち溝から出土した一括資料である。ここでも、屋敷境 SDO1 と同様に、肥前陶器の碗皿が主体を占めるが、九陶編年Ⅱ 期（1610 年代～1650 年代）にあたるものが増加傾向にある。屋敷境 SDO1 で出土している鉄線形、折線形に加えて溝縁形の口縁部をもつ皿（以後、溝縁皿と称する）も 1 点見られる。次に大きな割合を示すのが、やはり中国磁器でいずれも青花の碗皿である。

その他、瀬戸美濃碗や備前の鉢、肥前陶器の描鉢・甕も伴う。土師器皿が 85% とかなりの割合を占める。

②第3遺構面

< SK23 >

池 SG02 の北側で検出した廐棄土坑からの一括資料で、1634～1637年にこの屋敷地に入居していたことが分かっている「佐々九郎兵衛」名の木簡が共伴している。出土する陶磁器の主体は肥前陶器の碗皿であるが、内面見込み部分に砂目積の跡が残る皿（以後、砂目皿と称する）といった九陶編年Ⅱ期（1610年代～1650年代）のものが主体である。ただし、溝縁皿は出土していない。その次に大きな割合を示すのは、中国磁器で青花碗、皿などに加え、漳州窯系の五彩皿も伴う。その他、肥前陶器の瓶・擂鉢、瀬戸美濃の鉢、備前の甕・擂鉢が出土している。なお、肥前磁器の細片も3片出土しているが、混入品と判断している。土師器皿の割合は82%である。

③第2遺構面

第2遺構面では良好な一括資料がなく、比較的まとまった遺物が出土しているSK18でも、上部は第1遺構面のSK16に削平されており、本来の掘り込み面は不明である。しかし、第1遺構面と第3遺構面に伴う陶磁器の年代の間を埋める資料として、ここで取り扱うこととする。

< SK18 >

調査区に西端で検出した廐棄土坑からの一括資料で、肥前磁器が主体となっている。肥前磁器の中では、九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）にあたる碗皿とⅣ期（1690年代～1780年代）にあたる碗皿が主であるが、Ⅳ期（1690年代～1780年代）のほうが若干多く、陶胎染付碗や波佐見の皿といったものが目につく。その次に大きな割合を示すのが肥前陶器で、九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）の碗とⅣ期（1690年代～1780年代）の碗皿が多く、中でも京焼を意識してつくられた碗や銅緑釉の見込み釉剥ぎの皿といったⅣ期（1690年代～1780年代）に比定されるものが主体となっている。ここでは中国磁器は出土していない。その他、在地系陶器の香炉や京都・信楽系の陶器皿、須佐の擂鉢、備前の鉢などを伴う。土師器皿の割合は28%である。

④第1遺構面

< SK02 >

調査区中央で検出した石積方形土坑からの一括資料である。産地不明品が主体となっている。その中でも産地不明の磁器が多く、これらは肥前系と思われるものの素地などが肥前と異なるものである。その次に大きな割合を示すのは肥前陶器の碗皿で、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが多い。肥前磁器は、肥前陶器よりやや割合が小さく、陶胎染付碗や雨降文の猪口など九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが主体である。この他、肥前陶器の瓶、中国の青花鉢や須佐の擂鉢、在地系陶器碗などが出土している。土師器皿の割合は45%である。

< SK03 >

調査区西側で検出した石積方形土坑からの一括資料で、肥前磁器が主体となっている。肥前磁器は器種にバリエーションが多く、碗皿以外に鉢類、瓶類なども出土している。碗皿は九陶編年Ⅴ期（1780年代～1860年代）にあたるものが多く、広東碗、端反碗も口に付く。その次に多いのは、在地陶器の碗皿で、布志名焼や御庭焼などである。この他、京焼風の肥前陶器皿や、京都・信楽系陶器の瓶、萩・深川系の碗、須佐の擂鉢など様々な産地の陶器が少しづつ見られる。ここでは、瀬戸磁器が出土している。土師器皿の割合は7%である。

3. 南屋敷における陶磁器の様相（表2・図2）

①第4遺構面

遺構からの良好な一括資料があまりないため、建物が存在した方形区画での資料を扱うこととする。

<方形区画>

主体となる陶磁器は肥前陶器である。碗皿が一番多く、胎上目跡の残る皿や絵唐津といった九陶編年Ⅰ-2期（1594年頃～1610年代）にあたるもののがほとんどである。また、九陶編年Ⅱ期（1610年代～1650年代）にあたる砂目皿は1片出土しており、溝縁皿は見られない。さらに、肥前陶器の瓶、壺、鉢類なども伴う。その次に大きな割合を占めるのが中国磁器で、青花の碗皿に加えて白磁皿、華南三彩の小皿も出土している。その他、志野碗、初期京焼の碗、備前の鉢類などがある。土師器皿の割合は68%である。

②第3-2遺構面

<SD10>

調査区北側で検出した建物に伴う雨落ち溝からの一括資料で、肥前陶器と肥前磁器が主体となっている。肥前陶器の方が肥前磁器より若干割合が大きく、碗皿は九陶編年Ⅱ期（1610年代～1650年代）にあたるものが多い。ここでは、溝縁皿が1片出土している。この他、壺、甕、鉢、瓶といった器種も出土している。肥前磁器は碗皿がほとんどで、九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）が主体となっているが、生産地年代で17世紀中頃にあたるものが多いようである。中国磁器の占める割合は、ほんのわずかになっている。土師器皿の割合は27%である。

③第3-1遺構面

<SK50>

調査区北側で検出した廐棄土坑からの一括資料で、肥前磁器が主体となっている。九陶編年Ⅱ-2期（1630年代～1650年代）、Ⅲ期の中でも生産地年代で17世紀中頃に近い碗皿が多いが、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたる皿、瓶も見られる。肥前陶器は肥前磁器の半分と少なくなつておらず、その中に九陶編年Ⅱ期（1610年代～1650年代）にあたる碗が主である。上師器皿の割合は59%である。

<SK48>

調査区南側で検出した土坑からの一括資料で、肥前陶器と肥前磁器の割合が同じであった。肥前陶器は九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）にあたる碗皿が主体で呉器手碗などが見られる。この他、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたる刷毛目塗りの碗の他、壺・甕も少量見られる。肥前磁器は九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）にあたる碗皿が主体で、荒磯文、網目文が施された碗などに加え、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるコンニャク印判の施された碗も見られる。土師器皿の割合は65%を占める。

<SK44>

調査区北側で検出した廐棄土坑からの一括資料で、陶磁器の中では肥前磁器が主体となっている。肥前磁器は九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたる碗皿が一番多く、Ⅲ期にあたるものも多い。次に大きな割合を示すのは肥前陶器で、呉器手碗といった九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）にあたるもののが主である。上師器皿の割合は51%を占める。

<SK43>

調査区北側で検出した廐棄土坑からの一括資料で、肥前磁器が64%とかなりの割合を占める。その中で九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるもののが一番多く、その次に九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）、九陶編年Ⅱ-2期（1630年代～1650年代）にあたるものが多い。碗皿が主であるが、鉢、香炉、

瓶、壺といった器種も見られる。肥前陶器は只器手碗といった九陶編年Ⅲ期(1650年代～1690年代)にあたるものが目立つ。中国磁器は伴わない。土師器皿の割合は16%を占める。

④第2遺構面

<SK13>

調査区中央辺りで検出した十坑からの一括資料で、肥前陶器が主体となっている。九陶編年Ⅳ期にあたる碗皿がかなり多く、陶胎染付碗や蛇の目四型高台をもつ皿、外青磁の碗、波佐見の碗皿など生産地年代で18世紀代を示すものが目に付く。肥前陶器が次に大きな割合を示し、九陶編年Ⅳ期(1690年代～1780年代)にあたる碗皿が一番多く、京焼を意識したものが見られる。この他、在地系陶器の灯明皿や瀬戸美濃碗、備前の播鉢に加え、土器の焰焼・火鉢などが出土している。土師器皿の割合は16%を占める。

<SK08>

調査区南側で検出した土坑からの一括資料で、九陶編年Ⅳ期(1690年代～1780年代)にあたる肥前陶器の碗皿が一番多い。その次に大きな割合を示すのが上師器皿、その次に上器が多く、器種は焰焼や焼塙皿である。肥前陶器は5%しかなく、その中では九陶編年Ⅳ期(1690年代～1780年代)が主体となっている。

⑤第1遺構面

<SK05>

肥前陶器が主体で、九陶編年Ⅴ期(1780年代～1860年代)にあたるものがほとんどである。肥前陶器の器種は、碗と端反碗の蓋以外に蓮華がみられる。肥前陶器は伴っておらず、産地不明の大甕が出土している。この他、生産地年代で19世紀前半にあたる瀬戸磁器の碗が見られる。

4. 陶磁器の変遷と該当する時期

北屋敷、南屋敷の遺構面ごとの様相を述べてきたが、各屋敷の遺構での陶器と磁器の使用の変化(表3)に着目して、九陶編年を基準にした陶磁器の変遷と藩主の時の時期に該当するものかを考えてみる(表4)。

北屋敷の第4遺構面、南屋敷の第4遺構面では、いずれも九陶編年Ⅰ～Ⅱ期(1594年頃～1610年代)にあたる肥前陶器が主体で、使用される磁器は中国磁器のみである。九陶編年Ⅱ期(1610年代～1650年代)にあたる肥前陶器も少量存在するため、この遺構面で使用され始めている可能性も考えられる。これらの遺構面の年代は、17世紀初頭から前半と推定され、堀尾期(1607～1633年)のみ、あるいは京極期(1634～1637年)に該当すると思われる。

北屋敷の第3遺構面は、SK23では九陶編年Ⅱ期(1610年代～1650年代)にあたる肥前陶器が主体で、溝縁皿は見られないが、砂口皿が比較的多く見られる。使用される磁器は中国磁器のみである。「佐々」名の木簡が出土していることから、京極期(1634～1637年)に該当することは間違いないと思われるが、同じ北屋敷第3遺構面検出の池SG02の埋土から、生産地年代で17世紀中頃の肥前陶器が出土していることから、北屋敷の第3遺構面が、17世紀中頃の松平期(1638～1871年)の最初の頃まで存続していた可能性が高いと思われる。南屋敷の第4遺構面も松平期の最初の頃まで存続していた可能性も考えられるが、陶磁器だけでは確定できない。

南屋敷3-2面では、九陶編年Ⅱ期(1610年代～1650年代)にあたる肥前陶器が主体で、使用される磁器は九陶編年Ⅱ～Ⅲ期(1630年代～1650年代)や生産地年代で17世紀中頃の肥前陶器も多く見られるようになる。北屋敷の第3遺構面全体では、溝縁皿が多く出土しているため、松平期の最初の頃に溝縁皿の使用が増加するのではないかと想定している。

南屋敷3-1面は、SK50では九陶編年Ⅱ～Ⅲ期(1630年代～1650年代)や、生産地年代で17世紀中頃

の肥前磁器主体となり、肥前陶器は3-2面に引き続き、九陶編年Ⅲ期（1610年代～1650年代）が主であるものの、占める割合は小さくなる。SK48では肥前陶器と肥前磁器が同じ割合を示すが、いずれも九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）が主体となる。SK44では肥前陶器は九陶編年Ⅲ期（1650年代～1690年代）が主体となるが、肥前磁器の占める割合がやや大きくなり、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが多くなる。SK43ではさらに肥前磁器の占める割合が大きくなる。南屋敷3-1面の中での、これらの遺構の陶磁器の様相の変化は、遺構面の年代軸を表していると思われる。

北屋敷第2遺構面は、SK18で肥前磁器の割合がやや大きく、九陶編年Ⅲ～Ⅳ期にあたるものが主体で、肥前陶器も九陶編年Ⅲ～Ⅳ期にあたるものが多いことから、南屋敷3-1面での陶磁器の様相と類似する。よって、北屋敷第2遺構面と南屋敷3-1面を同時期に存在した遺構面と推定した。これらの遺構面は17世紀中頃から18世紀前半の松平期に該当すると考えられる。

南屋敷第2遺構面は、SK13では肥前磁器の割合が肥前陶器の約2倍を占め、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが多い。肥前陶器は九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるもののが主体を占める。

SK08では肥前陶器に対して肥前磁器の割合が逆転的に多くなり、九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが主体である。肥前陶器は九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが多い。

北屋敷第1遺構面のSK02は、肥前磁器と肥前陶器の比率があまり変わらず、いずれも九陶編年Ⅳ期（1690年代～1780年代）にあたるものが主体である。このことから、南屋敷第2遺構面のSK13と並行する時期の遺構である可能性が高い。もしくは、土師器皿の占める割合が大きいことから、南3-1面に並行する可能性も考えられるが、現段階では確定できない。北屋敷第1遺構面のSK02と南屋敷第2遺構面が並行するとなれば、18世紀前半～後半の松平期にあたると思われる。

北屋敷第1遺構面のSK03は、肥前磁器の割合が大きく、九陶編年Ⅴ期（1780年代～1860年代）にあたるものが主体である。ここでは、陶器が様々な産地のものが使用される。

南屋敷第1遺構面のSK05でも、肥前磁器の割合が大きく、九陶編年Ⅴ期（1780年代～1860年代）にあたるものが主体である。このことから、北屋敷第1遺構面と南屋敷第1遺構面が並行していたと考えられ、19世紀前半から明治初頭の松平期にあたると思われる。

5. さいごに

以上のように九陶編年という生産地年代を基準にして、松江での陶磁器の様相と変遷を述べてきたが、端尾期、京極期、松平期という松江ならではの枠組みが九陶編年と必ずしも合致するとは言い難く、生産地の年代がそのまま消費地の年代とは限らない問題を含んでいる。以前より発掘調査の進められている大坂城下町、江戸城下町といった消費地では、陶磁器の生産地年代と消費地年代との齟齬を埋めるべく、すでに詳しい研究が行われており、今後、消費地である松江城下町でも年代基軸が必要となると思われる。今回の調査成果をもとに、今後さらに増加する資料も含めて検討していくことが必要と思われる。

表1. 北屋敷産地組成表

遺構面	遺構名	肥前陶器	肥前磁器	中国	志野	瀬戸美濃	瀬戸磁器	京・信系	備前	須佐	越前	織部	萩・深川系	在地	土器	不明	土師器皿	
北4面	屋敷塙SD01	8%	0.1%	1%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	0.1%	0.1%	0%	0%	0%	1%	87%	
	縦破片数811片	67	1	8	11	0	0	0	10	0	1	1	0	0	0	5	707	
	SD04	11%	0%	3%	0%	0.3%	0%	0%	0.3%	0%	0%	0%	0%	0%	0.3%	0.3%	85%	
北3面	縦破片数365片	41	0	10	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	310	
	SK23	8%	0.5%	6%	0%	0.3%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0.5%	1%	82%	
北2面	縦破片数622片	51	3	36	0	2	0	0	4	0	0	0	0	0	0	3	513	
	SK18	20%	32%	0%	0%	0%	0%	0.5%	1%	6%	0%	0%	0%	4%	3%	6%	28%	
	縦破片数202片	41	64	0	0	0	0	0	1	2	12	0	0	0	8	6	56	
北1面	SK02	15%	12%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	1%	0%	22%	45%	
	縦破片数132片	20	16	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	29	59
	SK03	4%	26%	0.2%	0%	0.4%	0.3%	2%	0.1%	1%	0%	0%	0.2%	16%	0%	35%	7%	
	縦破片数1205片	46	316	3	0	5	4	29	1	9	0	0	3	193	0	424	83	

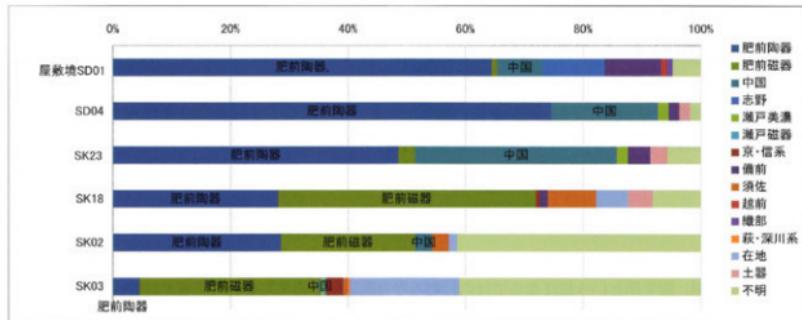


図1. 土師器皿を除いた組成グラフ

表2. 南屋敷産地組成表

造構面	造構名	肥前 陶器	肥前 磁器	中国	志野	瀬戸 美濃	瀬戸 磁器	京・信系	備前	敦賀施 釉陶器	須佐	在地	土器	瓦質 土器	不明	土師 器皿
南4面	方形区画	18%	0%	10%	1%	0%	0%	0%	0.5%	2%	0%	0%	0%	0%	1%	68%
	認破片数606片	112	0	58	4	0	0	0	3	14	0	0	0	0	5	410
南3-2面	SD10	36%	33%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	27%
	認破片数45片	16	15	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	12
南3-1面	SK50	13%	25%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	59%
	認破片数63片	8	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	37
	SK48	15%	15%	0.4%	0.4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	4%	65%
	認破片数267片	39	39	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	174
	SK44	18%	23%	0%	0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2%	1%	0.4%	0.0%	1%	51%
	認破片数242片	43	56	0	0	1	0	0	0	0	5	3	1	0	3	124
	SK43	16%	64%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	16%
南2面	SK43	26	102	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	26
	SK13	22%	44%	1%	0%	1%	0.3%	0.0%	1%	0%	0%	1%	3%	0%	12%	16%
	認破片数593片	133	258	4	0	4	2	0	3	0	0	4	16	0	73	96
	SK08	5%	40%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	5%	0.2%	19%	0.2%	6%	23%
南1面	SK43	24	185	0	0	0	0	9	0	0	22	1	88	1	28	107
	SK05	0%	50%	7%	0%	14%	0%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	14%	7%	
	認破片数14片	0	7	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1

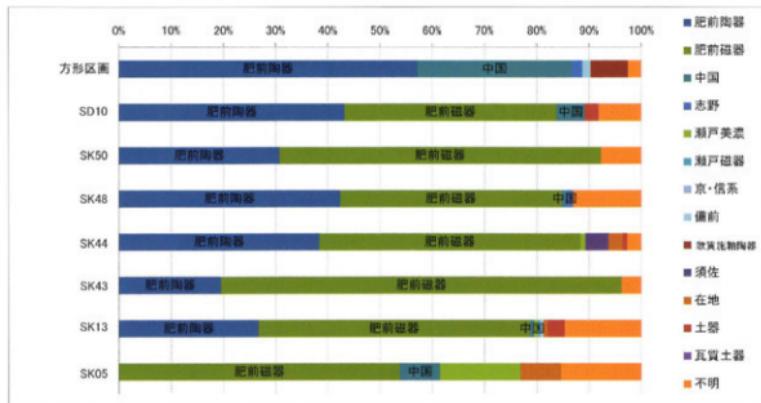


図2. 土師器皿を除いた組成グラフ

表3. 各遺構面の肥前陶磁器の特徴

時 期	遺 構 面	陶 器 の 様 相	磁 器 の 様 相
堀尾期(1607~1633年)	北・南4面	九陶I~期の肥前陶器が主体 *九陶II期砂目皿、漢絵皿も少量存在	中国磁器を使用 *北屋敷では五彩大皿も使用
京極期(1634~1637年)	北3面(南4面?)	九陶II期の肥前陶器が主体 *九陶II期砂目皿増加	中国磁器を使用 *北屋敷では五彩大皿も使用
松平期(1638~1871年)	北3面、南3~2面	九陶II期の肥前陶器が主体 *九陶II期清絵皿増加	九陶II~III期の肥前磁器の使用 (生産年代1650年頃のものが多い)
	北2面、南3~1面	九陶III期の肥前陶器が主体 *器皿手彫の増加	九陶III期の肥前磁器が主体
		九陶III期の肥前陶器が主体 *印花文、二彩唐津もみられる	九陶IV期の肥前磁器が主体 *コンニャク印判、省略雨降文
		九陶IV期の肥前陶器が主体 *扇毛目塗り増加	九陶IV期の肥前磁器が主体 *外青磁、蛇の目凹型高台皿
	北1面、南2面	在地、産地不明の陶器が主体 *産地のバリエーションさまざま	九陶V期の肥前磁器が主体 *広東碗、端反襷目立つ

表4. 各遺構面の年代観

案 1	案 2	北 屋 敷	南 屋 敷	推 定 年 代
堀尾期(1607~1633年)	堀尾期・京極期	4面 屋敷焼SD01 4面 SD04 3面 SK23	4面 方形区画	17世紀初頭~17世紀前半
京極期(1634~1637年)				
松平期(1638~1871年)	松平期		3~2面 SD10	17世紀中頃
		2面 SK18	3~1面 SK50 3~1面 SK48 3~1面 SK44 3~1面 SK43	17世紀中頃~18世紀前半
		1面 SK02	2面 SK13 2面 SK08	18世紀前半~後半
		1面 SK03	1面 SK05	19世紀前半~明治初頭

第3節 松江城下町遺跡(殿町279番地外)出土の土師器皿について

1.はじめに

松江では江戸時代の遺跡が調査の対象となることが近年までなく、松江城で出土したもの他には、江戸時代の土師器皿についての研究はあまり進められてこなかった。

しかしながら、殿町279番地外の発掘調査では、北屋敷、南屋敷といった2つの武家屋敷地において、各遺構面で土師器皿が出土しており、遺構によっては陶磁器を作り良好な一括資料を得ることができた。

今回は、これらの資料を各遺構面でデータ化したものを提示し検討をした後、土師器皿の利用の変遷について考察していきたい。

また、灯明使用と思われる煤の有無を法量ごとに集計しており、用途についても若干触れ、さらに、土師器皿に赤色系のものと白色系の胎土をもつものが存在することに注目し、このデータと胎土分析の結果を比較検討してみたい。

2.データの処理方法について

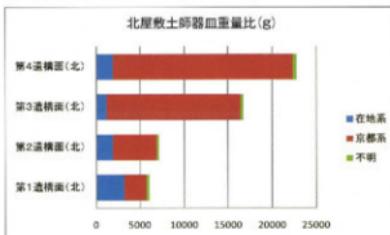
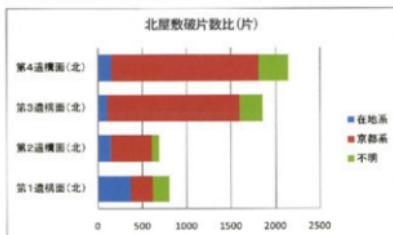
データ化に際して、古代末から中世にかけて在地で焼かれたことが分っているロクロ成形でつくられた糸切り底をもつものを在地系土師器皿として分類した。そして、島根県内では安来市広瀬町富田城など、城に関係する遺跡でよく出土する、京都でつくられた土師器皿を模したいわゆる京都系と呼ばれる手づくねで成形されたものを京都系土師器皿として分類した。また、主に口径が約14cm以上の大形の土師器皿で、ロクロ成形した後に底部付近を指で押さえて、あたかも手づくねで成形したように見せているものがあったが、これはおそらく京都系土師器皿に似せようとして行ったものと考えられるため、これも京都系土師器皿として分類した。

遺構面の総合的なデータでは混入もあり、時期幅が大きくなるため、各遺構面で時期を特定できる陶器を作り一括資料を中心に扱うこととする。ただし、個別の遺構の性格に組成が左右されることも考えられ、注意を要する。

北屋敷、南屋敷の資料において、各遺構面での在地系土師器皿と京都系土師器皿の組成比を破片数、重量でグラフ化を行った(表1・2)。その結果、北屋敷において破片数と重量では第1遺構面と第2遺構面の出土量が逆転することが判明した(表1)。南屋敷でも、逆転とはいかなないまでも比率の差が目立つ部分が認められた(表2)。これは、小片化した破片の多かった18世紀代から明治にかけての遺構面の破片量の割合

表1. 北屋敷土師器皿組成表

破片数(片)	在地系	京都系	不明	総破片数
第4遺構面(北)	148	1664	329	2141
第3遺構面(北)	108	1481	266	1855
第2遺構面(北)	146	461	76	683
第1遺構面(北)	369	241	193	803



が大きくなってしまったものと思われる。陶磁器のように様々な器種のものが混じるものを重量比に置き換えると、大形の製品の比率が大きくなりやすいが、土師器皿のように同一の器種の場合は、むしろ重量比のほうが有効と言えるため、以降は重量比のみを用いてデータを提示することにする。

小皿、中皿、大皿とした基準は、1cm単位で口径のデータを出したところ、11cm台から13cm台の使用が一番多く、この一群を中皿、10cm台以下を小皿、14cm台以上を大皿として集計した。

3. 各屋敷地での土師器皿の様相

ここでは、各屋敷での土師器皿の様相を古い遺構面ごとに説明していく。

<北屋敷>

第4遺構面は、礎石建物SB03に付随する雨落ち溝であるSD04と北屋敷から屋敷境である廃掘り溝に廃棄された屋敷境SD01からの一括資料を扱う。これらの遺構は、17世紀初頭～前半を示す陶磁器が共存するものである。

SD04一括資料で、在地系土師器皿が7%と少なく、小皿と中皿だけであった。京都系土師器皿が93%と大きな割合を示す(図1)。ここで見られる京都系土師器皿は内面に「2」字状あるいは「の」字状のナデ上げ調整を施し、外縁の指圧痕を口縁部付近だけ横ナデして消す、といった京都系の特徴とされる調整痕がよく残るものである。また、大中小のバリエーションをもつ。中でも口径約12cm程度の中皿が一番多い。

屋敷境の溝に北屋敷側から廃棄されていた屋敷境SD01一括資料では、在地系土師器皿は7%しか存在せず、いずれも中皿であった(図2)。ほとんどの割合を示す京都系土師器皿は、小皿の占める割合は少なく、その中で口径約9cm程度のものが多い。中皿が直角的に多く、その次に大皿が多い。ここではSD04に比べて大皿が多く出土している。また大皿には、ロクロ成形後に指壓さえにより手づくね風に仕上げるものがある。手づくね成形のものに比べ、器厚が均一で、回転横ナデの時に付いたであろう直線的な条線が残るため、おそらくロクロ成形した後に底部付近を指壓さえし、京都系土師器皿を意識して作成したものと思われる。

第3遺構面は、1634～1637年にこの屋敷地に住んでいたことが分かっている「佐々九郎兵衛」名の木簡と17世紀前半の陶磁器が共存する廃棄土坑SK23の一括資料を扱う。

SK23から出土した一括資料において、在地系土師器皿が2%、京都系土師器皿が98%であった(図3)。在地系土師器皿は、小皿は細片が1片、中皿も口径が約11cmのものが1点あるだけである。京都系土師器皿は、口径約5cmの小皿が出土しており、これはロクロ成形の後に底部だけに指壓さえを施すもので、京都系を意識したものと思われる。また、小皿で口径約9cmのものがあり、口径に対する器高がやや低いものである。一番大きな割合を占める中皿は、内面に「2」字状のナデ上げを施し、それにより底部と体部の境をしっかりと定め、外縁は指壓さえをした後に口縁部付近を横ナデして指圧痕を消す、京都系の特徴的をよく表すものがほとんどである。大皿については口径が約15cmのもので、やはり京都系土師器に特徴的なつくり方で仕上げられている。

第2遺構面では前節で述べるとおり良好な一括資料がないが、比較的まとまった遺物が出土し、第1遺構面と第3遺構面に伴う陶磁器の年代の間を埋める資料である廃棄土坑SK18の一括資料を扱うことにする。この遺構からは17世紀中頃～18世紀前半を示す陶磁器が出土している。

SK18一括資料では、在地系土師器皿が99%、京都系土師器皿は1%を占める(図4)。在地系土師器皿は小皿が多く、第1遺構面出土の在地系の小皿に比べて、口径が約10cm程度と大きいもので、やや器厚が厚いのが特徴である。

また、第2遺構面全体で見ても第3、4遺構面よりも在地系土師器皿の割合が大きくなっている。

第1遺構面は石積方形土坑SK02・SK03に廃棄された一括資料を扱うこととする。

SK02では18世紀代の把柄磁器などとともに在地系土師器皿と京都系土師器皿が両方出土している(図

表2. 南屋敷土師器皿組成表

破片数(片)	在地系	京都系	不明	總破片数	重量(g)	在地系	京都系	不明	總重量
第4造構面(南)	300	1393	220	1913	4711.49	17321.54	561.4	22654.43	
第3-2造構面(南)	57	339	51	447	971.3	3844.08	247.92	5063.3	
第3-1造構面(南)	545	85	185	815	9228.65	1474.54	703.25	11406.44	
第3造構面(南)	345	432	674	1451	4184.19	6474.37	2638.39	13296.95	
第2造構面(南)	781	399	729	1909	9261.06	4147.67	2250.81	15659.54	
第1造構面(南)	30	13	25	68	216.03	93.89	74.61	384.53	

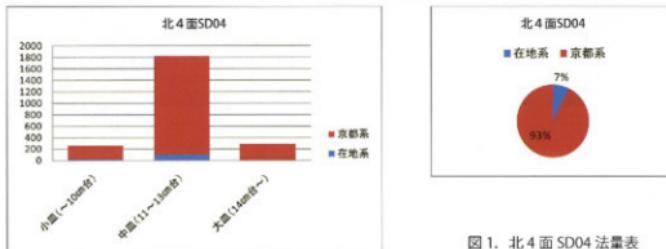
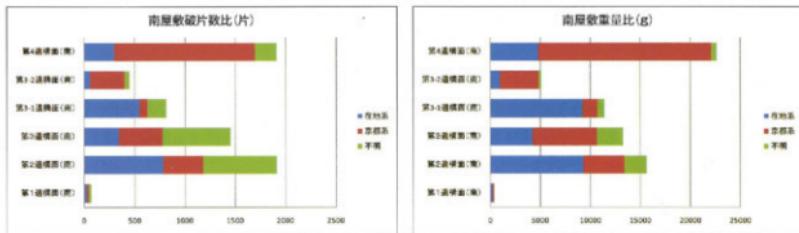


図1. 北4面SD04法量表

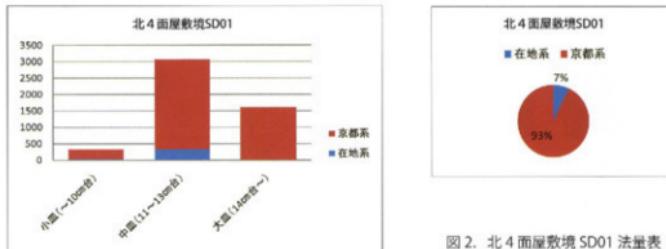


図2. 北4面屋敷境SD01法量表

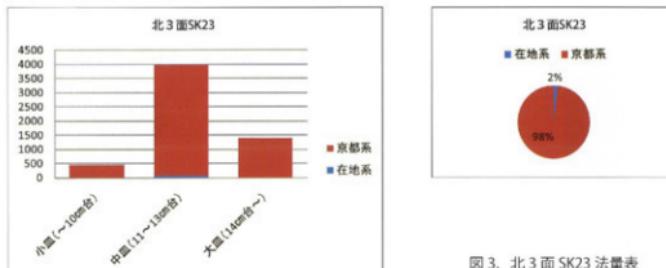


図3. 北3面SK23法量表

5)。

在地系土師器皿の方が72%と大きな割合を占めるものの、京都系土師器皿も28%存在する。在地系土師器皿は大皿が1点出土しているが、ほとんどは小皿、中皿である。京都系土師器皿は中皿が主である。

SK03では19世紀前半から明治初頭にかけての陶磁器が共伴し、在地系土師器皿がほとんどを占める(図6)。また、出土した在地系土師器皿はほとんどが口径約8cmの小皿である。

共伴する陶磁器からSK02がSK03より廃棄年代が古い遺構の可能性があり、同じ第1遺構面の中でも年代が下るにつれ、在地系土師器皿の占める割合が大きくなる傾向が読み取れる。

<南屋敷>

第4遺構面は遺構面全体が第3遺構面の形成土にパックされた状態で検出できた。この中で、建物の年代を示す良好な一括資料である方形区画から出土したものを扱うことにする。共伴する陶磁器は17世紀初頭

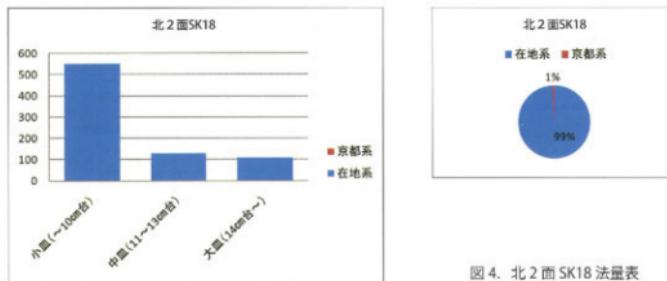


図4. 北2面SK18法量表

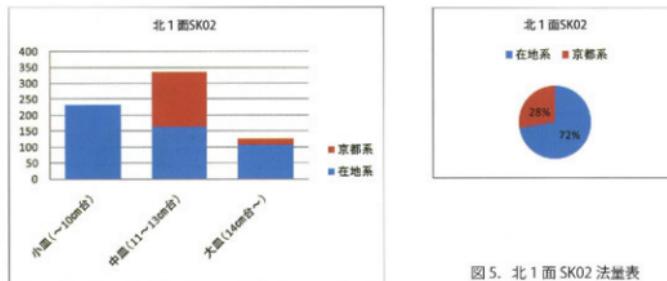


図5. 北1面SK02法量表

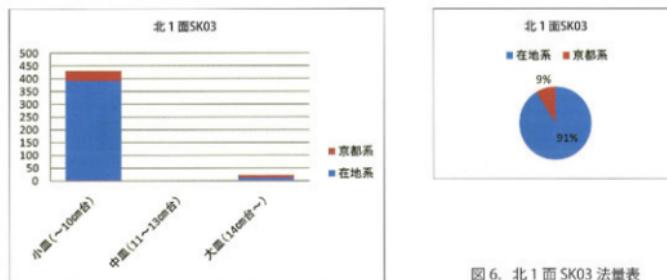


図6. 北1面SK03法量表

から前半にかけてのものである。

この区画では京都系土師器皿が85%、在地系土師器皿は15%を占める(図7)。京都系土師器皿は、北屋敷の第3、4遺構面と同様に中皿が最も多く、その次に大皿が多く存在する。小皿は9cm程度のものが多い。また、北屋敷の京都系土師器皿と同様に「2」字状あるいは「の」字状の内面ナデ上げ調整、口縁部付近に横ナデを施して指頭圧痕を消すといった京都系特有の調整が施される。在地系土師器皿は小皿と中皿が存在し、中皿の方が小皿よりやや多い。

同じ遺構面の方形区画内でも、台所と考えられる礫敷遺構SK03のように在地系土師器皿しか出土しない遺構もあり、使用される場所であるいは用途で在地系と京都系を使い別けている可能性が推定される。

第3-2遺構面は、建物に伴う雨落ち溝SD10からの一括資料を扱う。この遺構からは17世紀中頃を示す陶磁器が出土している。

SD10は京都系土師器皿の割合が62%、在地系土師器皿は38%を占め、第4遺構面よりも在地系土師器皿の割合が大きくなっていることが注目される(図8)。これは、第3-2遺構面全体のデータでも同様の割合を示す。

京都系土師器皿については、この遺構では中皿よりも大皿の方が大きな割合を示すが、第3-2遺構面全体でのデータでは中皿の割合の方が大きい。よって、使用目的で大きさを使い別けている可能性が考えられる。また、在地系土師器皿は小皿と中皿が存在し、小皿の割合の方が大きい。

第3-1遺構面では廃棄土坑がいくつも検出され、良好な一括資料を得ることができた。ここでは、この遺構面の年代幅を示す4つの廃棄土坑SK50・48・44・43を取り上げる。これらの廃棄土坑では、いずれも在地系土師器皿の中皿が1番大きな割合を占めている。ただし、京都系土師器皿の有無で若干の差異が認められる。

SK50は17世紀前半から18世紀代の陶磁器が共存し、中でも17世紀中頃のものが多い遺構である。在

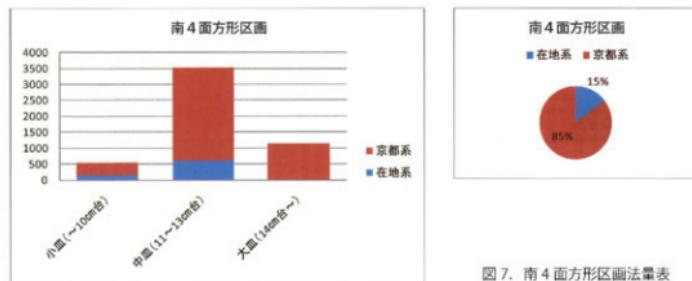


図7. 南4面方形区画法量表

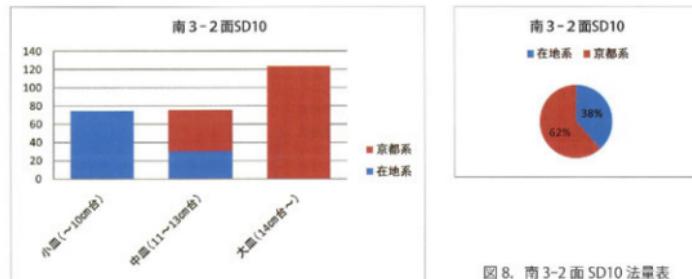


図8. 南3-2面 SD10 法量表

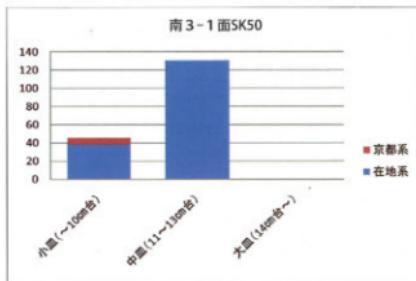


図9. 南3-1面SK50 法量表

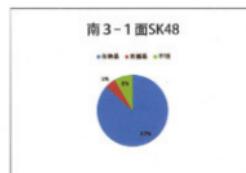
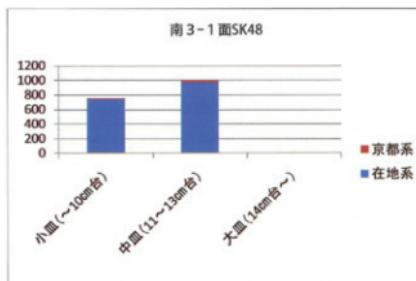


図10. 南3-1面SK48 法量表

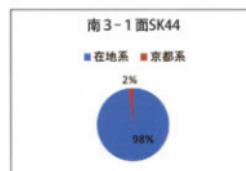
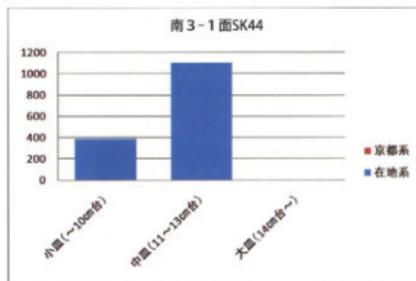


図11. 南3-1面SK44 法量表

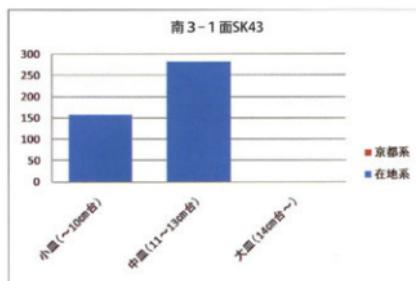


図12. 南3-1面SK43 法量表

地系土師器皿が96%、京都系土師器皿は4%を占める。在地系土師器皿は小皿と中皿のみで、中皿が主体となっている。京都系土師器皿が2点出土しているが、口縁部の欠損のため1点は法量グラフに表れていない(図9)。

SK48は17世紀後半から18世紀代の陶磁器が共伴し、中でも17世紀後半のものが多い遺構である。在地系土師器皿が87%、京都系土師器皿が5%を占める(図10)。在地系土師器皿は小皿と中皿のみで、SK08に比べて小皿の割合が大きくなっている。京都系土師器皿は大中小と存在するが、中皿が多い。

SK44は17世紀後半から18世紀代の陶磁器が共伴し、肥前磁器では18世紀代を示すものが多くの遺構である。在地系土師器皿が98%で、京都系土師器皿が2%を占める(図11)。在地系土師器皿は小皿と中皿のみである。京都系土師器皿は2点出土しているが、口縁部の欠損のため法量グラフには表れていない。

SK43は17世紀前半から18世紀代の陶磁器が共伴し、SK44よりも18世紀代を示す肥前磁器が多く出土する遺構である。在地系土師器皿が100%を占め、京都系土師器皿が1点も出土していない(図12)。在地系土師器皿は小皿と中皿のみで、小皿の比率がやや高くなっている。

第2遺構面では、18世紀代が主体となる陶磁器と共伴する廃棄土坑SK13・08の一括資料を扱う。

SK13は京都系土師器が68%、在地系土師器皿が32%を占める(図13)。京都系土師器皿は小中大とあるが、中皿が主体となっている。在地系土師器皿は小皿と中皿のみで、小皿の比率が高い。

SK08は在地系土師器皿が92%、在地系土師器皿が8%を占める(図14)。在地系土師器皿は小皿のみで、京都系土師器皿は法量不明の刷片しか分かっていない。

SK13は、共伴する陶磁器が18世紀代のものが主体であるものの、17世紀前半の陶磁器も混じっており、このために京都系土師器皿の割合が大きくなっている可能性が高い。しかし、SK13とSK08では土師器皿の使用率がかなり低くなることでは共通している(表18)。

第1遺構面では遺構面全体でも68片しか存在しないが、幕末にあたる肥前磁器が主体を示すSK05では、

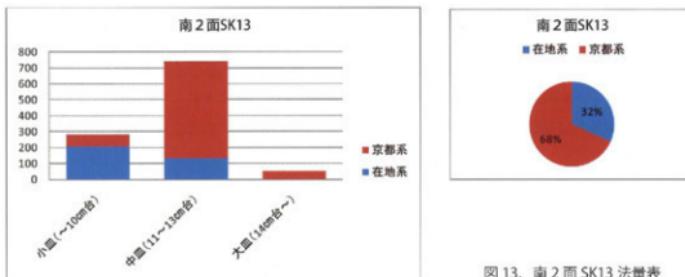


図13. 南2面 SK13 法量表



図14. 南2面 SK08 法量表

在地系土師器皿が1片出土している。口縁部が欠損しているが、おそらく小皿と思われる。

4. 調査地内出土上師器皿の変遷(図15)

上記のこととふまえて、調査地内で出土した土師器皿の変遷模式図を作成してみた。この模式図に掲載されている実測図は、年代の分かる陶磁器と共に作る遺構から出土したもの、南屋敷の方形区画内出土のもののみを使用している。この模式図を使用しながら、各屋敷の土師器皿の変遷を概観してみたい。

北屋敷では17世紀初頭から中頃にかけての遺構面では主に京都系土師器皿が使用されていたようである。使用される法量は、各遺構面を通じて中皿が最も多く、その次に大皿が挙げられる。大皿は主に17世紀初頭から前半にあたる第4、3遺構面で出土点数が多い。在地系土師器皿は、各遺構面で出土しているため、江戸時代を通じて使用されていたものと思われるが、その使用は幕末にかけて最も多くなるようである。その中で、17世紀初頭から小皿、中皿のバリエーションがあり、17世紀初頭から前半、中頃にかけては中皿の使用が主体であったものが、それ以降は小皿が主になっていき、幕末になるとほとんど小皿しか使用されなくなっていくようである。第1遺構面では、大皿が2枚セットで使用されている例(北SK04 脱衣箱内)があり、外側底部がヘラ削り調整が施されている。しかし、SK02で出土した大皿は外側底部が回転糸切り調整であるため、脱衣皿とは断言できない。

南屋敷では17世紀初頭から中頃にかけての第4、3-2遺構面では主に京都系土師器皿が使用されていたようである。使用される法量は、各遺構面を通じて中皿が最も多く、これらの点では北屋敷と同様である。17世紀中頃以降の第3-1遺構面に入ってくると、在地系土師器皿の使用が少しだけ増えている。17世紀中頃から18世紀前半の年代を示す北屋敷第2遺構面検出のSK18でも、在地系土師器皿がほとんどの割合を占めることから、17世紀後半からは、京都系土師器皿の使用から在地系土師器皿の使用に主が切り替わる可能性が考えられる。第2遺構面にあたる18世紀代になると、在地系土師器皿が主体となり、その使用は小皿に限られてくるようである。第1遺構面にあたる19世紀代の土師器皿についても、同様のことが言えそうである。

以上のように、北屋敷と南屋敷で共通して言えることは、江戸時代を通じて在地系土師器皿が存在することである。しかし、17世紀初頭から中頃は京都系土師器皿が主に使用され、17世紀後半から少しだいに京都系土師器皿から在地系土師器皿に使用の主体が切り替わっていくようである。

5. 調査地内出土土師器皿の用途について

煤の有無について、小、中、大皿の法量タイプごとで集計した結果、両屋敷とともに、在地系、京都系のいずれの法量タイプにおいても、灯明皿に使用されていたようである。おそらく、使用する場所によって京都系、在地系あるいは各法量タイプを使い別けていたと考えられる。その中で、京都系土師器皿では中皿が、在地系土師器皿では小皿が基本的に灯明皿として使用されることが多かったと思われる。

さらに、陶磁器と土師器皿の割合を北屋敷、南屋敷で見てみると(表9、10)、遺構の性格に左右される可能性も含むが、北屋敷第4遺構面の屋敷境SD01では87%、SD04では85%を占める。北屋敷第3遺構面SK23では82%、北屋敷第2遺構面SK18では28%を占める。北屋敷第1遺構面のSK02では45%、SK03では7%を占める。南屋敷第4遺構面の方形区画では68%を占める。南屋敷3-2遺構面のSD10では27%を占める。南屋敷3-1遺構面のSK50では59%、SK48では65%、SK44では51%、SK43では16%を占める。南屋敷第2遺構面のSK13では16%、SK08では23%を占める。南屋敷第1遺構面SK05では7%を占める。

以上のように、上層の遺構面になるにつれて土師器皿の使用率が下がることが分かる。これは、各屋敷の遺構面全体を通して見ても同様であった。大きな画期として、北屋敷第2遺構面SK18、南屋敷第3-1遺

構面SK43から、土師器皿の使用率が激減する。前節で説明のあるとおり、それぞれの遺構の一括資料から推定した遺構面の年代観は、北屋敷第2遺構面が17世紀中頃から18世紀前半で、南屋敷第3-1遺構面も17世紀中頃から18世紀前半であるため、17世紀中頃以降に土師器皿が使用されなくなってきたと言える。また、北屋敷第2遺構面以降では陶器の灯付皿が見られるようになることから、土師器皿から陶器にとって代わられた可能性が高い。

6. 調査地内出土土師器皿の色調について

屋敷ごとの各遺構面の色調比率を紹介する。橙褐色の胎土をもつものを赤色系、黄褐色の胎土をもつものを白色系として、在地系土師器皿の赤色系、白色系、京都系土師器皿に赤色系、白色系の比率を円グラフに表してみた(図16、17)。

このグラフからは、北屋敷、南屋敷とともに京都系土師器皿がほとんど白色系であることが分かる。また、在地系土師器皿は、北屋敷と南屋敷の第1遺構面では、赤色系のものが白色系のものよりやや多いなど、比率に遺構面で差は見られるものの1つの色にほぼまとまるということはないようである。

胎土分析では、「手づくねは、ほぼ1つにまとめた」という結果が出ており、このことは各屋敷、各遺構面において京都系土師器皿で白色系のものが主な割合を示すことからもうなづける。また、「ロクロ成形のものは、複数の胎土に分析できた。」、「ロクロ成形のものは、時期によっても胎土が異なっている。」という結果が出ている。各面で在地系土師器皿の赤・白色系の比率が一定に定まらないことは、このことに由来するものと思われる。さらに、分析にかけた資料において、胎土組成でA群、B群、C群と大きく別けられているが、この中の色調がどのように別けられるのか調べてみた。その結果、B群では14点中10点が赤色系、3点が白色系、色不明1点と別けられた。これらの資料は、北、南屋敷の第1、2遺構面から出土したもので、第1遺構面がやや赤色系が多いことと合致する。A群は、北屋敷、南屋敷の第3、4遺構面で出土したもので、10点中赤色系が5点、白色系が5点とほぼ同率であった。C群は、南の第2遺構面、第3遺構面の資料の一部から限られ、3点中3点が白色系であった。

以上のことから、胎土分析からも証明されるように、京都系土師器皿が同じ場所で採取された土を用いて1ヶ所の窯またはいくつかの窯が作成した可能性が高いと言える。また、在地系土師器皿に関しては、胎土分析では、第1、2遺構面ではB群、第3、4遺構面ではA群、南屋敷第2、3遺構面の一部でC群と別けられているが、A群、B群の中で赤色系と白色系と別かれることが判明した。これについては、採取した土が近い場所にあるものの、微妙な胎土の組成により焼成時に色の差が出てしまうものなのかは、今回は判断がつかなかった。今後、新たな資料を加えて分析を進める必要があると思われる。

7. おわりに

今回は詳しく取り上げることができなかつたが、京都系土師器皿に特徴的な器形で、底部中央を上げ底状に仕上げる「へそ皿」と呼ばれるものも挙げられるが、北屋敷と南屋敷でも少数ながら確認された。しかしながら、やや上げ底になっているものが大半で、この器形をつくることが形態化されている可能性もある。また、京都系土師器皿の内面調整で、ナデ上げのために底部と体部の境を凹陥状にへこませる調整方法が変化し、工具によってわざわざ圓線を施すものも少数ながら認められた。この調整方法は、松江城から出土した京都系土師器皿でも確認されている。以上のような、京都系土師器皿に見られる調整、器形は、17世紀前半にあたる遺構から出土したものに比較的多く認められた。

今回は、2つの武家屋敷における土師器皿の様相と変遷を概観するまでにしか至らなかつた。器形、調整といった細かい分類ができていないが、松江城下町の発掘調査は現在も続けられ、日々資料は増加している。今回の資料が、今後の研究の足がかりとなればと思う。

参考文献

- ・古賀信幸「中国地方の京都系土師器皿-戦国期の資料を中心として-」
- ・日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究XIV』1999年
- ・中井淳史「土師器生産体制変容の一鈞-中世末期の山陰東部地域を中心に」
- ・中世土器研究会『中世土器研究論集-中世土器研究会20周年記念論集-』2001年
- ・小森俊寛「京から出土する土器の緯年の研究」京都編集工房 2005年

第3節 松江城下町遺跡(殿町279番地外)出土の土師器皿について

土器種類	在地系土師器皿			京都系土師器皿			在地系上野器皿			京都系七軒器皿			面数
	小皿	中皿	大皿										
北4面 SD04	1015 1016 1017 1018	1019 1020 1021 1022	1023 1024 1025 1026	1027 1028 1029 1030	1031 1032 1033 1034	1035 1036 1037 1038	1039 1040 1041 1042	1043 1044 1045 1046	1047 1048 1049 1050	1051 1052 1053 1054	1055 1056 1057 1058	1059 1060 1061 1062	南4面 万形区面
北5面 SD05	2207 2208 2209 2210 2211	2212 2213 2214 2215 2216	2217 2218 2219 2220 2221	2222 2223 2224 2225 2226	2227 2228 2229 2230 2231	2232 2233 2234 2235 2236	2237 2238 2239 2240 2241	2242 2243 2244 2245 2246	2247 2248 2249 2250 2251	2252 2253 2254 2255 2256	2257 2258 2259 2260 2261	2262 2263 2264 2265 2266	南3-2面 SD10
北3面 SK23	306 402 403	404 405 406	407 408 409	410 411 412	413 414 415	416 417 418	419 420 421	422 423 424	425 426 427	428 429 430	431 432 433	434 435 436	南3-1面 SK50
北2面 SK18	409 410 411	412 413 414	415 416 417	418 419 420	421 422 423	424 425 426	427 428 429	430 431 432	433 434 435	436 437 438	439 440 441	442 443 444	南2面 SK13
北1面 SK02	1203 1204 1205	1206 1207 1208	1209 1210 1211	1212 1213 1214	1215 1216 1217	1218 1219 1220	1221 1222 1223	1224 1225 1226	1227 1228 1229	1230 1231 1232	1233 1234 1235	1236 1237 1238	南2面 SK08
													南1面 SK03

図15 調査地出土土師器皿変遷模式図(土師器皿S=1/8)

表3. 北4面 SD04 法量表

		小皿(～10cm台)		中皿(11～13cm台)		大皿(14cm台～)	
在地系		10.9		102.8		0	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
京都系		10.9	0	25.7	77.1	0	0
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
		247		1717.2		124.5	
在京系		煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし
		91.9	155.1	1127.9	589.3	124.5	168.5

表4. 北4面屋敷境 SD01 法量表

		小皿(～10cm台)		中皿(11～13cm台)		大皿(14cm台～)	
在地系		16.8		337.38		0	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
京都系		16.8	0	316.94	20.48	0	0
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
		311.25		2728.39		1607.1	
在京系		69.06	242.19	1269.56	1458.83	826.84	780.26

表5. 北3面 SK23 法量表

		小皿(～10cm台)		中皿(11～13cm台)		大皿(14cm台～)	
在地系		14		49.8		0	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
京都系	0	14	0	49.8	0	0	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
		447		3921.9		1396.7	
在京系		170.1	276.9	2852.1	1069.8	674.2	722.5

表6. 北2面 SK18 法量表

		小皿(～10cm台)		中皿(11～13cm台)		大皿(14cm台～)	
在地系		550.7		130.8		107.1	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
京都系	532.7	18	63.4	67.4	107.1	0	
	0	0	0	0	0	0	
		0	0	0	0	0	
在京系		0	0	0	0	0	

表7. 北1面 SK02 法量表

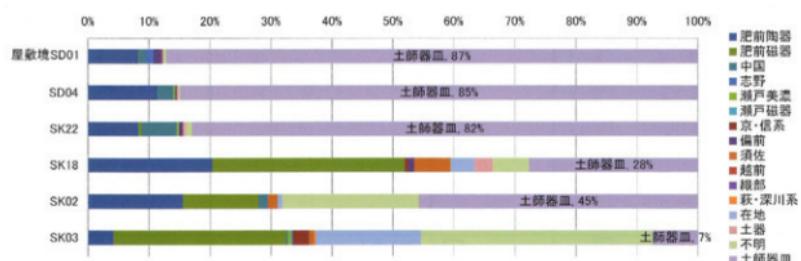
		小皿(～10cm台)		中皿(11～13cm台)		大皿(14cm台～)	
在地系		223.6		163.1		105.3	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
京都系	177.7	55.9	18.4	144.7	0	105.3	
	0	0	171.5		19.7		
		煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし
在京系		0	0	73.8	97.7	14	5.7

表8. 北1面 SK03 法量表

		小皿(～10cm台)		中皿(11～13cm台)		大皿(14cm台～)	
在地系		390.8		0		11.2	
	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	
京都系	197.2	194	0	0	0	11.2	
	37.9		0		9.1		
		煤あり	煤なし	煤あり	煤なし	煤あり	煤なし
在京系		12	26	0	0	9	0

表9. 北屋敷陶磁器・土師器皿組成表

遺構面	遺 構 名	肥前 陶器	肥前 磁器	中国	志野	瀬戸 美濃	瀬戸 磁器	京・ 信系	備前	須佐	越前	織部	萩・ 深川系	在地	土器	不明	土師 器皿
北4面	屋敷境SD01	8%	0.1%	1%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	0.1%	0%	0%	0%	0%	1%	87%
	總破片数811片	67	1	8	11	0	0	0	10	0	1	1	0	0	0	5	707
北3面	SD04	11%	0%	3%	0%	0.3%	0%	0%	0.3%	0%	0%	0%	0%	0%	0.3%	0.3%	85%
	總破片数365片	41	0	10	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	310
北2面	SK23	8%	0.5%	6%	0%	0.3%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0.5%	1%	82%
	總破片数622片	51	3	36	0	2	0	0	4	0	0	0	0	0	3	6	513
北1面	SK18	20%	32%	0%	0%	0%	0%	0.5%	1%	6%	0%	0%	0%	4%	3%	6%	28%
	總破片数202片	41	64	0	0	0	0	1	2	12	0	0	0	8	6	12	56
SK02	15%	12%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	22%	45%
	總破片数132片	20	16	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	29	59
SK03	4%	26%	0.2%	0%	0.4%	0.3%	25	0.15%	1%	0%	0%	0.2%	16%	0%	35%	7%	
	總破片数1205片	46	316	3	0	5	4	29	1	9	0	0	3	193	0	424	83



第3節 松江城下町遺跡(殿町279番地外)出土の土師器皿について

表 10. 南4面 方形区画法量表

方式別・南・西両面		万ルートキロ当り		
方形区画	小面(～10cm台)	中面(11～30cm)	大面(34cm台～)	
在地系	152.65	606.61	0	
	0 152.65	煤なし 370.85	煤あり 235.76	煤なし 0 0
京都系	389.17	297.95	1143.68	
	煤あり 107.41	煤なし 281.76	煤あり 155.62	煤なし 123.33 117.17 966.69

表 12 南 3-1 面 SK50 法標表

表12. 南・中・北3区分の風速表					
	小風(～10cm/s)	中風(11～30cm/s)	大風(40cm/s～)		
SK50	37.96	130.38	0		
	0	37.96	0	0	0
在地系	煤あり 0	煤なし 37.96	煤あり 0	煤なし 0	煤なし 0
	7.1	0	0	0	0
京都系	煤あり 0	煤なし 7.3	煤あり 0	煤なし 0	煤あり 0
	0	0	0	0	0

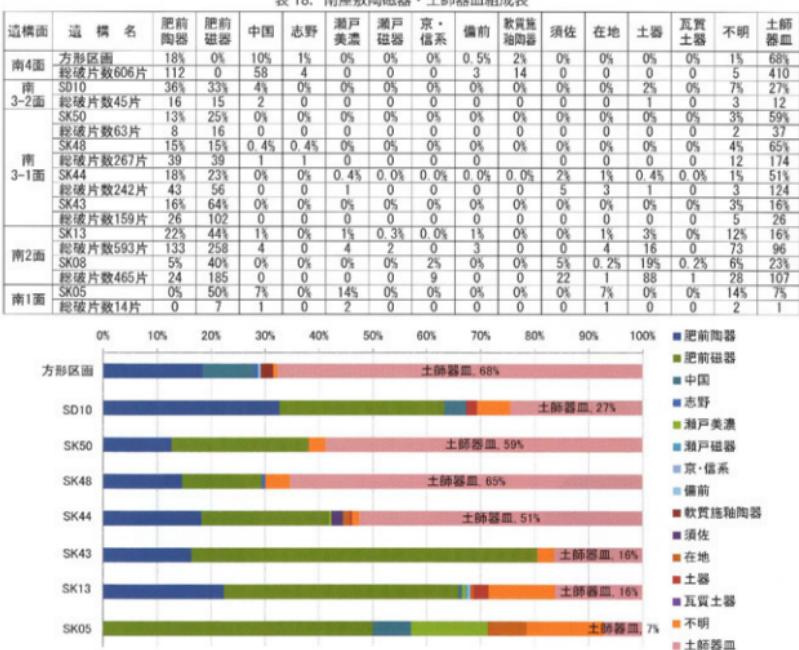
表 14 南 3-1 而 SK44 法標表

表14-3 関-3台・3M4W法面表		山側		谷側	
SK44		小畠(～10cm台)	中畠(11～30cm台)	大畠(4cm台～)	
在地系	383.95		1098.72	0	
	煤あり 304.43	燃なし 79.52	煤あり 964.53	燃なし 34.19	0 0
京都系	0	0	0	0	0
	煤あり 0	燃なし 0	煤あり 0	燃なし 0	煤あり 0

表 16. 南2面 SK13 法量

		表-10. 南二箇区 SK13地盤調査			
		小皿(～10cm台)	中皿(11～30cm台)	大皿(14cm台～)	
SK13	207.03	134		0	
	107.04	煤あり 99.99	煤なし 69.3	煤あり 64.7	0 0
在京都系	72.12		606 63		52 9
	61.75	煤あり 10.43	煤なし 214.67	煤あり 291.06	煤なし 52.9

表 18. 南屋敷脚磁器・土師器皿組成表



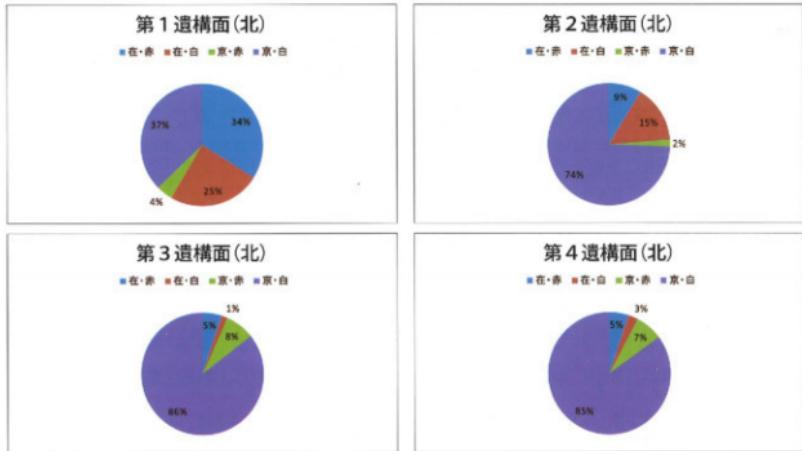


図 16. 北屋敷出土土師器皿色調組成グラフ

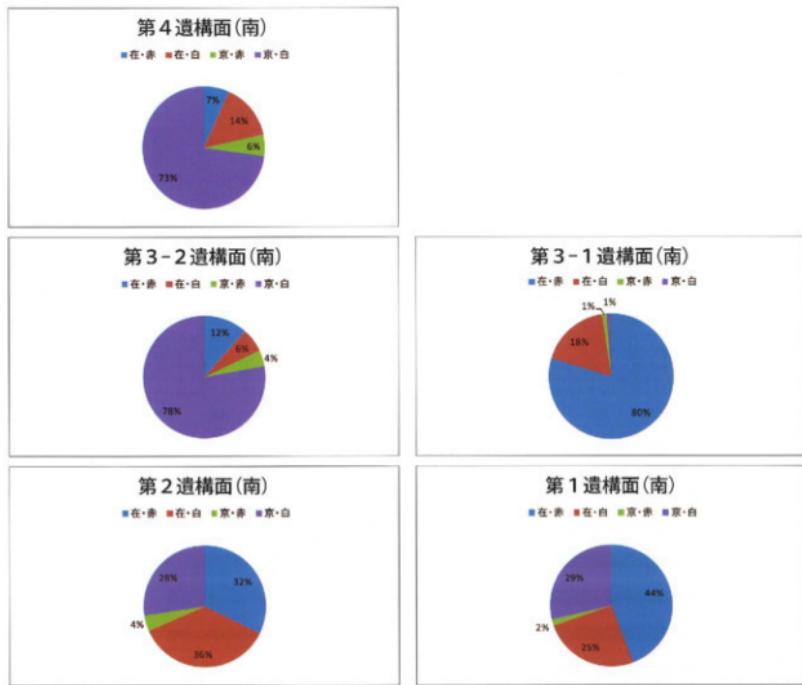


図 17. 南屋敷出土土師器皿色調組成グラフ

松江市文化財調査報告書 第139集

松江城下町遺跡(殿町287番地)・(殿町279番地外)

発掘調査報告書

—松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書—

本文編

平成23(2011)年3月

編集・発行 烏根県松江市教育委員会
財團法人 松江市教育文化振興事業団

印 刷 有限会社 黒潮社
島根県松江市向島町182-3

